

史料研究・成果公開

共同利用・共同研究拠点による研究・成果

特定共同研究

〔古代史料領域〕

研究課題 奈良平安時代の大規模写経群形成に関する史料学研究―小川八幡

神社大般若経を核として―

研究経費 一五〇万円

研究組織

研究代表者 稲田奈津子

所内共同研究者 山口英男 黒須友里江 小塩慶 高島晶彦 中村寛 洪

谷綾子

所外共同研究員 川尻秋生（早稲田大学） 坂本亮太（和歌山県立博物館）

杉本一樹（宮内庁正倉院事務所） 竹中康彦（和歌山県

立博物館） 西本昌弘（関西大学） 野尻忠（九州国立博

物館） 本郷真紹（立命館大学） 宮崎肇（東京大学） 渡

辺晃宏（奈良大学） 吉川真司（京都大学）

研究の概要

（1）課題の概要

和歌山県紀美野町の小川八幡神社が所蔵する大般若経（小川八幡神社経）は、全六〇〇巻（現状は折本六〇〇帖）が現存し、約一二〇巻の奈良時代写経、約三八〇巻の平安時代写経を含むことが知られている。一九七八年に学界で紹介されて以来、古代の文化史・地域史等に豊かな情報を提供する研究対象として注目され、本格的な研究利用のための詳細な原本調査が待たれていた史料群である。関係諸方面の尽力によって環境が整い、二〇一九年度よ

り原本調査にもとづく調書作成とデジタル写真撮影を進めたところである。それを受けて、特に重要な課題として残されているのが、各経巻の時代判定であり、それに基づく本大般若経の成立過程（複数経巻群の取り合わせがどのようになされたか）の分析である。その検討には、料紙・紙質・書風の分析が有効な方法と考えられ、そこで得られたデータは、今後の古写経調査の基準データとしての意味も持つものと予想される。近年、各方面で進展している大規模古写経群の調査成果との比較研究の素材ともなり、幅広い研究発展が期待できる。

（2）研究の成果

現状の全六〇〇巻は、多様な書写時期や書写背景をもつ経巻群がとりあわされたものであるが、奥書等によりその書写事情が具体的に判明する経巻は一部にとどまる。そこで本共同研究では、料紙・書風・書写形態などの分析に重点を置き、各経巻の時代判定やグルーピングにより、とりあわせの状況を解明することを目指した。

料紙調査においては、豊富な調査経験をもつ本所技術部メンバーを中心に分析を進めるとともに、その「職人的所見」を共有する手段として、透過光撮影データの収集もおこなった。調査の結果、時代ごとに紙質に顕著な相違が認められ、時代判定もある程度可能であることが確認された。

書風調査においては、情報学を専門とするメンバーが自動認識による文字の切り出しデータの収集をおこない、書史を専門とするメンバーにより分析が進められ、一部については筆者の判定が可能なレベルにまで達することができた。文字データ収集に関しては、文字の重なりや字間に関するデータなど、さらなる高度化が目指されている。

書写形態については、書写に際しての料紙利用の在り方（料紙の規格、継ぎ方など）、界線の引き方や文字の配置などが詳細に観察され、その成果にもとづくグルーピングや時代判定が試みられた。奈良・平安写経の豊富な調

査経験をもつメンバーが多く参加したことにより、時代判定が進められるとともに、地域性や作成階層など様々な要素について議論された。

本共同研究の成果は、次年度以降に成果報告書としてまとめる予定である。

【中世史料領域】

研究課題 賀茂別雷神社文書・社家文書の調査・研究

研究経費 一五〇万円

研究組織

研究代表者 金子拓

所内共同研究者 遠藤基郎 遠藤珠紀 木下竜馬 川本慎白 林晃弘 石津裕之

所外共同研究員 伊藤真昭（京都西山短期大学） 宇野日出生（同志社大学） 加藤直弥（國學院大学） 久留島典子（神奈川大学）

五島邦治（京都芸術大学） 志賀節子 高橋敏子 竹田和夫（新潟大学） 辰田芳雄（岡山県立岡山朝日高等学校）

谷徹也（立命館大学） 谷口央（東京都立大学） 中川学（東北大学） 野田泰三（京都橘大学） 東昇（京都府立大学） 藤田恒春（賀茂別雷神社史料編纂会） 藤本仁文（京都府立大学） 三枝暁子（東京大学） 山本宗尚（宇宙航空研究開発機構） 横井靖仁（関西大学）

研究の概要

（1）課題の概要

これまで史料編纂所では、賀茂別雷神社文書（京都府賀茂別雷神社所蔵）について継続的な調査・撮影を行い、画像やデータの蓄積とその公開を進めてきた。賀茂別雷神社文書は、近年の京都府による調査で約一四〇〇〇点に整理されたが、史料編纂所ではこのうち五九〇四点（三二七七〇コマ）のデジタル化を終えている（二〇二二年度までのデータ）。

同社文書については、文明八年（一四七六）の賀茂一社争乱といわれる祠官と氏人との争い以前のものは少なく、これ以後、江戸時代前期の寛文五年（一六六五）頃までの文書を非常に多く残している。本研究においては、こ

の期間の文書約八〇〇〇点のうち、中世を中心に調査・撮影をさらに継続し、デジタル化・データベースからの公開（研究資源化）を進めるとともに、これらを用いた賀茂別雷神社、同社の文書、および同社の神事、組織、所領について、また、同社の文書を用いた中近世の政治史、文化史などの研究を行う。さらに今期は、社司家・氏人家所蔵文書へも調査を広げて研究を行う。

（2）研究の成果

共同研究員それぞれが、賀茂社に関する関心に基づき、賀茂別雷神社・史料編纂所ほか史料所蔵機関において調査を進め、研究会にてその成果を報告することにより、日本史（中世・近世）・神社神道史など多様な立場から参加する共同研究参加者の意見交換がなされ、研究成果の共有が進んだ。また今年度は、共同研究員ではないが、賀茂社の史料に関心を持ち研究を行っているゲスト研究者（若山憲昭氏）をお招きし、研究報告をしていただいた。若山氏は二〇二四年度から共同研究に参加することとなり、同様の関心を持つ研究者の組織拡大につながっている。

賀茂別雷神社文書は四五一点二一九コマを撮影した。また、氏人家文書として中世後期の文書を多く含む岩佐家文書（京都市歴史資料館寄託）の撮影を行い、六三五点一七四八コマの撮影を行い、史料編纂所HCCAT Plusから公開した。

【近世史料領域】

研究課題 近世大名・家臣史料の「読み直し」と研究資源化

研究経費 一二〇万円

研究組織

研究代表者 小宮木代良

所内共同研究者 及川亘 石津裕之

所外共同研究員 阿部大地（佐賀県立図書館） 伊藤昭弘（佐賀大学） 大平直子（佐賀市文化財課） 佐藤孝之（東京大学名誉教授）

清水雅代（佐賀県立図書館） 田久保佳寛（小城市教育委員会） 田畑春香（佐賀県立図書館） 野下俊樹（佐賀県立佐賀城本丸歴史館） 本多美穂（佐賀県立図書館）

研究の概要

（１）課題の概要

佐賀藩家臣坊所鍋島家史料（佐賀県立図書館所蔵）のうちの近世初期の部分を対象とし、多久家史料と密接な関係を持つ当該史料群一点毎の「読み直し」を行う。これまで、代表者および本所近世第一室のメンバーは、佐賀県立図書館等、主に佐賀県内の自治体・機関等において県内近世史料の調査・研究に関わってきた複数の研究者とともに、特定共同研究近世史料領域（二〇一四年度～二〇一五年度に代表者小宮「佐賀藩家臣多久家史料の研究」、二〇一六年度～二〇一七年度に代表者小宮「近世初期大名家における大身家臣史料群の研究資源化」）において、佐賀藩家臣多久家文書の近世前期分約七五〇点の「読み直し」と研究資源化のプロジェクトを進めてきた。これは、二〇一七年度から二〇二二年度にかけて科学研究費（基盤研究C）、二〇一七年度～二〇二二年度 課題番号17K03095 代表小宮木代良「近世大名家臣家史料の共同分析」に引き継がれ、その成果は、二〇二二年十一月に報告書『多久家文書の「読みなおし」』（多久家文書研究会編、東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二二―）としてまとめた。以上の経験や人的ネットワークを前提として、多久家文書と密接な関係を持つ佐賀藩家臣坊所鍋島家史料（佐賀県立図書館所蔵）のうちの近世初期の部分を対象とし、史料一点毎の「読み直し」を行うことをめざし、二〇二二年一月に坊所鍋島家文書研究会を結成、そのメンバーを中心にして本共同研究に参加している。また、小宮が代表、及川・石津・伊藤が分担者である科学研究費補助金基盤研究（C）「近世初期大名発給無年号文書の研究資源化―坊所鍋島家史料を対象として―」（二〇二三年度～二〇二五年度）とも連動させつつ、プロジェクト全体を完成させる。

（２）研究の成果

今年度は、鍋島勝茂書状約一六〇通の検討を終えた。本共同研究として開始する前の昨年度に、鍋島直茂書状を中心に約七〇通を検討しており、これで、坊所鍋島家文書中にあわせて約五〇〇通伝来している鍋島直茂文書および同勝茂文書全体の半分近くを検討したことになる。同時に直茂・勝茂の花

押の分析を進めている。

【海外史料領域】

研究課題 本所所蔵在外日本関係史料の多角的利用のための翻訳研究

研究経費 二〇〇万円（他、繰越金一三八万円）

研究組織

研究代表者 松方冬子

所内共同研究者 岡美穂子 大東敬典

所外共同研究員 大野晃嗣（東北大学） イサベル・田中・ファンダーレ

ン 野澤文二（早稲田大学） フォステイヌ・ペイセ

レ（翻訳家） 森田由紀（翻訳家） 久礼克季（川村学園

女子大学） 富田暁（岡山大学） 中砂明德（京都大学）

真下裕之（神戸大学）

研究の概要

（１）課題の概要

本研究では、本所に所蔵される十六～十九世紀の欧文史料が、刊行・未刊行を問わずその史料価値に応じた十分な活用がなされていない現状に鑑み、その翻訳を通じて、ひろく学界に還元し、多角的な利用を可能にすることを目的とする。扱うのは、ポルトガル領インディア、オランダ東インド会社（VOC）という、広域的な組織の史料である。これらの史料群は、当時の世界を見る際に、貴重かつ豊富な情報を提供するが、今まではおもに日本の対外関係という限られた目的のために翻訳され、利用されてきた。しかし、近年、東洋史、西洋史の研究者も交えて、日葡関係史、日蘭関係史の方法的蓄積をほかに応用する試みがなされており、その需要も大きい。本研究により、本所所蔵欧文史料を利用する研究者が増え、実際に利用されている史料の幅が広がることを期待される。また、新しい問題群に光が当たり、これまでにない形での活用も可能になることも期待される。

（２）研究の成果

①オランダ語翻訳と中国史の知見を総合することにより、地名や人名等の正確な同定が可能となった。

②昨年度同様、定期的に史料翻訳を進め、オランダ東インド会社がアジアの支配者との契約をどのように認識していたのかという問題に取り組んだ。契約に関する範疇や分類、地理的分布などについて得られた情報を、国内外の学会で発表した。

③デイオゴ・ド・コウト『デカダス・ダ・アジア』を読み進めるにあたっての時代背景を理解し、地名の同定が可能となった。

【複合史料領域】

研究課題 荘園絵図調査方法論の高度化と調査関連情報の学術資源化に関する研究

研究経費 一七五万円

研究組織

研究代表者 井上聡

所内共同研究者 藤原重雄 黒嶋敏 小瀬玄士 畑山周平 中村覚 海上

貴彦

所外共同研究員 海野聡（東京大学） 守田逸人（香川大学） 清水亮（埼玉大学）

玉大学） 高橋傑（慶應義塾普通部） 坂本亮太（和歌山

県立博物館） 高田祐一（奈良文化財研究所） 大邑潤三

（東京大学） 額田雅裕（関西大学） 田中水萌（神戸大学）

研究の概要

（１）課題の概要

史料編纂所では、四〇年以上にわたって古代・中世荘園絵図の調査を实践し、その成果を『日本荘園絵図聚影』（本編・釈文編）として刊行してきた。現在、釈文編の最終冊をまとめる段階にあつて、これまでに果たせなかった絵図原本調査・現地調査等の完遂が目指されている。あわせて従前に収集した膨大な調査情報のうち、『聚影』に未収載の各種情報（調査記録・各種地図・航空写真ほか）を整理・総括し、今後の研究進展にむけた学術基盤を整備することが求められている。本研究においては、西日本地域を中心に、未完となっている絵図調査を、現地状況に精通した共同研究員と共に実践することで、研究の精緻化・高度化を図ってゆく。また膨大に蓄積された調査関連情

報の整理・統合を進め、これらが学界共有の学術資源となるよう整備を行う。情報共有にあたっては、各種デジタル技術を援用しつつ、既存の「史料編纂所所蔵荘園絵図模本データベース」や「地理情報蓄積システム」に収載するとともに、様々な機関から発信されている人文地理情報との双方方向性を確立することで、分野を超えた諸研究の基盤となるよう意図している。

（２）研究の成果

前年度に続き、『日本荘園絵図聚影 釈文編4』刊行にむけて、共同研究員と連携することで、中世荘園絵図原本の補充調査ならびに現地踏査を实践することができた。かつまた従前に行ってきた調査データの再検討などを積極的に進め、その成果を二〇二四年三月刊行の『同聚影』に反映させることができた。史料編纂所が一九八〇年代から営々と進めてきた基幹事業たる『同聚影』の編纂・刊行をめぐつて、共同研究員の知見を仰ぎながら、調査方法や成果提示の在り方など、多様な観点から総括できたことは、極めて有意義な経験であつたと自負している。こうした成果は、今後の画像史料解析センタ―を拠点とする諸研究に大いに生かされることになるだろう。加えて既調査データを対象として、デジタル化作業を積極的に実践することで、汎用的な利用環境が整備できるよう企図した。具体的には、絵図関連地名を対象とするデジタル座標情報化や、絵図料紙・法量情報など各種メタデータの作成である。こうしたデータをより有効に活用するため、史料編纂所歴史情報処理システム内にある「地理情報システム」の機能高度化を図り、当該データの実装を始めた。さらに、同システムを他機関と連携して運用しうる環境構築を目指して、共同研究員の所属する諸組織との調整に着手したところである。

一般共同研究

研究課題 松尾大社所蔵史料の研究資源化

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 野村朋弘（京都芸術大学）

所内共同研究者 林遼 畑山周平 山田太造 高島晶彦

所外共同研究員 石井伸宏（鳥取市歴史博物館） 佐々木創（京都芸術大

学） 角田朋彦（駒澤大学） 坪井剛（佛教大学）

研究の概要

（１）課題の概要

本研究は、京都市の桂川西岸に位置する松尾大社が所蔵する史料群を調査・研究し、研究資源化することを目的としている。松尾大社は山城国の古社として大宝年間に創建された。国家祈禱を担う二十二社の内、上七社に位置づけられていた。特に山城国では賀茂神社と並ぶ古社として尊ばれた。そのため古代より催行されている松尾祭は、「国祭」とも呼ばれ、応仁の乱まで勅使が派遣されてきた。本社その他、洛中の西七条の旅所をはじめ、神領として伯耆国東郷荘、越中国松永荘、丹波国桑田荘など多くの荘園を有し、神事を催行してきた。

神事を担ったのは創建時から祠官を勤めた秦氏である。本社に伝わった史料と、社家に伝わり今日では松尾大社に寄贈された史料とが、今日、松尾大社所蔵史料と呼ばれているものである。松尾大社で目録整備されたのが一八〇二年あり、これまでの研究で新出史料も発見され、全体では二五〇〇点ほどであると考えられる。時代としては古代から近代まで幅広く、朝廷・幕府からの発給文書の他、年中行事、祝詞、補任状、社家日誌など多岐にわたる良質な史料を有している。本研究では現状の目録校訂及び新出史料の目録整備をはじめとする全体像の把握を行いつつ、神社史料の料紙研究を進める。これらの成果を広く公開するため博物館での展示を行い、かつまた、学界共有の財産とすべく、史料編纂所のデータベースでデータ公開を進める。

（２）研究の成果

松尾大社が所蔵している史料は、古代から近代まで幅広い時代性を有し、かつまた、公家・武家・社家それぞれが発給している多様性がある。一二四七号以降の社家の東家から寄贈された史料は裏打ちのみが施され、新出史料については当時の状態のままとなっている。これら良質な史料群は、石清水八幡宮や賀茂神社が所蔵している史料群と比しても遜色がない。神社史及び料紙の科学的調査・分析を行うことが可能である。

史料のデータ公開については、松尾大社の御厚意により史料編纂所の人文

学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業の一環として二〇二二年度末に一二四六号まで公開できた。本研究では引き続き目録の校訂及び、社家の東家から寄贈された一二四七号以降と新出史料について目録作成を行った。ただし、新出史料及び既存の撮影された史料について、一部近代史料も含まれており、データ公開については所蔵機関である松尾大社との意見のすり合わせが必要となり、それについては整備を進めつつ、公開を延期している。

また本研究での成果について、二〇二四年に京都文化博物館と鳥取市歴史博物館にて特別展を行うこととなった。新出史料や史料整備、それから得られた知見などを展示する予定である。

研究課題 中近世古文書の料紙に関する総合的科学研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 貫井裕恵（神奈川県立金沢文庫）

所内共同研究者 山田太造 尾上陽介 小瀬玄士 渋谷綾子 高島晶彦

所外共同研究員 天野真志（国立歴史民俗博物館） 小倉慈司（国立歴史民俗博物館） 富田正弘（富山大学名誉教授） 長村祥知

（富山大学） 野村朋弘（京都芸術大学） 柳原敏昭（東

北大学） 高橋修（茨城大学） 大山恒（茂木町教育委員

会） 名和知彦（公益財団法人陽明文庫） 阿部哲人（米

沢市上杉博物館）

研究の概要

（１）課題の概要

古文書や古記録類の料紙は近年、自然科学的な知識や手法を応用し、繊維や添加物等の物質的情報の分析、抄紙過程で生じた痕跡の確認などの科学研究が進められている。本研究は、史料の多様な情報を科学的に検証し、古文書料紙の歴史の変遷に関する検討を行う。

研究では、複数種類のデジタルマイクロスコープを用いて料紙の構造を非破壊的に調査する。特に、構成物の種類・量・密度等の質的解析を行い、料

紙の製造手法や地域的・時期的特性を抽出、生産・使用の実態を検討するとともに歴史的・社会的変遷の復元を行う。対象史料は、史料編纂所所蔵「島津家文書」、金沢文庫・陽明文庫・松尾大社・仁和寺の所蔵史料、ふみの森もてぎ所蔵「茂本文書」、東北大学保管「結城白河家文書」、上杉博物館所蔵「上杉家文書」等である。抄紙過程で付与される糸目や簀目、皺などの表面情報も調査し、中世から戦国期における公家・武家文書の地域的特質や歴史の変遷の検討を行う。

(2) 研究の成果

今年度は令和五年度加速器科学国際育成事業、AI等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業、科研費等の共同研究と連携し、本所所蔵「島津家文書」をはじめ、寿岳文章和紙コレクション、「上杉家文書」、「結城白河文書」、松尾大社所蔵史料等の調査を実施した。複数種類のデジタルマイクロスコープを用いて料紙の撮影を行い、繊維素材や填料の含有量における時代的・地域的変遷を分析するための科学情報の抽出・蓄積を行った。科学情報の解析は現在も進めており、本共同研究終了後も継続する。現在までの結果として、「上杉家文書」等で切紙（堅切紙）の形態や繊維材料の三極利用など、東国における文書料紙の特徴を確認しており、松尾大社所蔵史料や「島津家文書」など西日本とは料紙の製法や使い方が異なるようである。

本研究で料紙の構成物に注目するとともに、他の関連プロジェクトで行われた物理化学分析の結果と比較したことによって、料紙の製造手法や地域的・時期的特性を中心とした情報抽出を進めることができた。これらの情報を利用し、自然災害で被災した史料の修理・保存の研究を進める研究者たちと保存科学の方法について現在検討を行っている。さらに、調査・研究データの利用・公開として、博物館展示での成果発信を二〇二四年度前半に予定している。

研究課題 高野山子院伝来資料の分野横断的研究―金剛三昧院・西南院を中

心に―

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 坂口太郎（高野山大学）

所内共同研究者 渡邊正男 高橋慎一朗

所外共同研究員 伊藤聡（茨城大学） 大河内智之（奈良大学） 木本誠二（高野町教育委員会） 桐田貴史（石水博物館） 小林雄一（京都先端科学大学） 鈴木智大（奈良文化財研究所）

高橋悠介（慶應義塾大学） 土居夏樹（高野山大学） 花田卓司（帝塚山大学） 藤本孝一（龍谷大学）

研究の概要

(1) 課題の概要

本研究は、高野山金剛三昧院・西南院の伝来資料について、分野横断的な調査・研究を行なうものである。金剛三昧院は、高野山に所在する子院の中でも、史料価値の高い古文書を多く伝えることで知られるが、未翻刻の中世・近世文書も見られ、今後調査を進めるべき余地が残されている。また、西南院にも膨大な古文書・聖教が伝来しており、とくに平安・鎌倉期の訓点資料や、高野山の建築指図・両部神道書を含むことから、国語学・建築学・神道学などの他分野との共同調査も必要となる。

そこで本研究では、①「金剛三昧院文書」「西南院文書」中の未翻刻文書・棟札の紹介、②金剛三昧院・西南院所蔵資料の調査・撮影の継続、③西南院所蔵の訓点資料（平安・鎌倉期）・神道印信（室町・戦国期・近世）・神道書などの目録調製、以上の課題を設定して共同研究を推進する。これによって、高野山伝来史料の研究資源化を進め、その重要性を発信していきたい。

(2) 研究の成果

金剛三昧院では、中世・近世文書の整理を継続的に進めるとともに、同院所蔵『舍利勘文』（伝貞慶編）を翻刻し、類本との関係を考察した。また、同院客殿の持仏の間に安置された「地藏菩薩立像」と「八臂弁財天坐像」についても、山本勉氏の協力を仰ぎ調査を行なった。その結果、前者が平安後期制作の木彫像で、かつ後世に別の姿に改変された希少な仏像であることが判明し、納入品の墨書一巻（縦四・八cm）も発見された。また、後者は天文五年（一五三六）の像内銘記を有するもので、戦国期の宿院仏師の造像活動

に貴重な新事例を加えることができた。

さらに、金剛三昧院所蔵の古文書・古典籍・棟札・画像・仏像を、「国宝多宝塔造立八〇〇年記念企画展 高野山金剛三昧院」（鎌倉歴史文化交流館）で展示し、大きな注目を得た。美術史家や博物館学芸員との共同研究によって、調査成果の社会還元が促進されたのは有益であった。

西南院については、重要文化財『西南院文書』第九巻に収められた、元応二年（一三二〇）の高野山大塔供養の記録を翻刻し、後宇多院の密教興隆との関係を考察した。あわせて、西南院に伝わる同供養の指図を紹介し、高野山の根本大塔の沿革について建築史的な検討を行なった。また、西南院に所蔵される平安・鎌倉期の調点資料や中近世神道資料の調査を実施し、書誌情報の入力を進めた。その過程で、室町期の神道印信・血脈に見える僧侶の動向を整理し、室町前期の西南院において、すでに神道灌頂が行われていたことを確認できた。

研究課題 多可町杉原紙研究所所蔵寿岳文章和紙コレクションと近世和紙との比較研究

研究経費 四五万円

研究組織

研究代表者 安平勝利（多可町教育委員会）

所内共同研究者 山家浩樹 高島晶彦

所外共同研究員 湯山賢一（神奈川県立金沢文庫） 大川昭典（元高知県

紙産業技術センター） 地主智彦（文化庁） 本多俊彦（金沢学院大学文学部） 富田正弘（富山大学名誉教授）

研究の概要

（１）課題の概要

多可町杉原紙研究所所蔵寿岳文章和紙コレクションについては、二〇一九・二〇二〇年度に湯山賢一を研究代表として、紙の縦横寸法・厚さ・重さ・密度、原材料や填料、製紙法など物理的技術的な面の解明を試み、一六〇点について繊維填料等の顕微鏡写真の撮影を行った。これらのコレクションの料紙データについては、二〇二二年三月に報告書として刊行したところである

が、なお残る分を二〇二二・二〇二三年度で継続して調査した。湯山共同研究では近代のものである寿岳コレクションから近世和紙生産の地域分布の状況を推察しようという狙いであったが、結果は原材料の繊維にパルプが多く配合されること、抄紙技術近代化の進行、紙製品の全国的な均一化も判明した。にもかかわらず、その紙の名称には檀紙・奉書・杉原・美濃・森下・典具帖・鳥の子・間似合・打雲・中折・半紙・延紙・八寸・三栖・宇陀・高野・西ノ内・程村・泉貨など近世以来の伝統的な名称をもつものが少なくなく、できるだけそれぞれの近世和紙の特徴を系譜的に受け継ぐことを目指していることは間違いない。したがって、安平共同研究では、加賀藩主前田綱紀が収集した近世前中期の和紙コレクションとして知られる尊経閣文庫所蔵百工比照紙類と寿岳コレクションとを比較検討し、その系譜関係の度合いが異なるのかを検討してみることにした。さらに近世における杉原紙・奉書紙系統の展開をよりよく見通すために、史料編纂所所蔵島津家文書の近世部分の料紙調査を加え、もって寿岳らによって播磨発祥とされた杉原紙の変遷を考えるものである。

（２）研究の成果

寿岳文章和紙コレクションの調査については、二〇一九～二〇二一年度の湯山代表の共同研究で調査を行ったうちの一六〇点について、二〇二一度、解説・調査データ・Ｃ染色液検査顕微鏡写真を載せた報告書を刊行し、近代和紙の特徴を明らかにしたが、その調査の残り分について、二〇二二・二〇二三年度に全て調査を終えた。縦横寸法・厚さ・重さ・密度・實目本数・糸目幅・原料・填料・非繊維物質等のデータは全て明らかにし、顕微鏡写真も撮影した。また、サンプル採取した繊維片について、Ｃ染色液検査（六十五点）も終え、検査結果の画像撮影（五二六カット）も終えた。いずれも、多可町那珂ふれあい館・史料編纂所に備えられた。

百工比照の紙類の調査については、再確認の調査を終えた。反射光による顕微鏡写真撮影（一一一点七八〇カット）によって、大部分の料紙の繊維の種類、非繊維物質の状態、填料の有無などが判明した。さらに、實目・糸目幅・板目・刷毛目・地色などのデータも測定・観察した。これらの顕微鏡写真及び測定・観察の記録を史料編纂所に備えられた。

島津家文書の近世文書の部分については、前年度調査したところの中世の檀紙・杉原紙系統の料紙を使うものと推定した女房奉書・宣旨・老中奉書に加え、繪旨と同じ紙を使用するのではないかと推定した口宣案の料紙を調査した結果、推定通りの結果を得た。近世における公武文書料紙の使い分けの一端を明らかにできたかと思う。

研究課題 大和国宇智郡所在寺院史料の研究資源化―金石文を中心に―

研究経費 四五万円

研究組織

研究代表者 下村周太郎（早稲田大学）

所内共同研究者 菊地大樹 尾上陽介 木下竜馬

所外共同研究員 高木徳郎（早稲田大学） 佐藤重聖（滋賀県立大学） 山崎竜洋（五條市教育委員会） 上相英之（国立文化財機構奈良文化財研究所） 大久保治（元興寺文化財研究所） 服部光真（元興寺文化財研究所）

研究の概要

（１）課題の概要

大和国宇智郡（現・奈良県五條市）は、大和国の南半分を占める吉野郡と河内国および紀伊国と境を接する「国境地帯」であり、大和街道（古代下ツ道）と吉野川とが交わる交通の要衝ともなっている。平安期には興福寺の影響が強く及ぶほか、近隣の高野山（真言宗）や葛城山（修験道）とも濃厚に接触するとともに、井上内親王・他戸親王に由来する御霊信仰のメッカともなる。

本研究では、上記の通り宗教的に多様な表情を見せる宇智郡に所在する、栄山寺をはじめとした創建が古代中世にさかのぼる寺院が所蔵する史料の研究資源化を推進する。その際、文書史料や聖教史料に加え、建造物の墨書銘や石造物の銘文など金石文史料についても、調査対象として積極的に取り上げる。金石文史料は当該地域の宗教史的動向や信仰形態を復元する上で、文書史料の欠落を補う有用な史料となっているが、経年劣化により判読が困難なケースも少なくない。そこで、本研究ではひかり拓本や赤外線

撮影などの専門家にも参加していただき、多角的なアプローチを試みる。

（２）研究の成果

栄山寺の八角堂において、墨書銘の調査を行い、赤外線写真およびひかり拓本による撮影を実施した。昨年度も一度、調査・撮影を試みていたが、当初の予想以上に退色や剥落が進んでおり、研究資源化に向けては改めて機材を見直して再調査する必要性が確認されていたことから、今年度改めて調査・撮影を行ったものである。

また、昨年度元興寺文化財研究所において同所が所蔵する写真帳や調査を調査したことで、旧宇智郡所在寺院にまだまだ十分に調査・研究資源化されていない中近世の文書史料や金石文史料が存在していることが確認できた。こうした点を踏まえ、今年度は、ご所蔵者のご理解と市立五條文化博物館のご協力を得て、生蓮寺所蔵大日寺旧蔵文書および三箇家文書を全点撮影した。前者は点数は少ないものの鎌倉期の文書を含む点で重要である。後者は中世後期から近世まで通じて多数の史料を伝えており、その中には戦国期大和国宇智郡における惣郡一揆の存在を示す研究史上著名な史料が含まれている他、近世の日記や医学書など特徴的な史料も含まれていた。この他にも、中世文書を所蔵すると見られる寺院にいくつかアプローチを試みたが、所在不明などを理由に調査・撮影には至らなかった。今後も引き続き史料の所在確認も踏まえ、調査を進めていく必要がある。

研究課題 史料編纂所所蔵明清中国公文書関係史料の比較研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 渡辺美季（東京大学）

所内共同研究者 須田牧子 黒嶋敏 岡本真

所外共同研究員 荒木和憲（九州大学） 辻大和（横浜国立大学）

研究の概要

（１）課題の概要

東京大学史料編纂所には、明清時代中国の公文書ならびにその関連文書が複数所蔵されている。それらは中近世東アジアの国際関係を読み解く際の貴

重要な史料であり、中近世日本における中国公文書の社会的価値を具体的に検討し得る好素材でもある。すでにある程度、基礎的データの作成や国内の類似文書のデータ集成が進められているが、これらの文書を古文書学的に位置付けるためには、明清国内における様式・形態や作成・発給過程についての制度的研究と、実際に発給された同類文書との比較検討が不可欠である。

そこで本研究ではこれらの文書について、二〇一九～二二年度一般共同研究「史料編纂所所蔵明清中国公文書関係史料の比較研究」に引き続き、①形式・作成・発給に関わる中国側の諸規定の調査を進め、②それらの規定と編纂所の所蔵史料とを対照した上で、③韓国国立中央図書館・韓国学中央研究院において明清中国から朝鮮に発給された同類文書（原本）との比較検討を実施する。これにより、規定と実態の両面からそれらの文書の古文書学的位置付けを明らかにし、東アジア地域で共有し得るレベルでの「史料の研究資源化」を目指したい。

（2）研究の成果

新型コロナウイルス感染症の流行拡大により二〇二〇年以来保留し続けていた韓国調査をようやく実施できたことが最大の成果である。韓国では、日本・琉球同様、中国の朝貢国であった朝鮮に対して明清中国から発給された（あるいは朝鮮が中国から受給した）各種公文書（原本）の熟覧調査を行った。これにより中国から日本・琉球へ発給された公文書、および中国国内で発給された公文書と具体的に比較検討することが可能になり、東アジア世界における編纂所所蔵の明清公文書の史料学的位置づけへの理解をいっそう深めることができた。

また東国大学校HK+事業とシンポジウム「モノとしての東ユーラシアの公文書」を共催し、二〇一九年度以降の研究蓄積をもとに研究代表者を含む四名が研究報告を行ったほか、一名がコメンテーターを務めた。これにより韓国を中心とした海外の研究者と研究視点（暫定的）成果・課題などを共有すると同時に、質疑討論を通じて本研究に対する有意義な情報や提言も得ることができた。

今年度の研究成果を活かすべく、今後、可及的速やかに韓国調査の成果報告書の作成・刊行を進めていきたい。

研究課題 日本史用語グロッサリーの再構築にむけて
研究経費 五〇万円
研究組織

研究代表者 Nadia Kanagawa (Furman University)
所内共同研究者 小塩慶 遠藤基郎 菊地大樹 西田友広 堀川康史
所外共同研究員 Christopher Bovbjerg (University of California) David Eason (関西外国語大学) Joan Piggett (University of Southern California) Mathieu Felt (University of Florida) Paula Curtis (University of California) 黄霄龍 (東京大学) 佐藤雄基 (立教大学) 山口えり (広島市立大学)

研究の概要

（1）課題の概要

日本史研究の国際化、とりわけ外国語による発信は喫緊の課題である。東京大学史料編纂所では、こうした課題への取り組みを支援すべく、史料用語・研究概念の外国語訳を蓄積し、「応答型翻訳支援システム」(Online Glossary of Japanese Historical Terms)を通じて国内外の研究者の利用に供してきた。本DBは二〇二一年に運用を一時停止したものの、国内外の研究者の要望に応えて、二〇二三年度に「日本史用語翻訳グロッサリー・データベース」としてリニューアル・オープン予定である。本共同研究では、本DBの利用価値を高めるべく、グロッサリー(用語集)データの追加を進めるとともに、翻訳ワークショップを通じて日本古代・中世史料翻訳の知見を蓄積する。本共同研究を通じて、日本史研究国際化の基盤整備に資することを目的とする。

（2）研究の成果

二〇二一年夏に運用を停止した「応答型翻訳支援システム」を「日本史用語翻訳グロッサリー・データベース」として再公開を実現した。設計・公開にあたっては、共同研究メンバーのフィードバックを取り入れた。

英語六九〇〇件（新規入力五一〇〇件＋維新史料綱要一八〇〇件）・フランス語五〇〇件のデータを新規に入力した。入力にあたっては、国外の共同研究員が登録すべき著書・論文の情報収集や許諾の取得連絡などを務めた。

また、共同研究員の人的ネットワークを活かし、所外の各種プロジェクトの研究成果からグロッサリー・データを抽出する許可を得た。

二〇一七・一八年度の一般共同研究「日本史用語グロッサリーの蓄積と改良にむけて」で着手し、二〇二二年度に再開した『沙汰未練書』の翻訳を一通り完成させることができた。共同研究員が意見を出し合うことで、精度の高い日本語訳・英語訳を作ることができたと考えている。

関連する研究成果として、共同研究メンバーの黄霄龍・堀川康史の共編により、『海外の日本中世史研究』・『日本史』・『自国史』・『外国史の交差』（勉誠社、二〇二三年）を出版した。本書にはChris・佐藤・菊地、二〇一七―一八年度一般共同研究のメンバーも寄稿している。

研究課題 未撮影史料を中心とする陽明文庫の調査・研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 藤井讓治（石川県立歴史博物館）

所内共同研究者 遠藤珠紀 尾上陽介 林晃弘

所外共同研究員 名和知彦（公益財団法人陽明文庫）

研究の概要

（１）課題の概要

本研究課題は、摂関家の一つ近衛家の文庫である陽明文庫所蔵史料の調査・研究を行い、さらなる研究資源化を志すものである。陽明文庫には、古代から近代に至るまで膨大な史料が伝来している。史料編纂所では、古くから所蔵史料の調査・撮影を進め、図書室において写真帳などの複本、近年では大型科研の成果によるデジタルデータ公開を行っている。しかし所蔵史料の規模が大きいため、まだ未撮影、未調査の史料、撮影済みでも十分に利用されていない史料、一具であるが分かれて保管されている史料が多数存在する。

陽明文庫では複数の目録によって史料が管理されている。その中で「一般文書目録」は、戦前京都帝国大学に寄託されていた折の整理に基づくもので、所蔵史料の中でも多くを占める。本研究課題では「一般文書目録」に分類さ

れた史料を中心に悉皆調査を行い、史料群の性格、また個別の史料の性格を検討しつつ、細目録を作成する。

（２）研究の成果

本年度は五月・六月・七月の三回、公益財団法人陽明文庫において史料調査を実施した。陽明文庫には多数の史料が所蔵されるが、調査では、主に一般文書目録「家門」「仏教」「神祇」に記される史料を対象とした。この区分の史料は多数に上り、また他の区分に関連史料が見られることもあるので、引き続き悉皆調査を行う予定である。七月・十月には史料編纂所において、関係史料の調査および今後の研究課題遂行のための意見交換を行った。

本研究課題での調査により、所蔵史料の研究による豊臣期政治史の深化、陽明文庫に残る鎌倉時代の史料の写からその伝来過程、近衛家での写作成に至る過程を明らかにすること、また多数残る後陽成天皇関係史料の翻刻など、一定の成果を収めた。これは、共同研究として、所蔵者である陽明文庫のご教示を得つつ、専門を異にする複数名で検討したことによって得られたものである。今後、研究資源として広く利用可能となるよう紹介していきたい。

成果の一部は、藤井讓治「近衛前久書状―石田三成・増田長盛の所司代就任―」、尾上陽介「御写物」、遠藤珠紀「二条亭城介事、かちんの事」（いずれも『陽明文庫講座 図5』二〇二三年十一月所収）、遠藤珠紀「後陽成天皇宸記翻刻」「陽明文庫所蔵後陽成天皇宸翰翻刻」（橋本政宣編『後陽成天皇』宮帯出版、二〇二四年一月）として紹介した。また来年度の『東京大学史料編纂所研究紀要』においても成果報告を行う予定である。

研究課題 史料編纂所所蔵謄写本「児玉韞採集文書」の研究資源化にむけた調査・研究―原本所在未確認文書の翻刻―

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者

所内共同研究者 堀本一繁（福岡市博物館）

所外共同研究員 井上聡

佐藤祐花（福岡市博物館）

研究の概要

(1) 課題の概要

東京大学史料編纂所所蔵の謄写本「児玉韞採集文書」八冊(二〇七一・九一—三〇)は、江戸時代後期、筑前国西部における中世を主体とする古文書を採訪し、一—三〇点余を写し取った文書集である。「児玉韞採集」の名称が付与されているが、児玉韞(筑前国怡土郡王丸村、現・福岡県糸島市王丸)は内閣修史局編修久米邦武が明治二〇年(一八八七)八月に採訪した時点で所蔵者であり、実際に採集を行ったのは韞の祖父児玉琢(一七七三—一八二九)である。琢は、平安時代末期〜戦国時代に怡土郡を本拠とした原田氏の所伝を記述した『改正原田譜』十卷(末尾二卷は編纂のため採集した中世文書四五二点を附録として収録)を編纂し、青柳種信(筑前国統風土記拾遺)の編纂では助力を行い、当該地域の中世文書に精通した人物であった。

収録文書の半数以上は原文書の所在が不明であり、本謄写本の底本が長らく所在不明となっていたこととあわせ、本謄写本の史料価値を高めている。本研究では、前年度に実施した収録文書目録作成の成果を踏まえ、原本の所在が未確認の文書を中心に翻刻化を行い、さらなる利用の促進を図る。

(2) 研究の成果

謄写本「児玉韞採集文書」翻刻の前提作業として、収録文書の原本調査を実施した。収録文書の半数以上は原文書の所在が不明であり、本謄写本の史料価値を高めているが、「児玉韞採集文書」所収文書と原本とを比較検討することによって、原本所在不明文書の書写の正確性、および書写時の改変のあり方を判定する材料とした。

本研究を遂行するにあたり、東京大学史料編纂所公開データベースを大いに活用した。原本の所在が不明の文書、あるいは、原本調査が及ばなかった文書については、本所データベースにより、「児玉韞採集文書」収録文書との比較校訂を効率的に行うことができた。

原本調査の過程において、いくつかの所在不明史料の発見につながった。「児玉韞採集文書」五冊一号「原田所蔵古文書写」、同五冊二号「原田家入用古文書」等に収録する原田関係史料について、編纂所では四種の影写本「原田文書」(三〇七一・二六—二、三〇七一・二六—四、三〇七一・二六—一三、三〇七一・三六—一六五)を有するが、影写後、原本の所在は不明となつて

いる。影写本の情報を手掛かりに、福岡県会津若松市内調査において本宗家の菩提寺興徳寺を確認し、歴代の墓碑銘を調査することができた。

また、福岡市内調査において「児玉韞採集文書」一冊二号「諸氏古文書」所収「早良郡脇山村飯田伊八所蔵文書抄」の原本を発見し、二〇二三年度末に福岡市博物館に寄贈していただくことにつながった。

研究課題 吉野修験関係史料の調査

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 服部光真(公益財団法人元興寺文化財研究所)

所内共同研究者 海上貴彦 堀川康史

所外共同研究員 榎原雅治(公益財団法人地震予知総合研究振興会) 坂本亮太(和歌山県立博物館) 松田度(大淀町教育委員会)

三宅徹誠(公益財団法人元興寺文化財研究所)

研究の概要

(1) 課題の概要

本研究は、大和国吉野山を対象に、関係史料の詳細調査によって研究資源化を図るものである。吉野山は古代・中世以来の山岳信仰・修験道の一大拠点の一つであり、日本宗教史・寺院史においても重要な位置を占める。これまでも諸機関によって精力的に史料調査が進められ、関係史料の集成もされているが、なお中世に遡る関係史料のなかにも未調査のものや、本格的検討、研究資源化が十分でないものがある。また廃仏毀釈の影響も大きく、個々の史料の伝来や機能に関わる分析についてはなお課題を残している。

本研究では、具体的には櫻本坊所蔵『大般若経』と前坊家文書などの未採訪史料を対象とし、調査採取・写真撮影などの基礎調査を実施する。そして、それぞれについて個別に史料分析を行い、一山寺院史研究、地域社会史研究、『大般若経』研究、寺院史料論、吉野の地域史研究といった視角から検討を行うとともに、調査史料についての報告書の公刊や画像公開により吉野修験関係史料の研究資源化を図るものである。

(2) 研究の成果

櫻本坊所蔵『大般若経』調査は、昨年度の(1)鎌倉時代の写経を主体とする一部約三二六帖に引き続き、(2)豊臣秀頼寄進の一部約四八〇帖と経函二〇函の調査と写真撮影を行った。

(1) 写経については、正応二年(一二八九)の一日頓写経を中心とし、平安時代後期や室町期の写経、鎌倉期の春日版経を含む混合経とみられることが判明した。正応二年一日頓写経は、書写奥書によれば大和般若寺の僧を勧進聖とし、置恩寺、吉野山岩蔵寺、伊賀清浄光寺などで分担書写された。宋人沙弥の書写も確認され、西大寺流律僧らを中心とする事業であったと考えられる。西大寺流による吉野山への関与は断片的に知られていたが、これもその一環に位置付けられよう。また筆跡に注目すると、一巻のなかで複数の筆跡が確認される例がある一方で、同じ筆跡で複数何巻も書写されている例も多くみられる。この分析により「一日頓写」の実態についても明らかにし得る見通しが得られた。

(2) は慶長九年(一六〇四)に豊臣秀頼により吉野山の子守社に寄進されたものである。前年に子守社が焼失したのを受けた再興事業の一環とみられる。城禅寺(播磨か)に最初奉納された応安七年(一三七四)五山版経と宝徳二年(一四五〇)写経が多数を占めるが、鎌倉期の写経(「則兼」黒印あり)、康永二年(一二三三)写経(池大明神旧蔵)、康正二年(一四五六)写経(吉舎八幡宮旧蔵)、版経(周防玖珂山王社旧蔵)などが取り混ぜられて一部をなす。全体として、高野山や熊野との比較により豊臣家による吉野山復興の特質を検討しうる基本史料である。宝徳二年写経は二〇一八・二〇一九年度一般共同研究「プリンストン大学図書館所蔵吉野山修験関係史料の保存・利用のための研究」におけるプリンストン大学所蔵「櫻本坊文書」の調査で確認された『大般若経』の僚巻であり、『大般若経』全体のなかで検討することで、プリンストン大学本の再評価も可能となった。

また東京大学史料編纂所に所蔵される『大般若経』調査のなかで、櫻本坊旧蔵資料として、五山版『大般若経』と久安三年(一一四七)写『大般若経』各一帖が見出された。前者は(2)の僚巻で、後者は(1)のうち平安後期写経との関連がうかがわれる。散逸した分も含めた櫻本坊伝来『大般若経』

の全体像が明らかとなりつつある。

前坊家文書は子守社神職を務めた前坊家に伝来した文書である。本研究を契機として松田度氏が地元有志と継続的な整理を開始し、全体像の解明が進んでいる。本研究では昨年度に続き中世文書およびその写しを対象に十三点の調査、写真撮影を行った。戦国期の檀那売渡状や吉野山での地下衆の台頭に関わる文書が特徴的に見出された。また越智氏旧臣の堤家や宇智郡の二見家など他家に伝来した文書があり、複合的な性格を持った文書群であることも明らかとなった。なお原本が整理途中であることを鑑み、元興寺文化財研究所所架蔵の写真帳も閲覧した。

金峯山寺文書は、南北朝期の文観御教書や金峯山草創記など七点の中世文書の調査・撮影を行った。いずれも吉野山の中世史に関わる基本史料であり、櫻本坊所蔵『大般若経』、前坊家文書とも内容上の関連性が深く、合わせて検討することが可能となった。

研究課題 「中井家文書」の建築指図と帳簿類の総合研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 海野聡(東京大学)

所内共同研究者 新井重行 田島公

所外共同研究員 藤井恵介(東京大学名誉教授) 角田真弓(東京大学)

研究の概要

(1) 課題の概要

主たる検討対象である「中井家文書」(宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵)は、京都大工頭中井家で作成された資料群の一部で、内裏造宮に関する建築指図と帳簿類からなる。同史料のうち、建築指図の大半は、平井聖編著『中井家文書の研究』一〇十(中央公論美術出版、一九七六・一九八五年)として出版されているが、帳簿類との検討は不足している。

史料編纂所では、宮内庁の協力を得て『中井家文書の研究』の出版時に撮影した建築指図の四×五フィルムをデジタル化しており、同様に帳簿類のデジタル化およびHiCAT Plusによる公開が進められている。申請者らは、建

築史的見地から、帳簿類の翻刻・読解を進めているが、その検討手法などの蓄積を踏まえたうえで、史料編纂所が宮内庁の許可を得て保有する建築指図（上掲書に未掲載のものを含む）のデジタル画像を全面的に再検討し、併せて帳簿類から読み取れる情報を、建築指図に付加することを主たる目的として総合的な検討を行う。

（2）研究の成果

「中井家文書」を建築史的視点から共同で精読することで、建築情報の抽出・建築技術の解明という研究手法を提示しており、その成果についても、研究会における釈文の作成、研究会による報告などにより着実に蓄積を重ねている。これらは基礎的な研究として高い価値を有するものと考えられる。

さらに本一般共同研究とともに、基盤研究(A)「東アジアにおける工匠関連史料にもとづく建築生産史の再構築と技術蓄積・伝播の解明」（研究代表者：海野聡）のプロジェクトと協業することで、中国・韓国に所蔵される同様の史料群の残存状況や、その分析手法の共有などの点で、大いに成果があったと考える。これらの成果については、京都府立京都学・歴史館において、国際研究集会『御所（宮殿）・邸宅造営関係資料の地脈と新天地（4）』（海野科研等と共催）における報告として結実している。

また、史料の講読を共同で継続することにより、「中井家文書」のうちすでに出版・公表されている建築指図と、直接的に対応する帳簿の記載との具体的な関連性についての知見を蓄積している。これらについても検討を継続し、有効な分析手法の提示を目指す。蓄積したデータについては、画像にメタデータとして付与するなどの方法で活用することが見込まれる。

研究課題 蒐集デジタル画像を用いた「魚魯愚鈔」の情報資源化及び平安・鎌倉期の除目書の総合的研究

研究経費 四五万円

研究組織

研究代表者 志村佳名子（信州大学）

所内共同研究者 田島公 尾上陽介 新井重行 小塩慶

所外共同研究員 小倉慈司（国立歴史民俗博物館）

研究の概要

（1）課題の概要

除目に関する諸記録や関連儀式書の記事を集成した『魚魯愚鈔』の活字本には、古代学協会編『魚魯愚鈔』（『史料拾遺』第四〇八巻、臨川書店、一九七〇～七七年）があるが、その底本や校訂の過程に問題があるため、二〇二二年度東京大学史料編纂所一般共同研究「蒐集デジタル画像を活用した『魚魯愚鈔』の情報資源化と除目研究の基盤形成」において、陽明文庫本を底本としたより良質なテキストを作成した。

本研究では、その成果を基に『魚魯愚鈔』（別録を含む）に引用される主要な除目書（『院御書』・『春玉秘抄』・『綿書』・『九抄』・『中山抄』等）について、その伝本との比較研究を行い、古代・中世における除目書の発展・継承の過程を明らかにする。除目関係史料は禁裏・公家文庫にも多数架蔵され、貴族社会の実態を検討するための重要な史料群であるが、十分に活用されていない。それらの史料を熟知した研究者が集まり調査を進めることで、古代・中世の重要な宮廷儀礼の一つである除目儀とその次第をまとめた除目書の総合的な研究を推進する。

（2）研究の成果

本研究は、二〇二二年度の一般共同研究「蒐集デジタル画像を活用した『魚魯愚鈔』の情報資源化と除目研究の基盤形成」によって得られた『魚魯愚鈔』の新たな翻刻データをもとに、更なる除目書群の構造的解明を試みるものである。しかしながら、『魚魯愚鈔』『魚魯愚別録』のデータ量は膨大であり、より正確な本文データを作成するためには時間をかけて校正を行い、より使い勝手がよい形式へと変換する必要がある。そこで、当初の計画を若干変更し、正確なデータの作成に時間をかけた。本研究によって作成された本文データのうち、例えば除目の申文については『平安遺文』・『鎌倉遺文』にも収録されていないため、史料編纂所のデータベースでも検索できない状況であるが、本研究によって作成したデータにより、中下級官人の任官データや、除目作法の構造がより明確になり、『大日本史料』二編・三編の編纂等に有益なテキストデータを蓄積することができた。あわせて、公家文庫や朝廷故実に精通した研究者と連携し、有益な助言を得ることによって、陽明文庫の

他史料との関連や、古代・中世の除目書に関する全般的な考察を行うことができた。

研究課題 智感版大般若経の研究資源化を通じた中世後期東国宗教文化の研究

究・慶珊寺本を中心に

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 梅沢恵（神奈川県立金沢文庫）

所内共同研究者 堀川康史 川本慎自 林遼 山家浩樹

所外共同研究員 近藤祐介（鶴見大学） 櫻井唯（神奈川県立金沢文庫）

白川宗源（東洋大学） 西尾知己（関東学院大学） 貫井

裕恵（神奈川県立金沢文庫） 三輪眞嗣（神奈川県立金沢文庫）

研究の概要

（１）課題の概要

横浜市金沢区慶珊寺が所蔵する大般若経全六〇〇巻は混成経で、正中二年（一二三二）の安達貞泰の奥書を持つ二群と、観応三年（一二三二）、足利尊氏の発願により、勧進僧智感とその後継者が刊行した一群（通称「智感版大般若経」）とが大きな割合を占めている。

後者の智感版大般若経は関東各地に同版経が残存しており、助成した鎌倉府関係者の名前が多数刻まれていることから、中世後期東国の宗教・文化・政治史研究上、注目される史料である。しかし、慶珊寺所蔵の智感版大般若経は、一九六一年の調査概報があるのみで、十分な調査・研究資源化がなされているとはいえない状況にある。

本共同研究では、二〇二一―二二年度にかけて東京大学史料編纂所と共同で実施した全点の撮影を踏まえ、調書・目録の作成を通じて全容を明らかにする。また、他機関・他寺院が所蔵する智感版大般若経や関連史料の調査を実施し、史料としての利用可能性を高め、慶珊寺所蔵大般若経を起点に中世後期東国の宗教文化をとりまく環境を検討する。

（２）研究の成果

智感版大般若経は、観応三年（一二三二）、足利尊氏の発願により刊行された版経である。関東各地に同版経が残存しており、助成した鎌倉府関係者の名前が多数刻まれていることから、中世後期東国の宗教・文化・政治史研究上、注目される史料であるが、史料の性質上、研究資源化は十分でない。本研究では、慶珊寺（横浜市金沢区）が所蔵する一群を中心に智感版の調査を実施し、中世後期東国の宗教文化を検討することを目的としている。

二〇二二年度は、慶珊寺本の調査を二度実施し、金沢文庫寄託分約九十帖につき、一紙長などを含めた詳細な調書を作成した。諸本を比較する際の基準となりうる基礎データとして活用予定である。また、他機関が所蔵する智感版大般若経として、栃木県立博物館寄託甲斐円通寺旧蔵本（巻四〇一に足利氏満の識語あり）・常楽寺美術館所蔵安房大山寺旧蔵本（巻十一に足利尊氏の識語あり）の智感版大般若経を調査・撮影した。このうち常楽寺美術館所蔵本は全貌の把握がなされていないことから、全六〇〇巻の調査を実施し、未報告の奥書等を見出すなどの成果を挙げることができた。

研究課題 泉涌寺所蔵の近世後期史料に関する基礎的研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 佐藤雄介（学習院大学）

所内共同研究者 山口和夫 林晃弘

所外共同研究員 西谷功（花園大学） 佐藤一希（大阪大学） 桑原優子（宗教法人泉涌寺） 高山結衣（宗教法人泉涌寺） 池上有昭

（真言宗泉涌寺派新那智山今熊野観音寺）

研究の概要

（１）課題の概要

近世の泉涌寺は歴代天皇及び皇子女・女院の葬送を担い、寺内に陵所も有した菩提所として知られる。

幾度の火災を経ながらも、現在確認されている文書史料はおよそ一七〇〇件、さらには未整理のものもあり、その内容は法会関係、公武との折衝関係、

金融関係、その他多岐にわたる。中でも近世後期は数的多数を占めるのみならず、泉涌寺に関する出来事を包括的に記した『日並記』がまとまって伝存し、個々の史料を『日並記』と結びつけることで、天皇・皇子女・女院の葬送および供養、それらをめぐる公武関係、泉涌寺における国家安寧を祈る儀式（修正会など）、経済面や組織としての寺院運営の実態などを多面的に復元できると考えられる。

しかしながら『泉涌寺史』（法蔵館、一九八四年）をはじめ同寺所蔵史料を公刊したものに当該期の史料はほとんど掲載されておらず、その存在すら周知されていない。よって本共同研究では、泉涌寺所蔵の未紹介史料の調査・研究を行い、デジタル撮影及び目録の整備を進めることで今後の活用の基礎とし、広く研究に寄与したい。撮影画像は史料編纂所の図書室で公開し、泉涌寺では宝物館での展示を通して広く成果を発信する予定である。

（2）研究の成果

本共同研究では、主に泉涌寺と東京大学史料編纂所での史料調査を行った。泉涌寺での調査では、共同研究員が各自の問題関心にに基づき史料を熟覧するとともに、近世後期の同寺を研究するうえで基礎となる史料のデジタル撮影を行った。撮影史料は、『日並記』文久二年七月（慶応元年十二月分一〇冊（F二五〇―五一六〇）・一八九〇コマと、「御凶事式」一六冊（御一会四四―一〇二）・一四六三コマである。「御凶事式」は近世後期の天皇・皇后の葬送儀礼について後年に絵画と文章でまとめた史料の写本であり、歴史的事実に忠実ではない部分もみられるが、当時の儀礼のあり方を知るうえで参考になるものである。

東京大学史料編纂所では、同所所蔵の泉涌寺関係史料と、近世後期の朝廷・幕府関係の原本・複製史料を調査した。特に、文久二年から慶応三年まで武家伝奏をつとめた野宮定功の記録（『野宮定功伝奏在職中記録』全六七冊のうち閲覧可能分）を共同で調査し、デジタル撮影を進め、泉涌寺に関する記事を把握した。

これらをもとに、三月一九日にオンラインにて共同研究内での成果報告会を開催し、意見交換を行った。また、成果の一部は泉涌寺宝物館心照殿での企画展に反映させた。

研究課題 福田文書の調査・研究

研究経費 三五万円

研究組織

研究代表者 高橋修（茨城大学）

所内共同研究者 金子拓

所外共同研究員 藤井達也（水戸市立博物館） 中根正人（筑波技術大学）

山縣創明（茨城県立歴史館） 森木悠介（東海村立図書館） 額賀大輔（笠間市教育委員会）

研究の概要

（1）課題の概要

福田氏は、鎌倉時代に常陸国笠間郡の福田村（現笠間市福田）に拠点を構えたことに始まる在地領主（村落領主）である。南北朝期までには笠間郡全域を領有するようになった笠間氏の被官となるが、笠間氏が滅びた後、佐竹氏の配下に加わる。関ヶ原合戦後には、秋田転封となった佐竹氏に従い、秋田藩士として明治維新を迎えた。

福田家に伝来した古文書（以下「福田文書」）は「秋田藩家蔵文書」に収められ、東京大学史料編纂所に原本の影写本が架蔵されるが、その原本の所在はその後確認されることがなかった。しかし最近売り立てにより流出し、幸いにも購入により大半が東京大学史料編纂所の所有となっている。

この共同研究では、常陸の中世武家領主や、秋田藩士の伝来文書に関心を持つ研究者が共同して、「福田文書」について一点一点の原本調査を行い、これまでの翻刻を校訂し直し、料紙の形状等についても現状記録を作成しようとするものである。その成果を広く学会に公開し、また常陸の中世史に関心を持つ地元住民、特に笠間市民には、身近な歴史を考える素材として提供したい。

（2）研究の成果

「福田文書」は十六点の中世文書を含む文書群であり、その大半は、近年、東京大学史料編纂所の所蔵となった。常陸国の御家人であり、やがて戦国領主に成長する武家・笠間氏に従い、笠間郡内福田村を領有した福田家の伝来文書である。一村規模の武家領主の家わけ文書として、笠間氏をはじめとす

る上位の武家との関係や村落支配の実情をうかがわせる興味深い内容をもつ。『茨城県史料』等ですでに翻刻がなされていたが、この共同研究により、その内容について再検討できた。特に主家の笠間氏のみならず宇都宮氏とも関係をもっていた事実や、近隣の江戸領で起こった神生の乱の余波が当該地域にも及んでいたことなど、新たな知見が得られた。また原史料を詳細に観察する機会をもつことにより、このクラスの武家領主がどのような料紙使用により作成された文書を受けていたのかを記録することができた。さらに秋田県公文書館での調査により、近隣の寺崎村の領主・寺崎氏とあわせて、福田家の系譜にかかわる資料を収集することができた。

研究課題 史料編纂所所蔵「熊本藩京都留守居上田久兵衛関係資料」の研究

資源化

研究経費 四九万九〇〇円

研究組織

研究代表者 今村直樹（熊本大学）

所内共同研究者 箱石大 菊地智博

所外共同研究員 白石烈（宮内庁書陵部）

研究の概要

（１）課題の概要

本研究は、東京大学史料編纂所所蔵「熊本藩京都留守居上田久兵衛関係資料」の研究資源化を目的とする。近世京都に諸藩が設置した京都留守居については近年関心が高まり、特に幕末期以降に朝廷・幕府・諸藩間において展開された政治活動が注目されている。なかにはこれらを「公論社会」と位置づける研究も発表され、幕末期と維新时期を接続できる可能性を持つ分析対象となっている。

特に熊本藩京都留守居上田久兵衛の政治活動は、当該期の政局に大きな影響を与えており、これまで主要資料の一部が活字化されている（宮地正人編・解説『幕末京都の政局と朝廷』名著刊行会、二〇〇二年）。しかし、上田久兵衛の原資料群の全体像は不明なままで、利用環境の向上と研究の深化が強く望まれてもいる。

そこで本研究では上田久兵衛関係資料の目録作成・デジタル撮影を行い、同時に共同研究で得られた知見を細目録に反映させ、当該資料群を学界に広く公開することにした。

（２）研究の成果

上田久兵衛文書のうち、特に史料的价值が高い「上田久兵衛日記」原本と、史料編纂所所蔵の維新史料引継本「上田久兵衛日記」（写本、全二十六冊）の照合作業を行った。その結果、原本の所在が確認できず、写本でしか残っていない日記があることが判明した。同時に、写本にも筆写時に脱字や省略箇所が複数発生していたことも確認できた。研究の際は原本と写本の双方を参照する必要があるが、両史料群が相互補完の関係にあることを明らかにできた点は大きな成果だった。

写本の重要性が確認できたことから、全冊（一九五五コマ）をデジタル撮影した。さらに「所蔵史料目録データベース（EICAR）」にて全画像を公開し、これまでの利用環境を改善できた点も成果だったといえる。

日記原本については、史料的价值の高さを、上田の地元である熊本県で紹介する一環として、熊本県立美術館の展覧会「細川コレクション特別展 土方歳三資料館×肥後熊本藩」への日記原本二冊の出陳に協力した。特別展の入場者数は一万三三二人を数え、かつ地元紙「熊本日日新聞」でも取り上げられるなど、その存在を広く地域に還元できたことは、共同研究としての成果だった。

目録作成作業では、仮目録が紙媒体で項目表記の統一もできていない状態だったため、統一項目を設定したうえでエクセル入力作業を進め、当該史料群の全体像を把握できる環境整備を前進させることができた。

研究課題 涅槃山西教寺所蔵史料の研究資源

研究経費 四五万円

研究組織

研究代表者 佐藤もな（一般財団法人東京大学仏教青年会）

所内共同研究者 林晃弘

所外共同研究員 上野大輔（慶應義塾大学） 興津香織（日本大学） 芹口

研究の概要

（１）課題の概要

文京区本郷に所在する西教寺（浄土真宗本願寺派）は、東京大学に隣接し、酒井雅楽頭家から移築された「赤門」を表門とすることでも知られている。本研究は同寺所蔵史料を調査し、研究資源化するものである。

対象となる史料群は、中興の慧海潮音（一七八三～一八三六）に関連する文物を中心に、五〇〇点以上にのぼる。慧海は、富永仲基の大乗非仏説論に異を唱えて『摺裂邪網編』を著すなど、学匠として知られている。真宗学のみならず天台や華嚴等の教学にも通じ、様々な古写本を収集し、各地で講義を行った。西教寺には慧海による識語が付された古写経類や、直筆の草稿などが残され、その学識を窺うことができる。

また、慧海は当時の文人・知識人とも交流があり、因幡若桜藩主の池田定常（松平冠山）、書家の中沢雪城、漢詩人の菊池五山、豪商石田醒斎らの漢詩や書状が残されており、これらの人物の仏教に対する関心や学問的ネットワークのあり様を知る上でも興味深い。さらにオランダ商館長に関する史料も伝存する。

このように仏教学・日本史学の分野に関わる多様な史料が含まれることから、二つの分野の研究者による共同での調査により研究資源化し、成果を学界に提供する。

（２）研究の成果

本共同研究では毎月一回程度の史料調査を実施し、『涅槃山西教寺文庫目録』（二〇一三年）の目録情報の再検討と、未掲載の近世・近代文書の調査の作成を進めた。また、これまで未整理であった版本類について概要を調査し、中性紙箱に仕分け、調書の作成に着手した。七月三十一日～八月一日、二月一日～四日の調査では、史料編纂所の機材を用いて第一箱から第五箱の途中まで約二〇〇件をデジタル撮影した。撮影画像については、目録情報を付し、史料編纂所図書室内の端末で公開する予定である。このほか、近世後期の住職である慧海潮音の著作について、寺外に所在する自筆本・写本の把握につとめた。

二〇二四年三月六日に、一般財団法人東京大学仏教青年会ホールにて公開講演会「近世寺院の世界―涅槃山西教寺と慧海潮音―」を開催した。報告者と題目は以下の通り。

① 佐藤もな（一般財団法人東京大学仏教青年会）「西教寺における調査概要」

② 町田聡（文京区教育委員会）「区指定文化財・西教寺表門について」

③ 興津香織（日本大学文理学部）「慧海潮音について」

④ 林晃弘（東京大学史料編纂所）「池田冠山書状をよむ―西教寺文書にみる江戸の文人世界―」

⑤ 一色大悟（京都大学学術研究展開センター）「仏教のコスモロジーと慧海潮音」

仏教学と日本近世史の研究者が共同で取り組むことで、慧海潮音の著作や、慧海宛の池田冠山書状の理解を深めることができ、近世後期の仏教思想の側面と、江戸の文人の仏教への関心のあり方が明らかになった。なお、調査においては、高橋悠介氏（慶應義塾大学・斯道文庫）、前田晃祐氏（慶應義塾大学・大学院生）、伊藤文二氏（同）、小林優里氏（東京大学史料編纂所）、平澤加奈子氏（同）のご指導・ご協力を得た。

研究課題 近江国惣村文書を対象とした横断的原本研究の試み

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 宇佐見隆之（滋賀大学）

所内共同研究者 末柄豊 井上聡 高島晶彦 渋谷綾子

所外共同研究員 青柳周一（滋賀大学） 水野章二（滋賀県立大学） 大河内勇介（福井県立歴史博物館）

研究の概要

（１）課題の概要

滋賀大学経済学部附属史料館（以下、史料館）寄託菅浦文書は惣村研究の基本史料であり、申請者等は再校訂にもとづく史料集の刊行にむけた作業を行っている。その過程で同文書のモノとしての検討が必要との認識に至り、

史料編纂所とともに料紙の紙質調査を中心に据えた共同研究を実施してきた。その結果、近世の偽作が疑われた文書について中世段階の作成と考える問題ないこと、料紙の使用法や筆跡分析から疑念のあった史料の真正さが確認されたことなど、大きな成果をあげた。

他方で、年貢請取状など領主の支配にかかわる文書に見出される料紙の紙質・用法等の特性については、年代・領主の別といかなる相関を示すのかといった新たな課題が浮上してきた。このような課題に答えるには他の文書群との比較が重要だが、惣村文書に関する原本研究の蓄積は非常に薄いと言わざるをえない。

そこで本課題では、史料館が保管する他の中世惣村文書（今堀日吉神社文書・大嶋奥津島文書など）に対象を拡大し、近江国の惣村文書を横断的に、文書類型に即しつつ、これまで行ってきた原本研究の手法を用いて総合的な分析を進めてゆく。これにより、惣村文書の史料学につなげることを目指す。

（2）研究の成果

調査対象文書の選定や、チェックポイントの確認といった事前調整を行ったのち、一二月に史料館において、メンバーが一堂に会して「菅浦文書」「大嶋神社・奥津嶋神社文書」原本の調査を実施することができた。

「菅浦文書」については、まず成立年代やその経緯について疑義がよせられていた「堅田証状」関連史料について、料紙分析に加えて、筆跡検討などを実施した。結果として昨年度取り組んだ鎌倉期の文書群と同様に、疑義の多くを退けることができることを確認した。つづいて村落を支配した領主關係を明確にするため、年貢・公事などの請取状を対象として、その形式検討・料紙分析を進めた。領主ごとに一定の特徴があること、そうした特徴から発給者未詳の史料について検討・考証の可能性が広がることを確認した。また在地村落相互間の応答がどのような形式でなされていたのかを分析し、その多くが杉原系の良質な料紙を用いていることを確認した。さらに、戦国期に菅浦を支配した大名浅井氏については、特にその発給文書を系統的に分析することを目指して、高倍率顕微鏡を用いて詳細な料紙分析を進めたところである。

「大嶋神社・奥津嶋神社文書」については、同じ近江国内の有力惣村史料

であることを踏まえて、「菅浦文書」と共通点をもつ史料を選定して、比較調査に努めた。具体的には、延暦寺発給史料、惣村支配に関わる置文・定書を対象として調査を実践した。詳細な結果分析を待つところにあるが、基本的には「菅浦文書」の分析結果と重なる部分が大きいとみられ、惣村レベルにおいて共通する条件が揃っていたものと推察されるところである。

なお史料編纂所における関連史料の調査としては、「菅浦文書」に関わりが深い「竹生島文書」を引き続き調査するとともに、米原市の「章斎文庫文書」など、北近江に残される比較対象として有効なものを検討した。

以上の成果は、現在刊行準備を進めている『菅浦文書集成（仮）』（吉川弘文館より上下二冊で刊行予定）に反映させる予定である。

研究課題 大阪青山大学所蔵武家受発給文書に関する基礎的研究―室町幕府文書を中心に―

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 小倉嘉夫（大阪青山大学）

所内共同研究者 村井祐樹 山家浩樹 末柄豊

所外共同研究員 飛鳥井拓（亀岡市文化資料館） 田中誠（四天王寺大学）

山田徹（同志社大学）

研究の概要

（1）課題の概要

本研究の目的は、大阪青山大学（以下、本学）が所蔵する文書について、室町幕府やその配下につらなる武家諸階層の受発給文書を中心に、本来いかなる神社あるいは家に伝来したものであるかを探ることを通じ、学術的な利用の高度化をはかることにある。

本学は数多くの中世史料を所蔵するが、歌書をはじめとする典籍に比べ、文書に対する注目度は必ずしも高くない。個々に収集された文書のなかには室町幕府関係の文書が多数存在し、足利家歴代の発給文書をはじめ、執事および管領奉書、幕府奉行人奉書、大名の発給文書（細川・大内・大友氏ほかの諸氏）など、多様な内実を誇っている。収集文書は、本来の文書群から切

り離されたかたちで存在しており、活用する際、いずれの寺社や家に伝えられたものか、関連史料はいかなるものがあるかの検討が必須になる。そのなかで室町幕府関係文書は訴訟を契機として発給された文書が多く、もともと伝来した箇所が相対的に解明しやすい文書が少なくないという特長がある。

そこで本研究では、個々の文書原本の高精細デジタル撮影を実施し、法量・封式・紙質などの基本データを採取し、図版とあわせて信頼できる翻刻を公表するのとあわせ、伝来元に関する検討結果を示すことで、本学所蔵文書の研究素材としての価値を高め、積極的に発信していきたい。

(2) 研究の成果

本研究においては、室町幕府を中心とした武家文書の調査・撮影を行った。主な文書を以下に挙げる。

- ・足利尊氏・義詮ほか將軍発給文書（直義を含む）
- ・奉行人奉書
- ・執事・管領・奉行人発給文書
- ・大内氏・赤松氏等守護発給文書
- ・守護被官発給文書
- ・公家発給文書
- ・女房奉書 等

総点数一一〇点、時代も南北朝期～戦国期にわたり、内容も多種多様である。このうち従来から知られていたものの原本もあるが、多くは学界未把握のもので、公開・利用が可能となることで、研究者への貢献が期待できる。

研究課題 対馬西山寺関係文書の総合的研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 顧明源（九州大学）

所内共同研究者 川本慎自

所外共同研究者 伊藤幸司（九州大学） 程永超（東北大学）

山口華代（長崎県対馬歴史研究センター）

研究の概要

(1) 課題の概要

近世の日朝関係は二元的外交（二重構造）とされ、外交権は江戸幕府が掌握し、日常的な外交の実務は対馬藩に任されていた。対馬にあった以酊庵は日朝通交の外交機構としてよく知られているが、近年、釜山倭館にあった東向寺・東向寺僧や清書役僧に関する研究の進展につれて、対馬にあった西山寺も注目されている。近世対馬藩における西山寺は、藩内の臨済宗僧録を務めながら、清書役僧支配の立場を据えて外交機構として機能していることが既に明らかにされているが、その実態はまだ十分に解明されていない。

本研究では、こうした研究状況を踏まえて、日本・韓国に現存する膨大な対馬関係史料から西山寺関係史料を調査し、西山寺を手掛かりにして近世日朝関係史を研究するものである。具体的計画としてはまず、対馬歴史研究センターに寄託する西山寺文書を中心に調査・撮影を行い、西山寺が所蔵する史料群の全体像の把握に努めたい。さらに、そのなかから日朝関係史料を抽出し、翻刻・紹介する。

(2) 研究の成果

①対馬西山寺文書は対馬市厳原町の西山寺に伝来した文書群である。その大半が近世文書であり、寺社関係のほか、朝鮮外交に関する史料が多く残されていることが知られているが、これまで、同文書群に外交関係のものが含まれるのは、西山寺に以酊庵が設置されていたことに由来するとされている（対馬歴史研究センターによる「西山寺関係資料」解題）。ただし、二〇二三年度の共同研究により、同文書群が以酊庵とは関係なく、西山寺に独自に伝来したものであったことが判明した。

②西山寺所蔵文書と対馬藩政記録『毎日記』などと照合し、西山寺歴代住持の復元を試み、住持帳に載せられていない住持の存在が判明した。↓「西山寺歴代住持一覧表（稿）」

③西山寺文書の伝来経緯を検討する成果の一部として、二〇二三年度史学会大会日本近世史部会において報告した。当該報告は、近年、日朝通交における中世から近世への転換とされた「柳川一件」に対する再検討が盛り上がったという研究動向を踏まえて、従来注目されていない「柳川一件」後、流罪に処された対馬の外交僧規伯玄方（以酊庵二世、幻住派）の弟子筋の処遇に

ついで考察を行い、「柳川一件」後、対馬藩が依然として規伯玄方の弟子筋を起用し、彼らを西山寺や長寿院に入寺させ、「以酛庵輪番制」と並行して、西山寺を頂点とする藩の外交僧体制を創出したことを明らかにした。西山寺文書に外交関係のものが含まれるのは、(1)対馬外交僧の法系上の連続性(幻住派)、(2)近世における西山寺が依然として対馬藩の外交機構として機能しているという二つの理由があることを指摘しておきたい。

研究課題 富山県下(越中国) 中近世文書の研究資源化

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 萩原大輔(富山市郷土博物館)

所内共同研究者 畑山周平 田島公 林晃弘

所外共同研究員 長村祥知(富山大学) 塩崎久代(石川県史近世史料編さん室) 佐藤圭(越前市史編さん委員会) 高森邦男(富山県公文書館)

研究の概要

(1) 課題の概要

富山県下(越中国)所在の中近世文書については、一九七〇～八〇年代に編纂された『富山県史 史料編』が多くを捕捉している。しかし、刊行から半世紀近くが過ぎ、県内各所で新たな史料が見出されている。それらは地域の博物館学芸員が情報として押さえ、また地元メディアで紹介されることも時折あるが、全国的には知られていないものが多い。

本共同研究では、富山県内の歴史資料を知悉する共同研究者と連携し、現地で史料調査・写真撮影を行う。『富山県史 史料編』以後の未翻刻史料、新たに見出された史料群の意義付けを図り、中世・近世の越中史の再構築を図る足掛かりとするとともに、全国の研究者が県内所蔵の重要史料にアクセスしやすい環境の整備を進める。

(2) 研究の成果

本共同研究では、富山県下の史料のうち、射水市新湊博物館・宮崎文庫記念館(黒部市)の所蔵史料の調査を実施した。また、関係史料の調査を富山

県公文書館や東京大学史料編纂所図書室等で行った。

射水市新湊博物館では、「柴屋文書」(御書類巻)・「木倉豊信田蔵資料」の調査・撮影を行った。前者は京都大学国史研究室影写本「柴保二氏所蔵文書」(史料編纂所写真帳はそれを撮影したもの)の一部で、主に加賀藩前田家の当主・家臣の受給文書を収集したものである。前田利常宛の豊臣秀頼や徳川秀忠の書状などを含む。後者はこれまで芳春院(まつ)の書状四五通が図録『増補改訂芳春院まつ』の書状(前田土佐守家資料館、二〇一七年)で紹介されているが、他に前田利長書状六点・利常書状八点が含まれており、これらを含めてデジタル撮影を行った。

宮崎文庫記念館所蔵史料は実業家宮崎隆造氏のコレクションであり、全容は目録『庫書筆覧』(二〇一六年)にまとめられている。二度にわたり文書・典籍類の調査を行った。特筆すべきは三条西家本「春玉秘抄」が見いだされたことである。長く所在不明となっていたが、この度の調査により原本であることが確認された。このほか、高山寺旧蔵聖教、足利義詮御判御教書、佐々成政書状(徳山次郎右衛門宛)、嘉永七年甲寅地震雑記(「新収日本地震史料」所収史料の原本)等の史料を確認し、四十件についてデジタル撮影を行った。特に宮崎文庫記念館の所蔵史料は、古代・中世・近世にわたる多様な内容を持つ史料群であり、それぞれの時期を専門とする研究者の共同研究として実施したことで、史料に対する理解を深めることができた。

研究課題 幕末期幕府外交の研究と関連史料の資源化

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 福岡万里子(国立歴史民俗博物館)

所内共同研究者 小野将 立石了

所外共同研究員 吉崎雅規(横浜開港資料館)

研究の概要

(1) 課題の概要

幕末期の幕府外交について、東京大学史料編纂所(東大史料)所蔵の維新関係貴重史料群(特に外務省引継書類)を基軸史料として研究を行い、安政

期の開港に伴い創設された外国奉行・神奈川奉行に關係する史料群、及び特に一八六〇年代に派遣された遣米・遣欧使節団に關する史料に關して、調査・収集整理と研究資源化を図る。それに当たっては、横浜開港資料館（横開）所蔵・寄託の神奈川奉行關連史料など關係する幕末期幕府外交史料の調査、及び国立歴史民俗博物館（歴博）の「外交と日本コレクション」プロジェクトで行う日本關連在外資料の調査と連携しながら作業を進め、幕末期幕府の外交及び關連組織の実像を解明するための研究基盤を構築する。研究成果は、二〇二四年以降、關連史料のリストや目録情報として刊行・公開していくとともに、横開で準備中の特別展「外国奉行と神奈川奉行」（仮称、二〇二四年九月―十一月開催予定）や、歴博で推進する上記プロジェクトの成果物（論文・国際研究集会）などに昇華させ、また東大史料維新史料室で進める『幕末外国關係文書』の編纂準備にも活用していく。

（2）研究の成果

① 歴博では現在「外交と日本コレクション」プロジェクト（二〇二二―二七年度）の下、幕府遣外使節団に由来する在外日本關係資料（各国君主宛て贈進品や国書等）の調査を米欧の關係機関と協力しながら進めており、これと両輪を成す作業として、本研究では東大史料所蔵の外務省引継書類に残る文字史料の調査と研究資源化の作業を行った。

② 上記の具体的な作業としては、一八六〇年万延元年遣欧使節団に關する「並行御用留」や一八六一年文久遣欧使節団に關する「英仏御用留」など、關係史料の簿冊の調査通読と細目録の作成を進めた。それを通じ、贈進品の準備・調達経緯を含め、使節団の準備過程の詳細が判明してきている。また歴博寄託「柴田剛中關係資料」や個人蔵「五味安郎右衛門關係資料」等、その他の關連資料の調査も併せて行ったが、得られた情報について共同研究員の間で随時共有し、意見交換を行うことによって、調査対象への洞察が深められ、学会報告や論文執筆など、今後の成果報告へ向けた貴重な知見が得られた。

③ 横開では現在、特別展「外国奉行と神奈川奉行」を準備しており、その実施のための基盤的作業として、本共同研究の枠組みで、東大史料所蔵外務省引継書類中の外国奉行・神奈川奉行關係史料をはじめ、様々な機関に所蔵

される關連史料群の調査を行ってきた。本研究により、幕末期幕府外交に關連する各地の広範な史料群の研究資源化が進捗し、幕末外国奉行・神奈川奉行の組織・業務を対象とする研究基盤が整備されつつある。

④ 中でも、従来研究が進展していなかった神奈川奉行の業務、横浜における対外折衝の様相に關わる事柄については、東大史料・歴博・横開の所蔵・寄託史料の調査から明らかになったことは、今後の展示などの場で特記のうえ、公表の予定である。

⑤ 二〇二四年三月八日に今年度の作業と成果に關するオンライン報告会を実施した。福岡は報告「幕末期幕府外交の研究と關連史料の資源化―今年度の調査内容・成果と展望」を、吉崎は報告「幕末期外国方・神奈川奉行に關する史料群について」を行い、小野がそれぞれにコメントをした上で、参加者で議論を行った。それを通じ、幕末期幕府外交に關する様々な史料群への理解が、三機関に所屬する研究者間の議論からより深まるとともに、三機関の今後の有意義な連携のあり方についても、見通しを得ることができた。

研究課題 紅葉山文庫旧蔵国書の復元的研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 本土博成（九州大学）

所内共同研究者 岡本真

所外共同研究員 木村可奈子（滋賀県立大学） 古川祐貴（弘前大学）

研究の概要

（1）課題の概要

「紅葉山文庫旧蔵国書」は、かつて江戸幕府の紅葉山文庫にあった諸外国からの「国書」群を指し、一一〇点ほどからなる。そのうち、大部分を占める朝鮮、琉球のものに限れば、現在、東京国立博物館、宮内庁書陵部、外務省外交史料館、京都大学総合博物館、藤井斉成会有鄰館、九州国立博物館において所蔵が確認でき、近代に入ってコレクションが複数機関に散らばったことがうかがえる。

東京大学史料編纂所には、こうした「紅葉山文庫旧蔵国書」と密接に關わ

る写本や写真資料など、豊富な研究資源が蓄積されている。本研究では、こうした編纂所の持つ研究資源と、上記の国書原本とを複合的に考察し、近世東アジアにおける文書を介した外交の特質に迫る。

具体的には、各機関に散らばる史料の原本調査、高精細カメラによる撮影を行うとともに、「紅葉山文庫旧蔵国書」のかつてのまとまりを一覧化する。その上で、そこに何が含まれ、何が含まれないかを整理し、「紅葉山文庫旧蔵国書」の伝存状態の特質を明らかにする。

(2) 研究の成果

藤井齊成会有鄰館所蔵史料は、これまで撮影がほとんど許可されておらず、研究者が閲覧することさえむずかしかったが、本研究共同研究者の粘り強い交渉により、正徳二年（一七一）十月七日付け中山王宛て土屋政直返書案をはじめ、計一三点の史料を撮影することができた。また、九州国立博物館が管理する琉球関係史料（正徳二年十月七日付け中山王宛て徳川幕府老中返翰控ほか、計二六帖）についても、同様に撮影することができた。これらの撮影データをHCCAT Plusで公開することについて、所蔵者の内諾を得ている。すでにデジタル公開されている京都大学総合博物館所蔵の国書もあわせて、こうしたデータが東京大学史料編纂所で確認できるようになったことで、これまで個別に知られていた史料群を通覧し、たとえばどれがどれの写しであるかといった、文書同士の関連性が見出せ、紅葉山文庫旧蔵国書群を構造的に把握することが可能となった。

とりわけ、撮影にあたっては、単に撮影するだけでなく、異なる専門分野の者が熟覧し、たとえば、料紙の確認や、作成過程の物証となる針孔の確認を行うこと、国書の作成の背景にある幕府の外交姿勢などについて、理解を深めることができた。

研究課題 「佐伯藩御用日記」を用いた地震活動の分析

研究経費 三三万円

研究組織

研究代表者 加納靖之（東京大学）

所内共同研究者 杉森玲子 及川亘 小瀬玄士

所外共同研究員 大邑潤三（東京大学） 榎原雅治（公益財団法人地震予

知総合研究振興会） 水野嶺（公益財団法人地震予知総合研究振興会） 甲斐玄洋（佐伯市歴史資料館）

研究の概要

(1) 課題の概要

各地に残る近世の藩日記を、地震動の長期にわたる観察記録として活用するための研究の一環である。近代以前の人々は地震を気象現象の一種とらえており、日記では、地震動は天気にかけて記されている。藩日記のような長期にわたる日記に記された地震動の記録は、長期間にわたる地震の定点観測ともみなすことができ、明治以降の近代的な観測データとつなぎ合わせることで、数百年にわたる一定の場所における地震の履歴を明らかにすることができ、その一環として、本課題では大分県佐伯市歴史資料館の所蔵する「佐伯藩御用日記」の調査を実施する。

東九州は、日向灘や安芸灘・伊予灘・豊後水道などで繰り返し発生する地震によって被害が生じたり揺れを感じたりすることが多く、地震学的に注目される地域である。近世の状況を明らかにすることにより、同地域の地震活動について理解することができると考えられる。

(2) 研究の成果

佐伯を含む日向灘周辺では、M7.0～7.5程度の地震の発生確率が今後三〇年で八〇％とされるが、九州地域での地震史料の収集は行き届いておらず、近代以前の地震情報は十分ではない。本課題では、「佐伯藩郡方町方御用日記」を調査して地震記事の収集を進めた。「佐伯藩郡方町方御用日記」は、佐伯藩の郡方町方による日記であり、郡方（村・浦方）および、町方（城下町）に関する事項を記録しており、この地域の政治・社会史の基本史料のひとつである。

見出した有感地震の記事は三三件である。また、嘉永七年日記の巻末に記されている「嘉永七年別記」を分析した。これは、安政元年の南海地震および伊予西部の地震について特記したものである。

地震動や被害地震の記述について精査し作成した一覧表は、日向灘周辺を含めた地震活動の理解の重要な手がかりとなる。「嘉永七年別記」は既刊の

地震史料集には掲載されておらず、地震による被害や揺れの状況、余震の発生状況について、地震学的な分析に活用できるデータとなる。さらに、避難や救済、地震後に想定される津浪・火災への藩としての対応に関する記述もあり、今後発生しうる地震災害にあたっての防災・減災や復旧・復興について考える上でも有用な情報が得られた。安政二年に発生した安政江戸地震の伝聞情報も記録されており、地震災害に関する情報伝達を明らかにする一助となると考えられる。

連携する別途経費によって安永四年～明治二年の九五年分の全文撮影を実施した。

外部資金による研究・成果

科学研究費助成事業

デジタル技術による金石文史料の研究資源化と学融合的歴史叙述への応用研究

一、研究種目 基盤研究(A)

二、課題番号 一九H〇〇五三六

三、研究期間 二〇一九年度～二〇二三年度

四、研究経費 直接経費五一〇万円、間接経費一五三万円

五、研究組織

研究代表者 菊地大樹

研究分担者 井上聡（以上史料編纂所）、七海雅人（東北学院大学）、佐藤重聖（滋賀県立大学）、榎本渉（国際日本文化研究センター）、上相英之（奈良文化財研究所）

研究協力者 阿部龍一（ハーバード大学）、泉田邦彦（石巻市教育委員会）、櫻井成昭（大分県教育委員会）、高橋敏子（元史料編纂所）、田中則和（東北学院大学）

六、研究の概要

(一) 研究の目的

本研究課題は、選択集中的な現地調査を実施するとともに、地域に蓄積さ

れた拓本・写真などの研究資源を整理公開し、新たな歴史叙述の開拓を目指す。そのために、デジタル技術による拓本作成および拓本撮影方法を研究開発し、金石文史料の研究資源化を図る。さらに、東京大学史料編纂所公開の金石文拓本史料データベースの改良により、他機関との連携も視野に入れた研究資源活用・分析の高度化を目指す。並行して、伝統文化的景観の保護や地域復興に資する歴史研究の方法を核としながら、文化財から歴史研究の素材へと金石文活用に向けた史料学的研究を展開し、歴史地理情報にも注目して従来の書誌情報とともに登録を進める。最終的に、歴史学全体が依存してきた「文献史料」中心の歴史叙述から脱却し、一九八〇年代以降活発になってきた「モノ史料」を活用した歴史叙述の方法を、欧米におけるマテリアル・カルチャー研究の動向にリンクさせた国際的な日本研究の視野から展開し、情報発信してゆく。

(二) 研究実績

最終年度にあたり、COVID-19感染拡大が第五類に移行したことを受けて、研究計画の遂行がより確実となった。まず年度初めにオンライン会議により、参加者相互の連携体制を確認し、全体計画のもと班単位とした具体的計画を相談した。①東日本班は、前年度に宮城県石巻市教育委員会と連携し、同市博物館において共催した企画展（東京大学史料編纂所後援）の成果を総括した。その上で、さらに継続的に現石巻地域の板碑群を再度把握し、東日本大震災後の被害状況なども踏まえて拓本採集などの記録調査や過去の調査の検証を続けていくことの重要性を確認した。この新たな調査研究の方向を見定めるため、展示でもスポットを当てた同市長塩谷板碑群の拓本調査および周辺板碑群の確認調査を実施した。②西日本班は、引き続き高野山町石研究会との協力により高野山町石調査を実施した。町石正面の拓本採集完了を受け、本年度中に側面も含めたすべての拓本採集・デジタル化を完了する予定であった。そのため二回の調査を計画していたが、六月に発生した土砂崩れのため参詣道が通行止めとなり、第二回の調査を延期せざるを得なくなった。③デジタル技術・DB技術開発班は、金石文拓本データベースの抜本的改良・新システム完成を受けて、公開に向けての問題点を検討した。あわせて、史料編纂所図書館と協力しながら、従来の書誌情報を再検討し、修

正を実施した。上相英之はひかり拓本技術の実用化を受けて、高野山町石のデジタルデータを収集した。④歴史地理情報研究班は新データベースに連動し、歴史地理情報蓄積システム次期リポジトリの設計を実施した。⑤歴史叙述・国際日本学研究班は、九月にプリンストン大学において研究代表者が共催した国際研究集会「*Thinking through "Minshu Bukkyō" Popular Buddhism and the Study of Pre-modern Japan*」に、本研究課題に関連する三名の若手研究者の参加を依頼し、研究代表者とともに研究発表を行った。⑤その他、書籍購入等によって研究の総括を行い、各メンバーが論文執筆・研究発表等によって成果を発信した。

(三) 進捗状況

今年度は、研究計画の最終年度に当たり、前年度後半に引き続き、蓄積してきた調査研究成果の公開、市民への還元、さらには国際発信を意識し、当初の研究計画を総括することができた。東日本班では、石巻市長塩谷板碑群の調査を出発点として、あらたな研究課題を積極的に模索した。西日本班はフィールド調査の最終段階にあったが、自然災害により拓本採集を完了できなかった。デジタル班は、金石文拓本データベースの抜本的改良を受け、さらに歴史地理情報蓄積システム次期リポジトリの設計を実施したことは画期的であった。同時に最終年度の公開を計画していたが、後述の二〇二四年度への課題繰越にともない、新たなデータベースの問題点や書誌データの確認・修正を進めることとして、公開を延期した。研究成果の積極的発信にも取り組んだが、とくにアメリカ・プリンストン大学における国際研究集会において、本研究課題による成果が重要な役割を果たしたことは特筆に値する。

なお、前記の高野山における自然災害の発生による町石の悉皆調査が延期を余儀なくされたことを受けて、二〇二四年度に課題を繰り越した。これにより、悉皆調査を完了させると同時に拓本デジタル化を進め、将来的には本課題の成果を柱とする調査報告書出版する予定である。あわせて、東日本班において見出された新たな研究課題への展開を期して、関連拓本のデジタル化を進める予定である。このため、直接経費のうち一三二万円を二〇二四年度に繰り越した。

コンテキストに応じた人文科学データパッケージ化に関する研究

- 一、研究種目 基盤研究(A)
- 二、課題番号 二〇H〇〇〇一〇
- 三、研究期間 二〇二〇年度～二〇二四年度
- 四、研究経費 直接経費五一〇万円、間接経費一五三万円
- 五、研究組織

研究代表者 山家浩樹
研究分担者 本郷恵子、尾上陽介、井上聡、山田太造、小瀬玄士、林晃弘、中村覚、渋谷綾子（以上史料編纂所）、阿兄雄之（東京国立博物館）、馬場基（奈良文化財研究所）

六、研究の概要

(1) 研究の目的

本研究は、長年に亘り逐次的に蓄積されてきた史資料に関する諸データを対象として、①多様かつ大量なデータを統合し、永続的な提供を可能にする環境を整備すること

②膨大なデータ群を利用するにあたり、ユーザーが求めるコンテキストに応じた必要データのパッケージ化を確立すること

③紙史資料以外の人文科学研究資源への適用可能性の分析・検証を行うことを目的とする。これらの実現により、人文科学研究資源のあり方を一新してゆく。

(2) 研究の実績

前年度までの成果にもつぎ、以下に示す三課題を実施した。

①多様かつ大量なデータの統合と永続的な提供を可能にする環境整備
史料編纂所における基幹である所蔵史料目録DB (HCA) と史資料の物理的データ（紙質・状態・修理履歴など）を集約する「史料情報統合管理システム」との連携方式の確立に努めた。特に「AI等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業」におけるユースケース創出課題「異分野共創による史料学DXの確立」（提案代表者…尾上陽介）と連携し、上杉博物

館所蔵上杉文書や松尾大社社蔵史料の調査など六件の原本史料調査・分析を行い、その結果の登録を試行した。

② データのパッケージ化と提示手法の確立

引き続き①の成果をもとに、史料に関わるさまざまなデータを収集するためのコンテキストに基づいたパッケージ化方式の確立につとめた。史料データの分類や可視化の手法を確立していくため、トピックモデル LDA・STM といった AI・機械学習手法の適用を進めることでデータ駆動型データ提示モデルのプロトタイプینگを進め、その成果を国際会議 PNC2023 にて報告した。

③ 紙史料資料以外の人文科学研究資源への適用可能性の分析・検証

これまでに引き続き、奈良文化財研究所が行っている出土木簡や東京国立博物館ガラス原板をもとにした史料画像の利活用を前提とした適用手法についても検証を進めた。特にガラス原板に関する史料画像について、データ利用条件を設定するなど二次利用可能な形式として公開していくことを確認した。

筆跡・花押情報の高度利活用研究―収集スキームの錬成と関連歴史情報との統合による―

一、研究種目 基盤研究(A)

二、課題番号 二〇H〇〇〇二二

三、研究期間 二〇二〇年度～二〇二四年度

四、研究経費 直接経費五五〇万円、間接経費一六五万円

五、研究組織

研究代表者

末柄豊

研究分担者

井上聡・川本慎自・遠藤珠紀(以上、史料編纂所)・久留島典子(神奈川大学)・林譲(東京大学名誉教授・大山航(東京電機大学)・未代誠仁(桜美林大学)・村川猛彦(和歌山大学)・桑田訓也(奈良文化財研究所)

六、研究の概要

(1) 研究の目的

本研究は、これまで整備してきた筆跡・花押画像の安定的な収集環境を前提に、データ蓄積の質・量を一層拡大していくのと同時に、人文学的手法にとどまらない多様な方法論を援用することで、筆跡・花押研究の新たなステージを招来することを旨とするものである。筆跡・花押を正確に読む・理解するための学術基盤を作ることにとどまらず、筆跡・花押画像の典拠となった原史料に関するメタデータほか膨大な関連情報を十全に活用することで、それらの形象が帯びた歴史的メッセージを最大限に汲み上げてゆく。

(2) 研究の実績

本研究は前年度と同じく次の五つの観点から研究を進めた。

① データ収集の拡充と収集方針の高度化については、東京大学史料編纂所所蔵以外のオープンデータ史料群への対応を強めること、古代・中世史料から近世史料へと拡張してゆくことなどに意を用いた。結果、筆跡データを三〇〇〇〇件余、花押データを三二五〇〇件余と、あわせて六万件を越えるデータを新規登録することができた。

② 公開による社会的発信の強化をめぐつては、史料編纂所が公開する電子くずし字字典 DB「花押 DB」にて①の新規登録データを公開するとともに、他機関連携による「史的文字データベース連携検索システム」にも反映させた。くわえて同連携システムの強化にも協力し、新たに東京国立博物館との連携も確立することができた。

③ 画像解析技術の更なる革新と多様な手法の導入をめぐつては、新規に登録した①のデータを対象に機械学習を進めて、字形読解システム MOJIZO の機能強化を実践するとともに、特に花押データについては、研究分担者ならびに協力者の支援を得て、従前とは異なる手法による解析実験に着手することもできた。

④ 人物情報を媒介とした筆跡・花押分析の高度化研究については、前年度に引き続き、新規登録データの人物情報を、史料編纂所歴史情報処理システム内にある人物レポジトリへと移行するとともに、特に系図情報との連動を円滑にすることに意を用いた。

⑤ 史料学的情報との統合による筆跡・花押情報の高度利用研究では、前年度につづき文書様式ごとの字配りや花押配置について特徴を抽出することを

通じて、筆跡・花押データの自動収集やその解析について実験を行った。特に経典史料を対象とした取り組みを強めて、一定の成果を達成している。

なお、研究分担者であった林譲氏は、二〇二三年七月一三日に惜しくも逝去された。同氏は本科研の直接の前提である基盤研究(A)「前近代人物情報論の構築に向けた花押・筆跡の網羅的収集と汎用的利用に関する研究」ほか複数の研究プロジェクトの代表をつとめられ、精力的に筆跡・花押画像のデータベース化を進めるとともに、個人研究においても筆跡・花押に関する実証的な研究を牽引された。あらためて学恩に感謝し、謹んでご冥福をお祈りしたい。

在外日本関係史料の調査と貴重史料の研究資源化による維新史料研究国際ハブ拠点の形成

- 一、研究種目 科学研究費補助金 基盤研究(A)
二〇H〇〇〇二三
- 二、課題番号 二〇二〇年度～二〇二三年度
- 三、研究期間 七四〇万円、間接経費二二二万円
- 四、研究経費
- 五、研究組織

研究代表者 保谷徹(東京大学名誉教授)

研究分担者 岡美穂子・小野将・箱石大・水上たかね(以上、史料編纂所)・谷本晃久(北海道大学)

連携研究者 杉本史子・山田太造・立石了(以上、史料編纂所)

研究協力者 有泉和子・犬飼ほなみ・及川将基・加藤絵里子(以上、学術専門職員)・横山伊徳(東京大学名誉教授)・アレクサンダー・シュワインズバーク(東京大学史料編纂所特任研究員)・トラビス・サイフマン(立命館大学)・ワジム・クリモフ・ワシーリー・シェプキン(以上、ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所)・ルーク・ロバーツ(カリフォルニア大学)・ロバート・ヘリヤー(ウェイクフォレスト大学)・ダニエル・ボツマン(イエール大学)・佐々木利一・鈴木健治・鈴木仁・兔内勇津留・田村将人(以上、北海道大学)・東

六、研究の概要

俊佑(北海道博物館)

明治維新一五〇年を契機に、①在外日本関係史料の調査・収集と研究資源化を推進し、四つの重点研究チームを設置して補充調査と史料研究をおこなう。②幕末維新関係貴重史料コレクションのデジタルアーカイブ化と史料研究を進める。③維新史料研究国際ハブ拠点形成プロジェクトと連携し、幕末維新関係史料の基幹的データベース英訳事業の推進・研究用語や史料用語の英訳グロッサリー研究をおこなう。この三つのプロジェクトを有機的に連携し、世界史の中の明治維新研究を進める。幕末維新関係史料のデジタルアーカイブ化による公開や研究成果の国際発信につとめ、維新史料研究の国際ハブ拠点形成を目指す。

以下、研究実績の概要をかく。

I 在外日本関係史料調査と研究資源化の課題

(1) 海外史料調査を再開し、英仏所在日本関係史料の調査を実施した。TNA所蔵英国海軍省文書の調査・撮影をおこなった(三月)。南欧班(研究分担者・岡美穂子)ではポルトガル所在史料の調査(二月)を実施している。

(2) 横浜開港資料館と連携したフランス外務省史料(約八万コマ)のデジタル公開について、フランス外務省文書館長の最終合意を得た。具体的な公開作業は次年度実施される。

(3) ウクライナ戦争の影響により各班ともロシア調査は実施できなかったが、これまで紙コピーで収集した複製史料分を整理・目録化し、仮製本二八冊分を書庫へ入れて公開を準備した。先行研究で収集したデジタル史料画像も閲覧室端末で順次データベース公開している(ロシアII班)。

(4) 二月一日、ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所の研究協力者を招聘し、研究会(第一五回ポドゾル会)を開催した(ロシアIII班、研究分担者・谷本晃久)。

(5) オランダ所在日本関係史料の調査を実施した。The J.K. van den Broek Collectionのマイクロフィッシュを収集し(Herman J. Moeshart博士寄贈、フィッシュ一八四枚+冊子一部)、史料編纂所図書室にて所蔵・公開した。

(6) 南欧班では引き続き、イタリア貴族による日本・シベリア訪問記「日本とシベリア」(ルキノ・タル・ヴェルメ著、一八八五年改正第二版)の精訳研究をおこなった。

II 維新関係貴重史料の調査と研究資源化の課題

(7) 東京大学史料編纂所が所蔵する史談会本のデジタル撮影を実施し、今年度は「春屋雜史」「嘉永随筆(関縫殿介記)」「癸丑零報」「無造作日記」「日本海岸防禦法考案」など、一六六冊一万七三六コマを撮影した。次年度以降順次ウェブ公開に供していく。史談会本についてはデジタル化を完了した。総計二一二冊(二二三九四三コマ)である。今年度はさらに、外務省引継書類中の外交紀事本末底本の撮影をおこなった(約一万コマ)。

(8) 維新関係貴重史料について、今年度は科研費で以下の史料を購入して研究に供した。

「皆川遯堂関係史料」(全六一点)・東京府土族皆川昌(宗昌)の史料群。

皆川昌は天保五年(一八三四)、水戸近郷に生まれ、昌平黌で学んだ。維新後は新発田藩、ついで岩鼻県、島根県、飾磨県の官吏となり、明治二三年に土木局で非職となっている。履歴・系図に加え、「蝸廬叢書」(二五冊)と題した幕末の情報留が目をひく。一部を『幕末事変録』(博友社、明治二七年)として刊行したものの原本か。ほかに、数学の翻訳や土木・測量学の稿本などを含む。全点撮影して公開に供する予定。

「吉田常吉氏旧蔵資料」・吉田常吉さん(一九一〇～一九三)は、維新史料編纂事務局、東京大学史料編纂所にながく勤務した大先輩。その貴重な研究資料である。

また、別途寄付金会計で「東北鎮台銃卒日誌・御布告留」(二点、明治四年二月～五年五月)を購入した。黎明期の鎮台兵による貴重な記録史料である。

III 維新史料研究の国際化・データベース英訳研究の課題

(9) 維新史料研究国際ハブ拠点形成プロジェクトと連携し、「維新史料綱要」データベース英訳事業と英訳クロッサリ研究を支援して(二万二八〇〇件まで翻訳完了)、二月一八日、オンライン国際研究集会「維新史料研究と国際発信」を共催した(東京大学史料編纂所主催)。国際研究集会では、維新ハブPJの成果と課題について報告し、とくに本研究でデジタル撮影した

史談会本の内容と来歴についてとりまとめた。

(10) 第三回日本資料専門家欧州協会(EAJRS)年次大会(ベルギー・ルーヴェン市、発表日九月一日)、アルザス欧州日本学研究所(CEEJA)主催国際シンポジウム「近世日本列島北部地域の光と影」(フランス・コルマル市、発表日二月一六・一七日)など、海外での国際研究集会に参加・報告し、研究成果の国際発信をおこなった。

(付記) 二〇二四年四月四日、ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所上級研究員ワジム・クリモフ先生が亡くなった。享年七五歳。クリモフ先生には、本研究を含め、二〇数年にわたってロシア所在日本関係史料の調査と共同研究へのご指導・ご協力を賜った。あらためて感謝の意を表するとともに、謹んでご冥福をお祈りしたい。

外交の世界史の構築―一五～一九世紀ユーラシアにおける交易と政権による保護・統制―

一、研究種目 科学研究費補助金 基盤研究(A)

二、研究期間 二〇二一年度～二〇二四年度

三、研究経費 直接経費六六〇万円、間接経費一九八万円

四、研究組織

研究代表者 松方冬子

研究分担者 森永貴子(立命館大学)、塩谷哲史(筑波大学)、彭浩(大阪公立大学)、菊池雄太(立教大学)、岡本隆司(京都府立大学)、松本あづさ(藤女子大学)、辻大和(横浜国立大学)、大東敬典(東京大学史料編纂所)、木村可奈子(滋賀県立大学)、皆川卓(山梨大学)

五、研究の概要

本研究では日本史研究の蓄積を、他地域の事例と比較することで、新しい世界史像を構築しようとする。最終的には、ヨーロッパ中心主義を克服し、より平らかな世界史を描くことを目指す。

本年度は、下記の活動を行った。

○二三年七月、東京大学史料編纂所で第八回研究会を開催した。ラインアップは以下の通り。

五百旗頭薫『条約改正史』読書会（松本英実「五百旗頭薫『条約改正史』に対する法制史からの若干のコメント」／松方冬子「五百旗頭薫『条約改正史』を読む：「不平等」条約なのか？について」／彭浩「日本の条約改正と日清関係：五百旗頭薫『条約改正史』関係著作を読む」）
研究報告 皆川卓「近世スイス・ドイツの関税協定と関税紛争——『国家連合』システム（systema civitatum）との関係において」
○二三年八月、滋賀県立大学で第九回研究会を開催した。ラインアップは以下の通り。

二六日 菊池雄太報告「『領事』概念の整理——ヨーロッパ篇——」

二七日 条約条文の素朴な比較検討作業（その二）

菊池雄太「ハンザ諸都市とアメリカ合衆国の通商条約（一八二八年）」／松井真子「オスマン帝国の一六八〇年対蘭カピチュレーション」／木土博成「法度（#条約）にみる琉球在番奉行——一六五七年の二つの法度を読む——」／岡本隆司「南京条約」／川口洋史「パウリング条約」

○二三年九月、塩谷哲史、辻大和、松方冬子、森永貴子が、ウズベキスタン現地調査を行い、タシケントでウズベキスタン共和国科学アカデミー歴史学研究所Allaeva Nigora氏の講演会を開催した。

○二三年九月、カザフ国立大学で開催されたヨーロッパ中央アジア学会（E S C A S）に大東敬典、塩谷哲史の二名が主催・参加して、「交易をめぐる交渉——近世の中央ユーラシア、イラン、ヨーロッパ——Negotiating Trade: Central Eurasia, Iran and Europe in the Early Modern World」と題したパネル報告を行った。

○二三年一二月、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で開催された、国際ワークショップ“The Safavids, the Post-Safavids and the East Indian Companies”（科研費学術変革領域研究(A)20H05827主催、本科研共催）に、大東敬典が参加し、報告“Pursue of Agreement: The Dutch East India Company”を行った。

○二三年一二月、東京大学史料編纂所で第一〇回研究会を開催し、成果論集

に向けて、それぞれの論文の構想発表を行った。

○二四年三月、愛知学院大学で第一一回研究会を開催した。ラインアップは以下の通り。

大東敬典「Adam ClulowとLauren Bentonを読む（その一）——“Legal Encounters and the Origins of Global Law”と“The Art of Claiming”——」

松方冬子「Adam ClulowとLauren Bentonを読む（その二）——“Protection and Empire”——」

松井真子「堀井優『近世東地中海の形成』を読む」

○二四年二月～三月に原田亜希子がイタリア（ローマ／フィレンツェ）にて史料調査を行った。

○ほかに、いくらかの関連図書を購入した。さらに、試みとして、一冊の洋書についてごく一部のOCR化と機械翻訳を行った。

なお、本研究については、以下のウェブサイトを参照されたい。

http://www.hiu-tokyo.ac.jp/personal/fuyuko/kaken/gaikou_sekaisih.html

断片的史料情報の集積と歴史知識情報の相互参照体制の確立による新たな史料学構築研究

一、研究種目 科研費補助金 基盤(A)

二、課題番号 二一H〇四三五六

三、研究期間 二〇二一年度～二〇二五年度

四、研究経費 直接経費五一〇万円、間接経費一五三万円

五、研究組織

研究代表者

研究分担者

西田友広
井上聡・堀川康史・山田太造・中村覚（以上東京大学史料編纂所）・貫井裕恵・三輪真嗣（以上神奈川県立金沢文庫）・高橋悠介（慶応義塾大学）・佐藤雄基（立教大学）・守田逸人（香川大学）・高田智和（国立国語研究所）

六、研究の概要

(1) 研究の目的

本研究は、古文書学にもとづく史料批判の対象から漏れてきた、断片的史

料・逸失史料をあまねく学術資源化することで、中世史料学を根本的に見つめなおすことを目的としている。これまでも断簡・破損汚損文書・無年号文書といった多様な形態をとる史料が、古文書学的検討の対象から外れてしまふことへの批判はあったが、それらを積極的に活用するための具体的方策・提案は提出されずにきた。本研究では、隣接諸科学を含めたあらゆる方法論を援用することで、かつ情報化されたデータ群をあまねく参照しうる環境を整備することで、こうした史料の持つ可能性を徹底的に追究し、批判に足りうる有効な研究資源とすることを目指している。併せて、かつて確かに存在していた文書の痕跡を伝来史料から抽出・集約することで、残された文書の背景に広がる浩瀚な史料世界の復元を目指すものである。残存史料が持つ情報を最大限有効化するとともに、残されることのなかった史料存在をあまねく検出することによって見えてくる像を析出することで、従前の中世古文書研究の限界を突破し、新たな研究の地平を見出してゆく。

(2) 研究の実績

前年度に引き続き、計画調書に記した四つの観点から研究を進めた。

①断片化した史料を対象とする調査情報の高年度化研究では、前年度整備した「翻刻支援システム」を用いて、史料の体裁情報・テキスト情報を対象に構造化を開始し、生成されたデータを「史料情報統合管理システム」をはじめとする史料編纂所歴史情報処理システム(SHIPS)データベース群と連携しうる環境の構築に着手した。

②蓄積された知識情報の参照によるテキスト解析の高度化研究においては、前年度に続いてSHIPS-DB群から人名・地名などの歴史知識情報を抽出・蓄積する作業を強めて、データ群中の関連性・脈絡についてAIを用いた解析に取り組んだ。

③中世逸失史料情報の復元研究では、前年度に続き『鎌倉遺文』『南北朝遺文』を対象に、史料テキスト上に引用された逸失史料情報の検出・蓄積を推進した。全体の三分一程度を処理した段階ではあるが、すでに一万二千件余の新規データを生成している。平行してSHIPS内に構築した『南北朝遺文』フルテキストデータベースについては、既刊分全冊の本文データのデジタル化を終え、現在は校正作業を進めており(九州編全七冊・中国四国編二冊・

東北編二冊分を完了)、二〇二四年度中の一般公開が視野に入ってきた段階にある。

④課題解決にむけた分業体制の確立と拠点機関間の連携研究では、前年度に引き続き神奈川県立金沢文庫国宝金沢文庫文書データベースの収載コンテンツ強化(約二五〇件追加)、SHIPS-DBとの連携確保を進め、基盤となる環境の充実を図った。さらに①から③の研究と連動しうるように同文庫データベースにおいてTEIを用いた汎用的構造化に着手しつつある。

神社所蔵文書・世家文書の一体把握による中近世賀茂別雷神社の総合的研究

- 一、研究種目 科学研究費補助金 基盤研究(A)
- 二、課題番号 二二H〇〇〇一五
- 三、研究期間 二〇二二年度～二〇二六年度(二年目)
- 四、研究経費 直接経費三八〇万円、間接経費一一四万円
- 五、研究組織

研究代表者 金子拓

研究分担者 加瀬直弥(國學院大学・野田泰三(京都橘大学)・藤本仁文(京都府立大学)・石津裕之(東京大学史料編纂所)

六、研究の概要

本研究は、中世から近世にかけての賀茂別雷神社(上賀茂神社、以下賀茂社と略記する)について、賀茂県主一族により構成される氏人惣中により支えられるという宗教領主のなかでも特徴的な人員構成のもと、中近世を通じて膝下地域を支配した賀茂社の所領支配・収取制度の特質と歴史の変遷、および氏人たちにより運営された祭祀神事の実態と歴史の変遷、および氏人たちとなる信仰文化の特質、宗教領主が時代を通じて存続するために行った政治権力者との交渉・接触など、多様な側面から賀茂社の歴史の実態を明らかにすることにより、比較的長期にわたって存続した宗教領主を祭祀、政治、経済の面から総合的に明らかにするための研究の方法を構築するものである。

これを実現するために、賀茂社が所蔵する史料にとどまらず、同社を構成

する氏人の家（社家）に伝わる史料を合わせ、総合的に調査・撮影およびそのデジタル化を行い、それらの目録を作成して、東京大学史料編纂所のデータベースから一体的に公開することにより、中近世における神社のなかでも稀にみる質と量を誇る賀茂社関係史料について、研究環境の基盤を構築する。本年度は、史料編纂所特定共同研究と合同で、賀茂別雷神社に二度出張し、賀茂別雷神社文書の撮影をおこなった。また、株式会社堀内カラーに賀茂別雷神社文書の撮影を委託し、デジタル画像の収集を進めた。

賀茂社氏人家の伝来史料については、岩佐家文書（京都市歴史資料館寄託）の中世分を撮影した。また、岡本保閑家文書の撮影と目録整備をおこなった。さらに氏人の花押画像の本所花押データベースへの登録を進めた。これらの作業のため学術専門職員二名を雇用した。

今年度は、特定共同研究との合同で、オンラインでの研究会と対面での研究会を各一回開催した。

荘園絵図調査・解析方法に関する総括的研究と汎用的な歴史地理情報への応用研究

- 一、研究種目 科研費補助金 基盤(A)
- 二、課題番号 二二H〇〇〇一六
- 三、研究期間 二〇二二年度～二〇二六年度
- 四、研究経費 直接経費六七〇万円、間接経費二〇一万円
- 五、研究組織

研究代表者 井上聡

研究分担者

藤原重雄・岡本真・山田太造・菊地大樹・中村覚（以上史料編纂所）・守田逸人（香川大学）・渡辺晃宏（奈良大学）・高田祐一（奈良文化財研究所）・関野樹（国際日本文化研究センター）・榎原雅治（公益財団法人地震予知総合研究振興会）

六、研究の概要

（１）研究の目的

本研究は、東京大学史料編纂所が『日本荘園絵図聚影』編纂事業のなかで

蓄積した古代・中世絵図情報をもとに、絵図史料群の総体が、いかなる歴史的展開を遂げたのかを明確にすること、および総体としてどのような空間認識に規定されていたのかを究明することを目的としている。また近年関心の高まる環境史・災害史等からのアプローチも踏まえて、新たな調査・分析方法の創出・提示を行うこと、あわせてこれまでに収集した膨大な絵図関連情報を、ネットワーク環境のもとで学界共有の研究基盤とすることも目指している。

（２）研究の実績

研究実施計画にもとづき、以下の三課題の研究を推進した。

① 荘園絵図調査・分析に関する新手法の提案と絵図群総体の展開過程に関する研究

前年度に引き続いて既存の絵図調査データの分析・提示方法の深化を図り、その成果を研究代表者ほか研究分担者も参画する東京大学史料編纂所編『日本荘園絵図聚影 釈文編』（東京大学出版会刊行）の編纂事業に反映させた。

かつまた「讃岐国善通寺伽藍絵図並寺領絵図」・「豊前国野仲郷絵図」などの現地調査を重ねて実践し、前近代の空間認識を規定した規範性の検証を行った。さらに「筑前国志賀海神社縁起」の原本調査を実施して、絵図の周囲にある絵画史料群の分析を通じて、空間描写の在り方について研究を進めた。

② 蓄積された調査情報の保全・秩序化と史料編纂所歴史情報処理システム内（SHIPS）内DBを活用した発信・共有研究

前年度の取り組みを踏まえて、SHIPS内の「地理情報システム」の再構築と機能強化を実践した。併せてSHIPS内で連動して機能する「金石文拓本データベース」・「史料編纂所所蔵荘園絵図模本データベース」の再構築及び参照機能の強化も進めた。

③ オープンデータ環境における絵図情報の発展的活用と新たな研究資源の創出研究

「地理情報システム」の機能刷新を踏まえつつ、収載する地理データの構造を踏まえて、奈良文化財研究所ほかと汎用的な活用方法について協議と実験を行った。

「古文書科学」の応用実践

- 一、研究種目 科学研究費補助金基盤研究(A)
- 二、課題番号 二三H〇〇〇一一
- 三、研究期間 二〇二三年度～二〇二七年度
- 四、研究経費 直接経費八一〇万円、間接経費二四三万円
- 五、研究組織

研究代表者 渋谷綾子

研究分担者 石川隆二(弘前大学)・大橋有佳(公益財団法人元興寺文化財研究所)・高島晶彦・尾上陽介・新井重行(以上東京大学史料編纂所)・後藤真・天野真志・小倉慈司(以上国立歴史民俗博物館)・野村朋弘(京都芸術大学)・阿児雄之(独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館)

研究協力者 山田太造・中村覚・山口悟史(以上東京大学史料編纂所)・上條信彦(弘前大学)・富田正弘(富山大学名誉教授)・大川昭典(元高知県立紙産業技術センター)・湯山賢一(元神奈川県立金沢文庫)・高橋修(茨城大学)・丹羽尉博(大学共同利用機関法人高エネルギー加速器研究機構)・鍾國芳(台湾・中央研究院生物多樣性研究中心)・國府方吾郎(国立科学博物館)

六、研究の概要

(1) 研究の目的

本研究は、原材料の科学的評価に注目し、自然科学的手法で蓄積してきた学理と人文科学的視点を融合した古文書の歴史研究「古文書科学」の実践プロジェクトである。研究では、先行研究の成果をふまえて以下を実施する。

- ①最先端計測分析技術による史料情報の体系的蓄積、②史料情報保存・活用技術の評価と将来予測、③地域社会への技術提供とユースケース開拓。歴史資料のもつ科学情報を多面的に収集・分析・モデル化し、社会的課題の解決を目指す。

(2) 研究の実績

二〇二三年度は下記を実施した。①原本史料の現況精査と構成物分析(渋谷・高島・大橋)、②カジノキにおける葉緑体DNAの配列データの解析(石川)、③史料情報・計測分析データの資源化(野村・尾上・小倉・新井)、④史料保存・修復等に関する研究・教育コンテンツの開発についての検討(天野・後藤・阿児)、⑤若手研究者・技術者育成のための取り組みについての検討(渋谷・高島)。二〇二三年五月に全員の計画を確認した後、それぞれ研究活動を実施し、随時、各自の進捗状況と成果を共有した。

研究成果は、日本遺伝学会第九回大会(二〇二三年九月、オンライン)、第三三回日本資料専門家欧州協会年次大会(二〇二三年九月、於ベルギー)、日本文化財科学会第四〇回記念大会(二〇二三年一〇月、於奈良)など国内外の学会で報告するとともに、泉大津市立図書館の主催する「地域の文化・歴史再発見講座」(二〇二三年八月)や誠品生活日本橋で行われた「Takami Plus 2023 (二〇二三年九月)」において一般向けの講演を行った。さらに、研究協力者の所属機関である台湾・中央研究院やアメリカ・メトロポリタン美術館アジア美術部、日本資料専門家欧州協会など海外の機関や学会と協力し、ワークショップや研究会、シンポジウムなどを二〇二四年度以降に共同で実施することについて検討を進めた。

大型絵図類のデータ構造化と関連史料の連携による南西諸島「海上の道」の復元的研究

- 一、研究種目 基盤研究(A)
- 二、課題番号 二三H〇〇六九八
- 三、研究期間 二〇二三年度～二〇二六年度
- 四、研究経費 直接経費一〇三〇万円、間接経費三〇九万円
- 五、研究組織

研究代表者 黒嶋敏

研究分担者 岡本真・杉本史子・須田牧子・中村覚・畑山周平(以上東京大学史料編纂所)・渡辺美季(東京大学大学院総合文化研究科)・上杉和央(京都府立大学)・片桐千重紀(沖縄県教育庁)・木土博成(九州大学)・松尾晋一(長崎県立大学)・

山田浩世（沖縄県立芸術大学）・屋良健一郎（名桜大学）
研究協力者 安里進（沖縄県立芸術大学名誉大学）・麻生伸一（琉球大学）・
安達裕之（東京大学名誉教授）・今井健三（元海上保安官）・
村井章介（東京大学名誉教授）

六、研究の概要

本研究では、南西諸島を広域的に描き海事情報が記された一五世紀以降の絵図類を「海上の道」を記す「歴史航海図」と位置づけ、それらの学際的な比較検討および現地調査を通じて、前近代の海上交通の実態に迫ることを目的とする。とくに絵図類は、デジタル画像としてデータを構造化することで多様な連携と分析が可能になることから、すでに公開している「正保琉球国絵図デジタルアーカイブ」を母体に、その機能拡充と汎用化を図り、複数の大型絵図や関連史料・地理情報を連携させた「海上の道デジタルアーカイブ」（仮称）を構築し、公開して研究基盤とすることを目指している。

研究期間の初年次となる二〇二三年度は、まず「歴史航海図」および関連史料の集積と検討として、都城島津邸、東洋文庫、三井文庫、本居宣長記念館、鹿児島県立図書館、（台湾）故宮博物院などの史料所蔵機関に赴き、調査・撮影を行った。また研究組織内で、問題関心・調査進捗状況を共有する意味を含め、年度中に合計四回の研究会を開催した（一部オンライン開催）。

次に、大型絵図類の研究基盤整備として、「正保琉球国絵図」と関係が深い「琉球并諸島図」（都城島津邸所蔵）のデータ構造化に着手し、二〇二三年九月より「都城島津邸所蔵「琉球并諸島図」デジタルアーカイブ」を公開した。その準備段階では、JFE二一世紀財団アジア歴史研究助成よりの寄付金「前近代の那覇港における航路と聖地」（二〇二三年、研究代表者黒嶋）とも連携し、データ整理などの作業を行った。なお、本所と都城島津邸の間では、二〇二一年より覚書を交わして双方の連携を進めており、このデジタルアーカイブも両者の連携の一環として位置づけられることから、公開開始を報告する記者発表を二〇二三年九月二〇日に都城市役所において実施した。このほか、二〇二四年二月に東京大学附属総合図書館（南葵文庫）所蔵の「九州全図」二点についてデジタルスキニングを行い、データ構造化の準備を進めているところである。

さらに、「歴史航海図」に記されている海事情報の分析を現地の地理的情報を踏まえて分析していくために、那覇港・および慶良間諸島での現地調査を二〇二三年十一月に実施した。慶良間諸島は風待ちに適した地理的条件から那覇港の外港としての機能を持つだけでなく、琉球―中国南部航路の経由地でもあり、関連する絵図・史料も少なくない。現地調査では、とくに慶良間諸島の水中遺跡について研究分担者の片桐千亜紀氏に解説していただきながら、関連する地点を船で回り、現地の景観と絵図での描かれ方を検証していった。

今後、研究最終年度となる二〇二六年度にかけて、史料研究・デジタル化・現地調査という大きく三つの作業を分担して行い、研究課題の遂行を図っていききたい。

「原本史料情報解析」の方法による中世西国武家文書の研究と展開

- 一、研究種目 基盤研究(B)
- 二、課題番号 二〇H〇一三〇七
- 三、研究期間 二〇二〇年度～二〇二三年度
- 四、研究経費 直接経費三〇〇万円、間接経費九〇万円
- 五、研究組織

研究代表者 本郷恵子

研究分担者 木村直樹（長崎大学）・小瀬玄士・渋谷綾子・西田友宏・

野村朋弘（京都芸術大学）・長谷川博史（島根大学）・畑山

周平・村井祐樹（幹事）

六、研究の概要

本研究は二〇一五～一九年度に実施した、『島津家文書』の修理・研究を中心事業とする「原本史料情報解析による複合的史料研究の創成事業」において培った原本史料情報解析の方法を用いて、原本史料についての研究的側面をいっそう深めることを目的としている。中世の西国武家文書へと対象をひろげ、文字テキストの読解から史実を確定するだけでなく、数百年にわたって伝来してきた原本史料の軌跡をさまざまな角度から検証し、史料の持つ豊

かな情報を最大限あきらかにしようとするものである。

本年度は以下の史料の調査・撮影を実施した。①京都市歴史資料館…明通寺文書（林屋辰三郎氏の収集史料から成る燈心文庫に含まれるもので、若狭の明通寺より流出した文書である。『福井県史』にも未収で、これまで注目されたことがないが、中世の同寺についての知見を補強する内容である）、②福岡市立博物館…黒田文書・結城文書・青柳種信関係資料、③九州国立博物館所蔵文書、④称名寺文書（福岡市、新出史料。大友氏や大内氏家臣から博多の時宗寺院である称名寺に出された文書である。散逸したとされていた原本が、近年発見された）、⑤島根大学…小笠原文書、⑥島根県立図書館…庵原文書・富文書、⑦石見銀山センター…金皇寺文書（新出史料。毛利氏や吉川氏から石見国の金皇寺に出された文書）・宗岡文書、⑧堺市博物館…法道寺文書・堺市博物館所蔵文書・今井文書・赤木氏所蔵文書・中村結鎮御頭次第、⑨大阪歴史博物館…三刀屋文書（新出史料。出雲国人である三刀屋氏の文書。これまで知られていた水戸彰考館蔵の写本とは別系統の三刀屋家に残されたもの）・久米田寺文書、⑩佐賀県立図書館…堤文書・深江文書・隈文書・龍造寺文書・犬塚文書・有浦文書・山口家史料、⑪八雲神社文書（鎌倉市）、⑫大阪城天守閣・大阪城天守閣所蔵文書・吉村文書・土屋氏旧蔵文書・西野文書（新出史料。近江浅井氏から北近江の国人西野氏に出された文書）、⑬馬の博物館所蔵文書、⑭大浦文書・洲河文書（対馬市）、⑮徳島城博物館…木戸氏所蔵文書、⑯徳島県立図書館…呉服文書、⑰本門寺文書・常德寺文書（三豊市）、⑱山口市歴史民俗資料館…長井文書・吉敷毛利文書（新出史料。秀吉発給文書二通・豊臣家奉行発給文書二通から成る。主に小早川氏に充てられている）・西郷文書、⑲山口県文書館…有福文書（正本と写しとが混在する文書群。相続の際に分割されたと考えられる。秀吉朱印状に至っては、朱印が半分だけ残されている）・右田毛利文書、⑳平群町教育委員会…尾張椿井文書、㉑清水文書（奈良市）、㉒勝尾寺文書（箕面市）

また、蛭川親元書状・某書状（田原文書）各一通、『湯原家文書』、『蜂須賀文書写』（永青文庫）の修理・調査を行った。某書状は新規購入で、豊後の国人田原氏を充所とする南北朝期の文書である。『碩田叢書』を編纂した後藤碩田から、織部流茶道を再興した豊後藩士古田氏に譲渡されたという由

緒書がみられる。『湯原家文書』は昨年度からの継続である。

さらに、以下の二点の報告書を作成した。

①末柄豊・村井祐樹編『音羽山清水寺中世文書』（史料編纂所成果報告書2023-1）

京都市の音羽山清水寺に伝来した中世文書の調査図録。本史料群は、もとは成就院等の院家に所蔵されていたと考えられるが、現在は同時宝物館に一括収蔵されている。本所においても一九三〇年に影写本が作成されているが（成就院文書・慈心院文書）、それらに加えて旧清水寺本坊所蔵文書および成就院よりあらたに発見された史料を収めた。

②小瀬玄士・畑山周平・村井祐樹編『島津家文書「御文書」外中世文書集』（史料編纂所成果報告書2023-6）

本所所蔵の国宝『島津家文書』のうち「御文書」に収められていない中世文書の調査図録。『島津家文書』においては、慶長年間以前の文書のほとんどは、「御文書」と名付けられた二三八巻のうちに収められているが、別に中世文書をまとめた五巻の卷子がある。おそらくは「御文書」が成巻された一七世紀半ば以降に島津家に入ったものと考えられる。

このほか、史料編纂所所蔵『島津家文書』のなかの「薩藩勝景百図」と昨年度翻刻を完了した「薩藩勝景百図考」について、近衛信尹（一五六五～一六一四）の薩摩配流と名勝成立の関係を検討した。

以上の活動を通じて、西国武家文書の研究資源化を行うとともに、西国武家の権力構造や相互の連携状況等の分析を進めた。

近世書状史料群の研究と歴史情報資源化

- | | |
|--------|--------------------|
| 一、研究種目 | 科学研究費補助金 基盤研究(B) |
| 二、課題番号 | 二二H〇〇六九一 |
| 三、研究期間 | 令和四年度～令和七年度 |
| 四、研究経費 | 直接経費三五〇万円、間接経費一〇万円 |
| 五、研究組織 | |
| 研究代表者 | 松澤克行 |

研究分担者 荒木裕行（東京大学史料編纂所）／畑山周平（東京大学史

料編纂所）／山本一夫（東京大学史料編纂所）

六、研究の概要

本研究は、近世の主要な文書史料であり、大量に残されていないながら、相対的に利用されることが少ない書状について政治史的・史料学的研究を行い、十七世紀を中心とする近世史研究の進展を目指す。具体的には、東京大学史料編纂所に所蔵される島津家文書のうち、書状を中心とした文書を巻装した「御文書」と、公益財団法人陽明文庫が所蔵する近衛家文書など、群として伝来した近世の武家・公家の書状を、それらが属する史料群との関係に留意しながら政治史的・史料学的に研究する。また、「御文書」の近世部分のほか、巷間に所在する書状史料群（個人コレクション）をデジタルデータ化し、画像のデータベース公開や目録作成・研究・紹介などの歴史情報資源化と研究を行い、学会・社会への提供を目指す。

今年度の実績は次の通りである。

①前年度に続き、「島津家文書 御文書」（東京大学史料編纂所所蔵）のうち、近世分で未撮影のものについてデジタル撮影を進めた。今年度は「御文書 日新公（十通）」（S島津家文書4-1-1）から「御文書 家久公八 卷十三（二十四通）」（S島津家文書4-26）までの二十六巻について、一億五〇〇〇万画素の高精細デジタル撮影を行った。

②個人コレクションの書状史料群を九七五点、デジタル撮影を行い蒐集し、その史料目録と一部の釈文を作成した。また、書状が写し取られて記録されている個人所蔵の近世期公家日記を借用し、デジタル撮影を行い史料蒐集した。

③岡山県立記録資料館・岡山市立中央図書館・津山郷土博物館・鳥取県立博物館・鳥取県立図書館・米子市立図書館・広島県立文書館・千葉・京都の個人宅などに出張し、近世史料の調査を行った。

④研究代表者の松澤克行が、霞会館京都支所で講演「江戸時代の公家と武家」（令和五年四月二二日）を行い、研究分担者の畑山周平が、鹿児島薩摩川内市の川内歴史資料館で講演「古文書から拓がる世界―歴史資料館における国指定重要文化財の収蔵意義と活用―」（川内歴史資料館開館四〇周年記念講演会、令和六年二月一日）を行った。

⑤来年度デジタル撮影による史料蒐集に向け、所蔵者と事前交渉を行った。

なお、研究代表者・研究分担者による主な研究論文等は以下の通りである。

・松澤克行「陽明文庫所蔵『近衛信尋書状并後水尾天皇勅返』―島津氏関係史料の紹介―」『東京大学史料編纂所研究紀要』第三十四号、令和六年三月

・荒木裕行「内憂外患と近世日本の限界」荒木裕行・小野将編『日本近世史を見通す 第三巻 体制危機の到来』吉川弘文館、令和六年一月

・荒木裕行「天保・弘化期の幕政」荒木裕行・小野将編『日本近世史を見通す 第三巻 体制危機の到来』吉川弘文館、令和六年一月

・畑山周平・水野嶺「愛媛県龍澤寺所蔵『薩州本山福昌寺年来記抜書』上」『尚古集成館紀要』第二十二号、令和五年二月

・山本一夫「中津藩の米会所・米切符と地域経済」『日本歴史』第九〇七号、令和五年二月

日本近世史料学の再構築―基幹史料集の多角的利用環境形成と社会連携を通じて

- 一、研究種目 基盤研究(B)
- 二、課題番号 二二H〇〇六九二
- 三、研究期間 二〇二二年度～二〇二四年度
- 四、研究経費 直接経費四六〇万円、間接経費一三八万円
- 五、研究組織

研究代表者 杉本史子

研究分担者 稲葉継陽（熊本大学永青文庫研究センター教授）、母利美和（京都女子大学文学部 教授）、以下本所・菊地智博、

立石了、鶴田啓、中村寛、箱石大、林晃弘

研究協力者 山田太造

学術専門職員 岡島翔、黒滝香奈、世川祐多、高垣亜矢、竹村到、山田拓実

六、研究の概要

本研究では、日本近世史の基幹的史料集について、その編纂における経緯を知を、デジタル技術を活用しながら社会に還元し、紙媒体とデジタルデータ

のふたつを両輪のように動かしていくことで、日本近世史料研究を深めることを目的とし、①デジタルライゼーションによる史料研究、②史料所蔵機関との連携強化による社会連携、③研究交流による研究成果発信を行っている。

①については、引き続き日本近世史基幹的史料集のデジタルデータ作成を集中的に行い、史料編纂所のデータベースから公開した、『大日本維新史料 類纂之部 井伊家史料』について、一七〇五レコードの索引データを作成・登録・修正して公開したほか、未刊行原稿について八四三件のデータ化を行った。『大日本近世史料 市中取締類集』の目次データ八九六件を作成した。さらに、『大日本近世史料 細川家史料』第一七巻の本文データを作成・公開した。また、後述のデジタルライジング研究会で得た知見をもとに、オンラインによる会議を開催してデータベース改良方針を策定した。

②については、公益財団法人永青文庫と同文庫所蔵史料のデジタル公開方法について協議を深め、公開の準備作業として目録データの作成を進めたほか、同文庫所蔵史料に関するシンポジウム「近世初期における「御国」と「公儀」を熊本大学永青文庫研究センターと共同して開催した。

③については、熊本大学永青文庫研究センターと共に九月にシンポジウム「近世初期における「御国」と「公儀」を対面・オンラインのハイブリッドにて開催したほか、一二月には史料編纂所・同所維新史料研究国際ハブ拠点形成プロジェクト主催の国際研究集会「維新史料研究と国際発信」開催に協力した。また、昨年度開催の国際研究集会「幕末維新史料研究と井伊家史料」の成果を『東京大学史料編纂所研究紀要』第三四号に掲載した。さらに、デジタル技術やその課題に関する理解を深めるために、デジタルライジング研究会を四回開催し、最新の知見を共有した。

著書・論文・学会報告といった個々の本研究の成果については、科学研究費助成事業データベースの該当ページをご覧いただきたい。

幕末明治期古写真の調査とその解析・復元・保全を総合的に捉える写真史料学の構築

- 一、研究種目 基盤研究(B)
- 二、課題番号 二三H〇〇六五四

三、研究期間

二〇二三年度～二〇二六年度
(二〇二四年度からは区分が基金に変わるため、課題番号が二三K二五三五一に変更)

四、研究経費

直接経費三九〇万円、間接経費一一七万円

五、研究組織

研究代表者 谷昭佳
研究分担者 箱石大・保谷徹(東京大学・名誉教授)・高橋則英(日本大学・上席研究員)・遠藤樂子(東京国立博物館・主任研究員)・宇都宮正紀(奈良大学・アソシエイトフェロー)

六、研究の概要

研究初年度は、国内各地に点在するオリジナルの幕末明治期古写真の調査を中心に取り組んだ。また海外の写真修復保存機関に出張し、一九世紀の古典技法により制作された写真技法の識別調査および修復保存の施設と教育現場などを見学した。くわえて写真修復保存分野の先達者らと共に、今後のこの分野の方向性などについて意見効果をおこなった。主な研究活動の内容と成果は以下であった。

国内出張資料調査等…①岩手県内所在古写真関係資料調査とガラス板写真の高精細撮影を同県内の複数機関にておこなった。②静嘉堂文庫にて、同文庫所蔵資料調査をおこなった。③横浜開港資料館にて、幕末期に幕府の要職を歴任した木村芥舟の写真関係資料について目録作成・調査撮影をおこなった。④伊賀市上野図書館にて、上野城関係古写真調査および高精細撮影をおこなった。⑤鳥取県下所在古写真関係資料調査および撮影を同県内の複数機関にておこなった。⑥海の見える杜美術館にて、同館所蔵中嶋待乳関係古写真コレクションの調査および保全対策の準備作業をおこなった。⑦山口県下所在古写真コレクションの閲覧調査と簡易撮影をおこなった。⑧鍋島報効会徴古館にて、これまでの調査成果公開に向けた目録および画像データの確認作業をおこなった。⑨鹿児島県下所在古写真コレクションの予備調査をおこない、その後に本調査に着手した。

海外写真修復保存機関調査…アメリカ合衆国に出張し、ナショナルギャラリー、国立公文書館、ウインターサー美術館、メトロポリタン美術館にて一

九世紀写真の技法調査および写真コンサベーションラボの見学などをおこなった。

所内資料調査等…①研究成果公開に向けて、壬申検査関係古写真画像データ整理および目録整備作業をおこなった。②歴史学者・辻善之助と辻達也関係未整理古写真資料の整理保存と目録作成等に取り組んだ。

その他…ガラス板の写真油絵の復元について、研究分担者と制作手順や技法などについて協議検討した。これに関連する研究成果として、谷昭佳「失われた技法『写真油絵』の復元的研究―紙盤二製スル法の再現―」（『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』第一〇一号、一一―一〇頁、二〇二三年七月）を発表した。

十六世紀西日本港町の構造と関連―文献・考古学資料の国際・横断的分析による―

- 一、研究種目 科学研究費補助金 基盤研究(B)
- 二、課題番号 二三H〇〇六六三
- 三、研究期間 二〇二三年度～二〇二六年度
- 四、研究経費 直接経費三二〇万円、間接経費九六万円
- 五、研究組織

研究代表者 岡美穂子

研究分担者 渡辺芳郎（鹿児島大学）・鶴島博和（熊本大学）・伊藤幸司（九州大学）・関周一（宮崎大学）・藤田明良（天理大学）・

太田淳（慶應義塾大学）・鹿毛敏夫（名古屋学院大学）・佐

藤由似（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）・

鷺頭桂（独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館）

六、研究の概要

本研究では、日明貿易、南蛮貿易などを研究してきた文献研究者が多く集い、港町での交易関係品発掘調査などを牽引してきた地元自治体の研究者らと相互に知識を共有することで、主に九州と畿内を結ぶ交易網の特徴や物流の実態、その中で重要な役割を果たした港町の構造をダイナミックにとらえる。各関係自治体の文化財、文献研究者に積極的な参加を促し、自治体の垣

根を超えたネットワークを形成することで、新たな知識体系が共有される。また日本史だけではなく、東南アジア島嶼部、同じく島国であるイギリスの海域史を専門とする研究者が参加することで、西日本の港町の特質や、それらの地域との共通性、差異等が明らかになる。

二〇二三年度は、長崎県文化振興・世界遺産課主催「東楳山キリシタン伝承 華南三彩壺調査報告会&特別公開」（長崎市役所、二〇二三年五月二日）及び大分県埋蔵文化財センター主催シンポジウム「キリシタン街道がつなぐ豊後府内と長崎」（大分市能楽堂、二〇二三年八月二〇日）で科研メンバーが研究発表をおこなった。また二〇二四年三月十六日にオンラインで公開研究報告会「戦国期の日本列島と東南アジア」を開催した。十一月には共同調査で沖縄県にて中近世琉球王国関連史料・史跡の調査を実施した。

維新政府による朝廷・幕府・諸藩を源流とした文書行政の解明と関連史料群の学術資源化

- 一、研究種目 基盤研究(B)補助金
- 二、課題番号 二三H〇〇六六四
- 三、研究期間 二〇二三年度～二〇二七年度
- 四、研究経費 直接経費二四〇万円、間接経費七二万円
- 五、研究組織

研究代表者 箱石大

研究分担者 水上たかね（東京大学史料編纂所・助教）、宮間純一（中央大学文学部・教授）、村和明（東京大学大学院人文社会

系研究科・准教授）

研究協力者 天野真志（国立歴史民俗博物館研究部・准教授）、石田七

奈子（東京大学史料編纂所・学術専門職員）、柏原洋太（千

葉県文書館・主事）、佐藤大悟（青山学院大学附置青山学

院史研究所・助教）、渋谷綾子（東京大学史料編纂所・特

任助教）、白石烈（宮内庁書陵部編修課・主任研究官）、高

島晶彦（東京大学史料編纂所・技術専門職員）、立石了（東

京大学史料編纂所・助教）、長坂良宏（国立公文書館・公

文書専門官)

六、研究の概要

(1) 研究の目的

本研究の目的は、近世の朝廷・幕府・諸藩において実践されてきた文書に基づく政務処理と文書管理方式の一部を継承・導入してこれらを融合させ、新たに構築されていったと推測される維新政府の文書行政システムを解明しようとするものである。このため、維新政府期の明治太政官文書群と、政府関係文書原本を含む官員個人文書群を対象として調査・分析を進め、同時にその過程で集積された研究課題に関連する史料群のうちデジタル写真撮影を実施したものについては、その画像データに詳細な書誌情報を付与し、国際的・学際的にも共有可能な学術資源としてウェブ公開することにより、協創的な研究基盤の整備に寄与する。

(2) 研究の計画・方法

〔維新政府の文書行政システムに関する調査・研究〕

東京近郊や遠隔地など各所に分散所在する明治太政官文書原本群と、政府関係文書原本を含む官員個人文書群を史料として研究を進める。また、維新政府文書を対象としてアーカイブズ学的研究と古文書学的研究の融合を試み、文書料紙に関する基礎データの蓄積も行なう。

〔維新政府による文書行政の源流となった朝廷・幕府・諸藩における諸慣行の調査・研究〕

近世の朝廷・幕府・諸藩における文書行政の諸慣行が、維新政府による文書行政にどのような影響を与えていたのかという問題について調査・研究する。とくに、維新政府における文書行政システムと個別文書の様式は、近世朝廷の影響をもっとも強く受けていると考えられるので、近世朝廷における政務処理や発給文書の古文書学的研究については、本研究の目的に応じた重点的に取り組む。調査・研究の対象となる史料は、関白、武家伝奏、議奏、六位藏人、非藏人らの文書・記録類、朝廷各部署の文書・記録類であるが、その大半は、宮内庁書陵部・国立公文書館・東京大学史料編纂所に所蔵されているので、それらの所蔵史料を中心に調査・研究を進める。幕府の外国奉行所、勘定奉行所、海軍・陸軍諸役所の文書行政、諸藩の文書行政について

も、本研究に関連する限りにおいて必要な調査・研究を進める。

〔関連史料群の学術資源化〕

単独では所蔵史料のデジタル写真撮影や画像データのウェブ公開を行なうことが困難な機関と連携し、国指定重要文化財を含む貴重史料群の保存・利活用にも寄与することを目指す。関連史料群の学術資源化は、①詳細目録作成、②デジタル写真撮影（出張撮影あるいは文化財の取扱に習熟した専門業者への委託撮影）、③画像データ・詳細目録情報のウェブ公開（所蔵機関の承諾を得て史料編纂所より発信）という手順で進める。

(3) 二〇二三年度の研究実績

〔東京大学史料編纂所所蔵「復古記原史料」の調査・研究〕

各所に分散所在する明治太政官文書原本群の一つである東京大学史料編纂所所蔵「復古記原史料」について、詳細目録データ二〇一件を作成し、その内容分析を行なった。成果の一部は、共同研究参加者による研究会（二〇二四年三月三十一日、オンライン開催）において共有した（石田七奈子氏が復古記原史料の大番号三〇から重要史料を紹介）。

〔岩倉具視関係文書の調査・撮影〕

政府関係文書原本を含む官員個人文書群として、各所に分散所在する岩倉具視関係文書のうち、海の見える杜美術館所蔵「岩倉具視関係史料」については、二〇二三年七月・一二月に出張調査を実施し、卷子本「功臣遺墨」第六十一巻～第百二十巻のデジタル写真撮影を完了させた。そして、二〇二四年一月には、「功臣遺墨」第一巻～第六十巻分のカラー画像データを、三月には同第六十一巻～第八十五巻分のカラー画像データを、史料編纂所のデータベース（Hi-CAT Plus）より公開した。さらに、未整理史料（慥貪式木箱の引出しに収納、総数約五〇〇件）の仮目録（未定稿）を作成した。

なお、公表した研究成果は、以下の通りである。

〔論文等〕

村 和明「近世朝廷と統一政権」（牧原成征・村和明編著『日本近世史を見通す』第一巻、吉川弘文館、二〇二三年八月）

箱石 大「山口県文書館所蔵の長州藩版板本・木活字」（『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』第一〇三号、二〇二四年一月）

村 和明「近世の天皇と朝廷 近世日本のなかでの位置づけ」(上野大輔・清水光明・三ツ松誠・吉村雅美編『日本近世史入門 ようこそ研究の世界へ!』勉誠社、二〇二四年三月)

白石 烈「資料紹介 朝彦親王の広島配流に関する談話聴取―幻の『史談会速記録』―」(『書陵部紀要』第七五号、二〇二四年三月)

〔講演〕

水上たかね「戊辰戦争の一史料を読む―東京大学史料編纂所の事業紹介を兼ねて―」(ルーヴェン・カトリック大学、ベルギー、二〇二四年三月四日)

摂関家伝来大規模史料群の目録精緻化による構造の解明と研究資源化

- 一、研究種目 基盤研究(B)
- 二、課題番号 二三H〇〇六六五
- 三、研究期間 二〇二三年度～二〇二七年度
- 四、研究経費 直接経費三〇〇万円、間接経費九〇万円
- 五、研究組織
- 研究代表者 尾上陽介
- 研究分担者 藤井讓治(京都大学)・遠藤珠紀・林晃弘
- 六、研究の概要

(1) 研究の目的

本研究課題は、古代より近代に至るまで政治権力の中核にあった摂関家に伝来した大規模史料群について、原本調査に基づく目録情報の精緻化を進めることにより摂関家文庫の構造を解明するとともに、未知の史料の発掘と高精細デジタル画像の整備・公開による研究資源化を進めることを目的としている。

具体的には、摂関家のなかで唯一、伝来史料群がまとまって現存する近衛家の陽明文庫所蔵史料を主な研究対象とし、これまで紙の目録上で不完全なままとりとなっていた史料、たとえば近世の歴代当主や当主夫人の日記、各種の家司日記などを中心に原本調査を行い、史料の内容や性格などの情報を

精緻化して目録データ上に書き加えることにより、バーチャルな環境で本来の存在形態を復元し、改めて史料群全体の構造を解明する。悉皆的調査を進めるなかで未知の史料の発掘にも努め、重要史料については研究資源化を進めることで新たな知見を生み出す。

(2) 研究の実績

歴代当主らの日記については、まずは陽明文庫においてまとまって保管されている第二八代近衛篤磨の日記原本全三七冊(史料番号霞一―三七)を中心に、各冊の内容や体裁などの書誌情報の調査を進めた。篤磨の日記はすでに活字本(近衛篤磨日記刊行会編『近衛篤磨日記』全六冊、鹿島研究所出版会、一九六八―一九六九年)が刊行され広く利用されているが、調査を進めたところ活字本では原本の一部が省略されていることが判明した。また、原本にはおびただしい数の多様な挟み込まれた関連文書が存在することから、それらをも含めるかたちで高精細デジタル撮影に着手した。二〇二三年度には第一四冊まで、計四四八五コマの撮影を終えた。

次に家司の日記については、これまで存在自体がほとんど知られていなかった、幕末から明治期の近衛家文庫の状況を知ることができる各種蔵書目録類についての調査を進め、それぞれの性格の把握や内容の分析を行い、目録中に見られる『御用部屋日記繰出』『取次所日記』『御用雑記』『御次日記』『御用部屋御留守中日記』『奥日記』『中奥日記』『北奥日記』『桜木殿雑事日記』『桜木御殿御祐筆問日記』『桜木奥日記』などの、多様な表題の冊子からなる家司日記全体の構造の解明を進めている。最も中心的な家司日記で、一七世紀後半から明治期まで約二〇〇年間にわたり書き継がれてきた『雑事日記』については、これまで全く撮影されていなかった文久三年四月記から、存在が確認できる最後の部分である明治五年正月記までの一六冊分、計三七五四コマを撮影した。これによりマイクロカメラによる部分を併せて、原本三二四冊の全体が一通り撮影されたことになる。

画像データについては陽明文庫の許可を得た後に、東京大学史料編纂所歴史情報処理システム(SHIPS)の大型画像サーバにアップロードし、順次、デジタル史料検索・閲覧システム(HiCAT Plus)等により史料編纂所図書室内端末からの公開を進める。また、陽明文庫にもデータを提供するこ

とにより、「陽明文庫デジタルアーカイブ」等からの公開にも備える。

近衛家伝来史料の悉皆的調査の過程で得られた個別重要史料の知見については、随時公開することに努めている。二〇二三年度においては、鎌倉時代後期の近衛兼教の周辺に存在した文書の面影を伝える「御写物」（一般文書目録五一九五六）、本能寺の変の生々しい体験談を載せる「二条亭城介事、かちんの事」（同九六〇一七）、石田三成・増田長盛の所司代就任についての事情をよく伝える「近衛前久書状」（三九一八三・三九一八六）の三点について、一般向けの『陽明文庫講座図録』五号に紹介した。

漢籍書き入れの日本中世史料としての活用をめぐる研究

- 一、研究種目 科学研究費助成事業（基金） 基盤研究(C)
- 二、課題番号 一七K〇三〇六〇
- 三、研究期間 二〇一七年度～二〇二三年度
- 四、研究経費 (前年度より繰越)
- 五、研究組織
- 研究代表者 川本慎自
- 六、研究の概要

本研究は、日本国内に現存する漢籍に記された書き入れについて、とくに中世の漢籍講義や注釈活動に遡るものに着目し、そこに含まれる広範な知識の内容を検討するとともに、そのあり方を史料学的に位置づけることによって、中国文学や日本文学の分野にとどまらず、日本中世史研究の史料として活用する方法を確立しようとするものである。

本年度の研究においては、前年度までに引き続き、基礎的作業として蔵書目録等によって書き入れ等を有する漢籍の所在状況を把握することに努める一方で、前年度に引き続き埼玉県に所在する禅宗寺院について所蔵典籍調査を行い、とくに明版一切経の所蔵状況、近世初期の版本への書き入れや写本作成の状況について検討を行った。また、この他の寺院・所蔵機関における漢籍・禅籍の調査も行い、中世に遡り得る漢籍書き入れの有無を確認した。なお、本研究は本年度が最終年度となるが、研究期間全体を通してさまざま

まな漢籍・禅籍の書き入れ・注釈から見える中世社会の様相について検討を行い、川本慎自『中世禅宗の儒学学習と科学知識』（思文閣出版、二〇二二）をはじめとする研究成果を公表した。また、本研究の調査を進める過程で、秩父金仙寺の所蔵史料のなかに明版一切経を含む多様な典籍が含まれることが明らかとなったため、より調査を深めるためにあらたな科研費の申請を行い、次年度より基盤研究(C)「中近世移行期の版本刊行からみた禅宗寺院の蔵書形成と知識入手の研究」により引き続き調査・研究を行う予定である。

高精細デジタル画像解析による幕末明治初期ガラス原板写真の史料学研究

- 一、研究種目 基盤研究(C)
- 二、課題番号 一九K〇〇九三四
- 三、研究期間 二〇一九年度～二〇二三年度
- 四、研究経費 (二〇二一・二〇二二・二〇二三年度は補助事業期間延長による) 直接経費三六万円（繰越経費）、間接経費〇万円
- 五、研究組織
- 研究代表者 谷昭佳
- 研究分担者 箱石大・保谷徹
- 六、研究の概要

最終年度は、ここ数年のコロナ禍によって影響を受けていた出張資料調査等を全面的に再開することができた。主な研究活動の内容と成果は以下であった。

出張資料調査等…①伊賀市上野図書館（三重県）にて上野城関係古写真調査および高精細撮影をおこなった。これにより劣化したガラス湿板写真ネガ原板から、明治初期の伊賀上野城の姿を高精細画像として再現することが可能となった。この調査成果は新聞・テレビニュース等で広く一般に向けて報道された。②海の見える杜美術館（広島県）にて、同館所蔵中嶋待乳関係古写真コレクションの調査および高精細撮影をおこなった。中嶋待乳のガラス乾板ネガ原板を精緻に観察することにより、明治初期の要人の肖像写真プリントは、ネガ原板の合成と修整による加工から創出されたイメージであるこ

とが鮮明となった。この研究成果は、谷昭佳「中嶋待乳関係古写真調査の概要―海の見える杜美術館所蔵コレクション―」『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』一〇二号（東京大学史料編纂所、二〇二三年一月）に掲載した。③幕末期に幕府の要職を歴任した木村芥舟の写真関係資料について、技法識別および高精細撮影を前年度に引き続き資料所蔵機関と協力して推し進めた。また、総合的な目録作成に向けて情報の整理作業をおこなった。④その他に、鳥取県下所在古写真調査等に取り組んだ。

資料整理保存等…①研究成果公開に向けて、壬申検査関係古写真画像データ整理および目録整備作業をおこなった。②歴史学者・辻善之助と辻達也関係未整理古写真資料の整理保存と目録作成作業等に取り組んだ。

その他…これまでの研究成果を基にして「失われた技法「写真油絵」の復元的研究―紙盤二製スル法の再現―」と題する研究発表を日本写真芸術学会年次大会（東京工芸大学芸術情報館、二〇二三年七月八日）において、研究代表者の谷昭佳がおこなった。

公家法・公家家法・寺社法を中心とした中世法制史料の高度研究資源化

- 一、研究種目 科学研究費助成事業（基金）基盤研究(C)
- 二、課題番号 二〇K〇〇九五六
- 三、研究期間 二〇二〇年度～二〇二三年度（研究期間延長）
- 四、研究経費（前年度より繰越）
- 五、研究組織

研究代表者 前川祐一郎

研究協力者 遠藤基郎・西田友広・本郷恵子

六、研究の概要

本研究は、佐藤進一他編『中世法制史料集』全七巻（岩波書店）のいわば増補版に相当するものを、本所のデータベースシステム上で作成し、日本中世の法制史料を高度研究資源化することを第一の目的としている。同時に、その高度化の試みの過程で、関連づけるべき史料は何かという問いかけを通して、日本中世の法制史料という史料のあり方や性格そのものを捉え直すこ

とを、もう一つの研究目的としている。

研究期間を延長した二〇二三年度は、研究協力者の協力を得て東京大学史料編纂所のデータベースシステムのシステム改修を行い、『中世法制史料集』第六巻のフルテキスト入力データを、古文書フルテキストデータベースの一部として登録し、公開直前の段階にいたった。なお若干の校正などの作業を経て、二〇二四年度中には史料編纂所ホームページより公開の予定である。

本研究のもう一つの目的である、法制史料の高度研究資源化を通して、日本中世における法制史料のあり方の再検討については、本年度も、研究代表者の不測の事態の発生などにより、予定した史料調査を十分に実施できなかったが、史料編纂所と奈良文化財研究所合同の薬師寺の史料調査に参加し、近世・近代にまでわたる同寺史料について大きな知見を得た。

また、研究代表者の既発表の室町幕府法・武家家法（戦国法）に関する論文をまとめ、さらに二本の新稿を加えた論文集『室町戦国法史論』の刊行準備をすすめた。この研究は本研究計画と合わせて関連性が高く、本来は本研究計画の終了後に行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症蔓延により、予定していた公家法・公家家法・寺社法の史料調査が実施できない状況に鑑み、二〇二〇年度より、計画を一部変更し先行して進めたものである。二〇二三年度に刊行予定であったが、不測の事態の発生等により、二〇二四年度に刊行を延期した。

日本中世古記録・文献史料の史料学的研究による朝廷制度史・政治史の考察

- 一、研究種目 基盤研究(C)
- 二、課題番号 二〇K〇〇九三三
- 三、研究期間 二〇二〇年度～二〇二四年度
- 四、研究経費 直接経費五〇万円、間接経費一五万円
- 五、研究組織

研究代表者 遠藤珠紀

六、研究の概要

本研究課題は、鎌倉期から室町期を中心に、古記録の収集及び総体的な検

討を行い、トータルな形で中世朝廷における情報の流れや政務運営システムの検討を試みるものである。その遂行のため本研究課題の研究計画は大きく二つの柱をたてた。まず古記録の所在（原本・写本の所在）を調査し、特に重要なものは史料の性格を明らかにし、翻刻・フルテキストデータベース作成などの歴史情報資源化を行うこと。二つ目として、これらの知見を生かして当該期の政治史・制度史等の考察を行うことである。

本年度は、国立歴史民俗博物館・早稲田大学・京都大学・神宮文庫などに赴き調査を行った。各調査先にはご高配を賜り感謝する。また東京大学史料編纂所所蔵の原本、架蔵の写真帳及びこれまでの調査に基づき史料の検討を進めた。これらにより早稲田大学図書館所蔵『宣教卿記』紙背文書、国立歴史民俗博物館所蔵『綱光公記』、公益財団法人陽明文庫所蔵『後陽成天皇宸翰』『後陽成天皇宸記』、東京大学史料編纂所所蔵『院中御湯殿上日記』等の翻刻、紹介を行った。

また政治史的検討としては、主に南北朝期から室町時代中期の北朝の動向を追った共編著『北朝天皇研究の最前線』（山川出版社）、江戸幕府初代将軍徳川家康の経歴を再検討した「徳川家康の左京大夫任官はいつか」（『古文書研究』九五号）、「徳川家康の誕生年について」（『戦国史研究』八六号）を発表した。

東アジア墓葬文化の伝播と展開―金石文資料の形態的分析を中心に―

- 一、研究種目 科学研究費補助金 基盤研究(C)
- 二、課題番号 二二K〇〇八三七
- 三、研究期間 二〇二二年度～二〇二五年度
- 四、研究経費 直接経費七〇万円、間接経費二二万円
- 五、研究組織
- 研究代表者 稲田奈津子
- 六、研究の概要
本研究は墓誌・買地券といった金石文資料を中心に、その形態的特徴に注目しつつ、墓葬文化の東アジア世界への伝播と受容・変容の過程について考

察するものである。

本年度は、昨年度末に刊行した書籍『黄泉の国との契約書―東アジアの買地券』（勉誠出版、二〇二三年三月刊）の中国語版出版のための作業をおこなった。編者間で中国語翻訳をおこない、協議を重ねて質の高い翻訳文に仕上げるとともに、追加の調査を実施して、その成果も盛り込んだ。完成した書籍『古代東亜世界的買地券』（浙江人民出版社、二〇二四年一月刊）は、中国側の研究費助成も受けて刊行し、中国の代表的な研究機関・大学図書館・研究者等に送付して反響を得ている。

一〇月には、韓国・国立公州博物館における特別展示「一五〇〇年前の百濟武寧王の葬礼」の見学および宋山里古墳群の遺跡踏査等をおこなった。同展は、上記『黄泉の国との契約書』での成果、および研究代表者の論文なども反映した内容となっており、韓国学界における本研究課題の成果に対する受けとめを確認することができた。上記書籍では、韓国国内に分蔵される買地券についても初めて集成・紹介したが、それらが同一会場に集められ展示されたことも画期的であった。

そのほか、日韓の金石文資料を用いた古代社会に関する研究、古代の文字文化に関連して韓国古文書に関する紹介文の作成、正倉院文書の調査・研究にも取り組んだ。あわせて上記書籍の内容をわかりやすく一般向けに紹介する小文も執筆した。

徳川政権による公儀の確立と城郭建設―無年号文書から公儀普請を読み解く―

- 一、研究種目 科学研究費補助金 基盤研究(C)
- 二、課題番号 二二K〇〇八七二
- 三、研究期間 二〇二二年度～二〇二四年度
- 四、研究経費 直接経費八〇万円、間接経費二四万円
- 五、研究組織
- 研究代表者 及川亘
- 研究協力者 宮脇啓（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程・学術専門職員）

六、研究の概要

本研究は、徳川家康・秀忠・家光が諸大名を動員して実施した公儀普請による城郭建設に関連する慶長・元和・寛永期の無年号文書の研究資源化を通じて、個別の城郭建設の具体的な経過における諸大名の対応、大名相互の関係について新知を得るとともに、それぞれの城郭建設を相互に関連するものとして政治・社会史の文脈上に位置づけ、徳川政権が自らの公儀を確立する過程における公儀普請の実態と意義を解明することを目的とする。

本年度は本研究に先行して実施した基盤研究(B)「近世統一政権の成立と天下普請の展開―中近世移行期史料の研究資源化を通じて―」(一七H〇三三・八二、研究代表者・及川亘、二〇一七―二〇二一年度)によって『大日本古文書』・『大日本近世史料』等から抽出した公儀普請関係史料リストのうち、「毛利家文書」・「熊谷家・三浦家・平賀家文書」・「山内首藤家文書」・「浅野家文書」・「島津家文書」の分を対象として、研究協力者の協力を得て無年号文書の年次比定等についてリストの点検を行った。

本研究の課題の核心に関わるものとして、「公儀普請における軍役と夫役」と題して口頭で研究報告を行った(近世史の会、二〇二四年二月、於立教大学)。これは諸大名に軍役として課された公儀普請と夫役として動員された公儀普請について、幕府による両者の使い分けやそれぞれの実態・特質について論じたものである。これまでも公儀普請に両様の方法があったことが指摘されてはいたが、その違いや違いの意味については自覚的に論じられることがなかったものである。

また、本研究による無年号文書の分析の成果の一つとして、佐賀県立図書館・東京大学史料編纂所主催シンポジウム「坊所鍋島家文書を読みなおす―成立期の佐賀藩と江戸幕府―」(二〇二三年十一月、於ホテルニューオータニ佐賀)に参加し、「鍋島勝茂の佐賀藩継承」と題して研究発表を行った。慶長十二年の鍋島勝茂による佐賀藩継承の経過を無年号文書の年次比定の分析を通じて明らかにした。成立期の佐賀藩に関する最も重要な出来事の一つとされてきた龍造寺家佐賀藩から鍋島家佐賀藩への交替の事情について、従来、近世後期に成立した勝茂の年譜である「勝茂公譜考補」(佐賀県近世史料)第一編第二巻)の記述によって理解されてきたことを修正するものであ

る。文章化したものは、シンポジウム報告書『坊所鍋島家文書を読みなおす―成立期の佐賀藩と江戸幕府―』(佐賀県立図書館編、二〇二四年三月)に掲載し、佐賀県立図書館データベース(研究成果<https://www.sagabdb.jp/research/detail?id=74>)に公開されている。

預人の政治史的分析による近世中期幕藩国家政治構造の研究

- 一、研究種目 基盤研究(C)
- 二、課題番号 二二K〇〇八九一
- 三、研究機関 二〇二二年度―二〇二四年度
- 四、研究経費 直接経費四〇万円、間接経費一二万円
- 五、研究組織 研究代表者 荒木裕行
- 六、研究の概要

近世政治史研究においては、近世日本は強大な権力を持つ幕府を中心とした中央集権的性格が強かったのか、もしくは自立的な政治権力である藩の連合体としての性格が強かったのかという問題が重要なテーマとして分析されてきた。この問題は換言すると、幕府と藩とがどのような関係にあったのかということになる。本研究はこの問題について、幕藩国家の政治構造が確立した一七世紀末から一八世紀初頭の時期を対象として分析することを目指している。右の目的を達成するため、弘前藩の「預人」をめぐる、幕府と藩、藩と藩の間で行われた政治交渉を取り扱う。預人は幕府から処罰され、藩に預けられていた人物であり、それに関わる幕府と藩との交渉、赦免後の預人が弘前藩において果たした政治的役割を解明する。それによって近世中期の幕藩関係の構造を明らかにする。

二〇二三年度は、弘前藩の預人となっていた柳川調興について検討するため、前年度に引き続き、対馬藩の藩日記「江戸藩邸毎日記」東京大学史料編纂所蔵「宗家史料」を分析した。また弘前市立図書館にて弘前藩の藩政記録「弘前藩庁日記」の調査・撮影を行い、内容の分析を行った。

近世初期大名宛給無年号文書群の研究資源化―佐賀藩家臣坊所鍋島家史料を対象として―

- 一、研究種目 基盤研究(C) 基金
- 二、課題番号 二三K〇〇八〇九
- 三、研究期間 二〇二三年度～二〇二五年度
- 四、研究経費 直接経費一〇万円、間接経費三三万円
- 五、研究組織

研究代表者 小宮木代良

研究分担者 及川亘 石津裕之 伊藤昭弘(佐賀大学)

研究協力者 本多美穂(佐賀県立図書館)、清水雅代(佐賀県立図書館)、

松田和子(佐賀県立図書館)、田畑春香(佐賀県立図書館)、阿部大地(佐賀県立図書館)、佐藤孝之(東京大学名誉教授)、大平直子(佐賀市文化財課)、田久保佳寛(小城市教育委員会)、野下俊樹(佐賀県立佐賀城本丸歴史館)、宮脇啓(東京大学大学院人文社会系研究科)

六、研究の概要

本研究プロジェクトでは、佐賀藩家臣坊所鍋島家史料(佐賀県立図書館所蔵)のうちの近世初期の部分を対象とし、多久家史料と密接な関係を持つ当該史料群一点毎の「読み直し」を行う。

対面形式の研究会としては、まず、六月一七日～一九日に、史料編纂所において、共同分析のための今年度の第一回研究会を開催した(参加一四名)。つぎに、一月一〇日～一三日には、佐賀県立図書館において、第二回研究会を開催した(参加一四名)。史料編纂所で研究会を行う際には、同所所蔵の関連史料を多く利用し、対して、佐賀県立図書館において行う際には、同館所蔵の坊所鍋島家文書原本の参照を行った。これらの共同作業による作業の途中経過は、共同研究システムを利用して、参加者が常に相互に確認できるようにしている。また、Zotero利用による研究会としては、六月二六日と一月二七日に、それぞれ直近の対面式研究会の際に残された部分について補うための研究会を行った(いずれも一四人参加)。当初の目的としている坊所鍋島家文書中の鍋島直茂文書・同勝茂文書、総計約五〇〇点のうち、初

年度の本年度までに、二三〇点分の検討を終えた。

第二回研究会開催中の一月一日午後には、シンポジウム「坊所鍋島家文書を読みなおす―成立期の佐賀藩と江戸幕府―」を佐賀市において開催し、八七名の参加者があった。このシンポジウムでは、基調報告として、小宮木代良「坊所鍋島家文書研究の意義」、報告①として、及川亘「鍋島勝茂の佐賀藩継承」、報告②として田久保佳寛「初代小城藩主鍋島元茂の江戸詰め」、報告③として、伊藤昭弘「鍋島勝茂の鷹狩」を実施した。シンポジウムの成果は、質疑応答部分等も含めて、電子版の報告書(二〇二四年三月発行、七一頁)にまとめて公開した。

これらの研究会は、東京大学史料編纂所共同利用・共同研究拠点における特定研究経費のプロジェクト(近世大名家臣家史料の「読み直し」と研究資源化)と連携しながら実施した。当初の予定では、坊所鍋島家文書のうち、未整理分を中心とした原本史料調査を行う計画を立てていたが、参加者の予定がかわず、年度内には実行できなかったため、二〇二四年度に実行することとした(二〇二四年度の四月一三日に一四名の参加で実施)。このほか、共同研究のみでは支出分が確保しにくい関連の史料のコピーや文献の購入を行った。

平安時代後期政治構造の史料学的研究

- 一、研究種目 若手研究
- 二、課題番号 一九K一三三三〇
- 三、研究期間 二〇一九年度～二〇二四年度(期間延長)
- 四、研究経費 (前年度より繰越)
- 五、研究組織
- 研究代表者 黒須友里江
- 六、研究の概要

摂関政治と院政についてはその連続性がたびたび指摘されるが、両分野の研究状況の違いにより、院政期研究の立場から論じられることが多かった。しかし、近年の研究の進展により摂関期の政治構造の詳細が明らかになって

いることを踏まえると、摂関政治から院政への移行について摂関期の側から改めて検討することが必要である。そこで障壁となるのが、藤原頼通・教通・師実の時期の史料が前後の時期に比べて少なく、テキスト研究が充実していないという環境である。よって本研究では、当該期の古記録（具体的には『左経記』『春記』『水左記』）の写本調査により研究基盤を固めるとともに、それに基づき摂関政治から院政への政治構造の連続・変容の様相を検討する。今年度は、『春記』を用いた政治構造の研究、『水左記』の校訂および内容の解釈を行った。

『春記』については、これを用いて後朱雀天皇と関白藤原頼通の政務への関わり方を分析した。近年、中世に向けた政務の変化の始まりを道長政權期に求める研究が目立つ。しかし、道長政權と頼通政權を比較した結果、中世の様相は後者において格段に強まっていることが分かり、道長政權の延長ではない、頼通政權の新規性が確認できた。以上の内容は、日本史研究会例会（二〇二四年三月）において「藤原頼通の政治手法」と題して報告した。

『水左記』については、二〇二二年度に引き続き研究会に参加し、その成果を磐下徹・堀井佳代子・宮川麻紀各氏との共著『「水左記」註釈（治暦元年八月～二年正月）』（『人文研究 大阪公立大学大学院文学研究科紀要』七五、二〇二四年三月）にまとめた。

日本中近世外交文書写本および外交文書集の史料学的研究

- 一、研究種目 若手研究
- 二、課題番号 二〇K一三二二
- 三、研究期間 二〇二〇年度～二〇二四年度
- 四、研究経費 直接経費八〇万円、間接経費二四万円
- 五、研究組織
- 研究代表者 岡本真
- 六、研究の概要

本研究は、中近世に日本が諸外国とのあいだでやりとりした外交文書のうち、原本が今日所在不明で、写本の形でしか伝わっていないものや、複数の

文書写本を収録した外交文書集を対象に、史料学的研究を実施するものである。具体的には、写本をできる限り幅広く調査・収集したうえで、同一の外交文書や外交文書集の諸写本同士を比較対校することにより、それらの史料の原態を可能な限り復原することをこころみる。そして、それによって、当該期の日本の対外関係史をあらたな視点から研究することを企図している。

四年目にあたる令和五年度には、主としてふたつのテーマについて、研究を推進した。ひとつめは、永樂五年（一四〇七）五月二六日付足利義満宛明永樂帝勅諭の写本・版本の調査と検討である。同勅諭の原本は所在不明で、写本や模刻版本が複数伝来している。今年度には、前年度までに実施した調査によって得られた情報を土台としつつ、ひきつづき他の研究課題と連携して追加の調査を実施し、それらによって得た知見を集約・整理し、成果を論文として公表した。これにより、室町幕府滅亡後の原本の伝来経緯や、現存する版本には二系統があること、版行の時期は一八世紀末以前であること、版本では失われている原本由来の情報を有する写本があることなどを指摘した。また、中世後期に外交の現場でやりとりされた文書である同勅諭について、写本や版本が作成され、知識人層に広まり、そして今日まで伝来するに至った過程を解明することができた。

もうひとつは、瑞溪周鳳撰『善隣国宝記』の諸写本の校異情報の電子テキスト化である。これに関しては、二〇二二年度に定めた方針にしたがい、TEI (Text Encoding Initiative) のガイドラインに則した、テキスト構造化の国際標準に準拠したXMLデータとして電子テキストを整える作業を、今年度も継続した。調査によって所在を明らかにし得た写本一六点のうち、これまでに複製を入手した一四点の校異情報を、序文および上巻の途中まで整備してきた。ただし、当初の予定では、今年度後半に新たに人材を雇用して作業の進行を加速させるつもりだったが、適任者が見つからなかったため、遅れが生じた。そのため、期間延長を申請して承認をうけ、二〇二四年度中に上巻までの作業を完了する計画に修正した。

そのほか、本研究で得られた外交文書に関する知見を活用した学会報告を一件実施した。

日本近世における政教関係の形成と確立

- 一、研究種目 若手研究
- 二、課題番号 二一K一三〇九〇
- 三、研究期間 二〇二一年度～二〇二四年度
- 四、研究経費 直接経費六〇万円、間接経費一八万円
- 五、研究組織
- 研究代表者 林晃弘
- 六、研究の概要

近世の政治権力と仏教教団は、中世以前とは異なる新たな関係を形成する。本研究の目的はその過程を政治史的な背景を踏まえて明らかにすることである。二〇二三年度の実績について、(一)幕府と仏教教団の間における組織的関係の形成、(二)藩の寺院行政を組み込んだ分析の二つの面から概要を示すと以下のとおりである。

(一)については、研究成果の取りまとめを進めた。まず、「近世的な政教関係の形成」(上野大輔・小林准士編『日本近世史を見通す6宗教・思想・文化』吉川弘文館)において、豊臣秀吉政権期から徳川家綱政権期までの約八〇年の期間を対象に、政治権力の仏法興隆を意図する政策の動向と、仏教教団との組織的関係の形成の過程を概括的に論じた。ここでは本課題の経費を用いて史料調査を行った薬師寺や泉涌寺の事例を用いた。

また、幕府と寺社の関係の基礎となる朱印寺社領をめぐる論点について、西尾市岩瀬文庫にて曹洞宗可睡斎配下寺院に宛てた徳川將軍の判物・朱黒印状の写を調査し、一部を史料紹介としてまとめた。さらに、滋賀県大津市の天台宗寺院である聖衆来迎寺の史料を用い、同寺が兼帯した律宗の阿弥陀寺の近世中後期の例外的な朱印改めのある方方を明らかにし、近世の宗派をまたぐ兼帯の実態と、それに対する幕府・個別領主の認識を検討した。

(二)については、前年度より取り組んできた熊本藩の真宗政策に関する研究を論文「近世前期における熊本藩の真宗統制」(『古文書研究』九六号)として公表した。加藤氏の治世に、同藩領内の真宗東派に対して西派への転派を命じたことを初めて史料から明らかにし、その上で本山における国取次

の存在、藩領内の触頭の寺院の設定とその統制のあり方を示した。熊本藩の宗教政策に関しては、シンポジウム「近世初期における『御国』と『公儀』」での報告のなかで、寛永十五年九月十三日付のキリシタン制札をめぐる動向に言及し、幕府の禁制政策と藩の支配の関係に迫った。その他、北陸中世近世移行期研究会編『地域統合の多様と複合』の書評において、比較対象である越前・加賀・能登・越中における寺社政策を扱う研究に論評を加えた。

持続性と利活用性を考慮したデジタルアーカイブシステム構築手法の開発

- 一、研究種目 科学研究費補助金 若手研究
- 二、課題番号 二一K一八〇一四
- 三、研究期間 二〇二一～二〇二三年度
- 四、研究経費 直接経費一一〇万円、間接経費三三万円
- 五、研究組織
- 研究代表者 中村寛
- 六、研究の概要

今年度は、デジタルアーカイブの構築手法として静的サイトの概念を適用する研究を進め、その成果を検証した。静的サイトの特徴である、HTMLファイルや画像などの静的コンテンツを基盤とするアプローチが、システム運用コストの削減やサーバ環境の選択肢の拡大に寄与することを確認した。具体的な適用事例として、以下のプロジェクトに取り組んだ。

東京大学史料編纂所「都城島津邸所蔵『琉球并諸島図』デジタルアーカイブ」「日本史用語訳訳グロスサリ・データベース」/東京大学大学院情報学環附属社会情報研究資料センター「Digital Cultural Heritage」/「S×UKILAM LOD Easyアプリ」・多様な資料を活用した教材アーカイブのデータをLinked Data化し、関連情報の収集・検索を簡便化するためのアプリケーション/TEI Genetic Editions Viewer・ジャンニジャック・ルソーのジュネーブ手稿を対象としたデジタル批判版の試作

これらのプロジェクトへの適用を通じ、IIIFやRDF、TEIを用いた可視化機能の構築を含め、静的サイト構築手法の改良を進めた。特にII

IFの活用においては、IIIFとジョリアレンスの親和性を高めるIIIF Georeference APIを用いた可視化ツールをオープンソースソフトウェアとして公開した。これらの研究成果は学会発表や論文として発信し、研究目的である高い持続性と利活用性を実現するデジタルアーカイブ構築手法の確立に貢献した。

今川了俊関係史料の分析による室町幕府地方支配の研究

- 一、研究種目 科学研究費補助金 若手研究
- 二、課題番号 二三K一二二七三
- 三、研究期間 二〇二三年度～二〇二六年度
- 四、研究経費 直接経費八〇万円、間接経費二四万円
- 五、研究組織 堀川康史
- 六、研究の概要

本研究計画は九州探題今川了俊関係史料の分析を通じて、室町幕府地方支配の現場について明らかにしようとするものである。一年目にあたる二〇二三年度は、今川了俊関係史料の収集と花押の編年研究を進めるとともに、関係史料の原本調査・撮影を実施した。また、一族・家臣に関する再検討を行い、その一部は、内々の研究会ではあるが「入来院家文書」の研究会にて報告した。

具体的な研究成果として、二〇二三年五月の歴史学研究会大会・中世史部会において「室町幕府支配体制の形成と展開」と題する報告を行い、今川了俊の探題解任とその後の九州情勢を、室町幕府支配体制に及ぼした影響に注目しながら論じたほか『歴史学研究』一〇四一号掲載、「駿遠地域と今川氏」と題する論考を寄稿した谷口雄太編『東海の中世史 二 足利一門と動乱の東海』（吉川弘文館）が間もなく刊行予定である。

二〇二三年度は南北朝内乱に関する博物館展示が二件開催され、堀川もこれに協力した。まず、都城島津伝承館（宮崎県都城市）で開催された『北郷氏誕生 南北朝・室町時代の都城』（七月二十九日～一〇月一日）では、「南九州の南北朝内乱と都城」と題する講演を行った。次に、鹿児島県歴史・美術

センター黎明館（鹿児島県鹿児島市）で開催された特別展『南北朝の動乱と南九州の武士たち』（九月二十九日～十一月五日）では「九州探題今川了俊と南九州情勢」と題する論考を寄稿したほか、「南九州の南北朝内乱と九州探題今川了俊」と題する講演を行った。

このほか、関連する研究成果として、『アジア遊学二八九 海外の日本中世史研究「日本史」・自国史・外国史の交差』（勉誠社）を編集（共編）・出版し、英語圏における南北朝時代（十四世紀史）研究の動向・特徴を紹介する論考等を執筆した。

サファヴィー朝との合意文書によるオランダ東インド会社外交文書編纂の研究

- 一、研究種目 科学研究費助成事業 研究活動スタート支援
- 二、課題番号 二〇K二二〇一二
- 三、研究期間 二〇二〇年度～二〇二三年度
- 四、研究経費 直接経費九〇万円、間接経費二七万円
- 五、研究組織 研究代表者 大東敬典
- 六、研究の概要

本研究は、オランダ東インド会社とサファヴィー朝との間で作成された合意文書の総合的調査を行い、①同文書群の形式・内容・相互関係を明らかにすること、②それを手掛かりに、会社がアジア各地から収集し作成した合意文書集Contractboeken（「契約集」）の性格について史科学的分析を行うこと、③さらに、二〇世紀前半に同史料を基に編纂された、オランダ東インド会社外交に関する基幹史料集Corpus diplomaticum Neerlandico-Indicum（「蘭領東インド外交文書集」）について、史学史的分析を加えることを目的とする。

二〇二三年度は、長く実現できずにいたインドネシア国立文書館での史料調査を実施することができた。調査の結果、会社のバタヴィア総督府が作成した「契約集」の一部が現存することが明らかになった。

『蘭領東インド外交文書集』の主要典拠である、アムステルダム支部伝来「契約集」を利用し、会社がアジア各地の政治的支配者と締結した「契約」の地

域間比較を行った。その際、ペルシア語で勅令を意味する「ファルマーン」に対する会社の認識を分析した。

本研究は、史料編纂所共同利用共同研究拠点特定共同研究「モンスーン文書・イエズス会日本書翰・VOC文書・EIC文書の分野横断的研究」(二〇一九～二〇二一年度)、「本所所蔵在外日本関係史料の多角的利用のための翻訳研究」(二〇二二～二〇二五年度)と共同して、『蘭領東インド外交文書集』所収文書の和訳を進めてきた。二〇二三年度は、会社が現地政権に対して優勢な立場を有した地域からバンダ、アンボイナ、ビリハム(スリランカ)を、強力な王権が存在した地域からシヤム(タイ)、アラカン(ミャンマー)、ペルシアを選び、文書の形式・内容の比較を行った。

その内バンダ、アンボイナ、ビリハム、ペルシアの文書の翻訳を、解題と必要な注を付して刊行した(『蘭領東インド外交文書集』(三)―契約の分類―久礼克季・富田暁・松方冬子と共編訳、解題を担当『東京大学史料編纂所研究紀要』三四、二〇二四年三月)。

大日本史料総合データベース(平安時代・全文)

- 一、研究種目 研究成果公開促進費(データベース)
- 二、課題番号 二三HP八〇〇五
- 三、事業期間 二〇二三年度
- 四、事業経費 三二〇万円
- 五、研究組織

作成者 平安時代編年史料データベース作成グループ

作成代表者 山口英男

六、本年度の事業の概要

大日本史料総合データベースは、『大日本史料』の網文・引用書目・索引語句(人名・官職名)・史料本文を対象とするデータベースである。整備されたデータはSHIPPSから公開されている。ただし、史料本文データの公開は、刊行時にテキストデータの入手が可能となった近年出版分にとどまっております、それ以前に刊行された約三七〇冊のデータは整備されていない。本

事業では、平安時代の仁和三年(八八七)から長元五年(一〇三二)まで、現時点で一四六分が連続して刊行されている『大日本史料』第一・二編のうち、データ未整備であった合計五五冊(第一編第一～二四冊・別冊(補遺一～四)、第二編第一～二七冊)、約三万二〇〇〇頁について、数年かけて史料本文のテキストデータを生成・登録し、公開しようとするものである。

事業は二〇一九年度から着手し、二〇一九・二〇二一年度に科学研究費補助金・研究成果公開促進費(データベース)の助成を得た。これまでに、二〇二〇年度に第一編第一～三冊、二〇二一年度に第四～七冊、二〇二二年度に第八～一〇冊の史料本文データの公開を開始した。二〇二三年度は、第一編第一～一五冊の史料本文データを生成・登録し、公開した。これにより、累計で『大日本史料』第一編第一～一五冊、合計約一万二三〇〇頁、約三万二三〇〇件の史料本文データが、SHIPPSを構成する『大日本史料総合データベース』及び「編年史料(古代) 編纂支援資源化データベースMIDOH」から利用可能となった。

古記録フルテキストデータベース

- 一、研究種目 研究成果公開促進費(データベース)
- 二、課題番号 二三HP八〇〇六
- 三、研究期間 二〇二三年度
- 四、研究経費 一四〇万円
- 五、研究組織

作成者 古記録フルテキストデータベース作成グループ

研究代表者 遠藤珠紀

作成分担者 尾上陽介・菊地大樹・井上聡

六、研究の概要

古記録フルテキストデータベースは、「古記録」の全文データベース化を目的とし、『大日本古記録』所収の日記を中心に入力を行っている。今年度は『大日本古記録 言経卿記』七・八、「賀茂伝奏経元記」『東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二〇―三 賀茂別雷神社の所領と氏人』のデータ作成・

公開を行った。

受託研究

AI等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業ユースケース創出課題「異分野共創による史料学DXの確立」

一、研究種目 受託研究（令和五年度AI等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業ユースケース創出事業）

二、研究期間 二〇二三年度

三、研究経費 四八二万円

四、研究組織

研究代表者

尾上陽介

研究分担者

金子拓・山田太造・渋谷綾子・高島晶彦・山口悟史・平澤

加奈子（以上史料編纂所）・丹羽尉博（大学共同利用機関

法人高エネルギー加速器研究機構）・天野真志（国立歴史

民俗博物館）・野村朋弘（京都芸術大学）・梶青華（一般財

団法人石川県文化財保存修復協会）・高橋修（茨城大学）

五、研究の概要

本研究「異分野共創による史料学DXの確立」は、全国的な研究データ基盤（NIDC）やデータ処理・公開基盤を活用し、異分野共創による史料学DXの確立を目指すものである。二〇二三年度は下記の五項目を実施した。

①史料調査と料紙分析

二〇二三年度は下記の史料を対象として、デジタルマイクロスコープ等を用いた非破壊の調査・分析を実施した。特に、各史料の現況にあわせた計測を行い、修理・長期保存の技術改良や提供につながる科学情報の収集・分析を進めた。

・米沢市上杉博物館所蔵「国宝 上杉家文書」（八月、二月）

・東北大学文学部所蔵「白河文書」（八月）

・松尾大社所蔵史料（八月、九月、十二月）

・和歌山県立博物館所蔵「小川八幡神社大般若経」（二〇月、二月）

・滋賀大学経済学部附属史料館所蔵「菅浦文書」（十二月）

・厳島神社所蔵史料（十二月）

・東京大学史料編纂所所蔵「国宝 島津家文書」（三月）

②史料の修復・保存・活用

二〇二三年度は、既存の研究成果と①の結果をふまえて、文化財の修理・保存につながる歴史情報の資源化を進めるとともに、自然災害で被災した史料の修理・保存の研究を進める研究者たちと保存科学の方法の検討を行った。さらに修復史料の活用として、二〇二三年度・第二期東京大学ニューヨーク・オフィス（UTKONY）イベント「日本の歴史を伝え、つなぐー東京大学史料編纂所のこれまでとこれから」（於：東京大学ニューヨーク・オフィス、二月一五日・一六日）において、「落合左平次道次背旗」の修理や「長篠合戦図屏風下絵」の彩色復元模写など、文化財の修復・復元に関する研究成果の報告を、「落合左平次道次背旗」の複製史料の展示とともに実施した。対面・オンラインのハイブリッド形式で行い、参加者は現地一名・オンライン一三七名であった。このイベント期間中に、アメリカ・メトロポリタン美術館の修復スタッフと紙媒体歴史資料の修理・保存方法等について議論を行い、次年度以降に双方の研究成果を公開する国際的なワークショップやシンポジウム等を行うこととなった。

③機関連携による技術開発・応用

東京大学史料編纂所・高エネルギー加速器研究機構による加速器科学国際育成事業（INFASIX）と連携し、史料の非破壊調査に向けた計測環境の整備・効率化を進めている。二〇二三年度は、料紙サンプルを対象として三次元X線顕微鏡（X線CT）やフーリエ変換赤外分光分析（FTIR）等による成分分析（非破壊）を行った。X線CTによる分析では、料紙費等の研究協力者が実験製作した糊付け和紙四点、課題メンバーが実験製作した糊付け和紙三点、ならびに水害等によって固着・劣化・分解の状態となった史料の剥片六点について、文字や内部構造の識別、繊維の形態についての測定を進めた。FTIR分析では、関義城「古今紙漉紙屋図絵」の見本紙より五〇点、現代の青雁皮紙一点の合計五一点に対して実施した。これまで獲得してきた成果とともに、二〇二三年度の分析結果、ならびにFTIR分析の

結果を応用した統計解析の成果については、第三三回日本資料専門家欧州協会年次大会（二〇二三年九月、於：ベルギー）、日本文化財科学会第四〇回記念大会（二〇二三年一〇月、於：奈良）、16th Asian Conference on Analytical Sciences 2023（二〇二三年一〇月、於：マレーシア）、第三九回近赤外フォーラム（二〇二四年二月、於：東京）などの国内外の学会・会議等で報告を行った。

また、本事業のシンポジウム（二〇二三年九月二八日・二九日、於：一橋大学）に参加、本課題の紹介を行うとともに、他のユースケース課題関係者と分析技術の開発に関する議論を行った。

④ 地域連携と新たな人材活用

科研費等の共同研究と連携し、京都文化博物館令和六年度特別展「松尾大社展 みやこの西の守護神」（二〇二四年四月二七日～六月二三日）にて既存の研究とともに①の松尾大社所蔵史料の調査成果を公開すべく準備を進めた。松尾大社所蔵史料については、博士課程後期の大学院生に目録データの整備・拡充を進めてもらいつつ、①に記した史料調査の一部に参加してもらい、科学的な調査・分析技術の習得に努めさせた。また、琉球大学、那覇市歴史博物館、東北大学、石巻市博物館、奥州市教育委員会、茨城大学などの研究者・スタッフたちと、二〇二四年度以降に古文書等の料紙に対する科学研究をそれぞれ行うことが決まり、地域連携や次世代の人材育成をさらに進めるための検討を行った。

⑤ 史料研究データ基盤構築

①の史料調査や科学分析、②の史料修復・保存を進める中で獲得された研究データについて、GakuNin RDMで管理できるように、データ・メタデータへ変換する準備を進めた。さらに、認証・権利等により、外部に出さないクローズドなデータに対するセキュリティ対策についても検討を行った。

高知県域に関する古代・中世史料の調査・収集と分析研究

- 一、研究種目 受託研究（高知県）
- 二、研究期間 二〇二三年四月～二〇二四年三月

- 三、研究経費 六四八・一七二円（研究支援経費一九四四・五一円）
- 四、研究組織

研究代表者 井上聡

研究分担者 岡本真

五、研究概要

高知県においては令和三年度より『高知県史』の編纂を開始し、令和五年度から古代中世史部会を発足させている。当該部会の発足に伴い、高知県関連の古代・中世史料情報の収集を図ることを目的として標記事業を開始した。研究組織に参加する二名は、同県史編纂委員を兼ねている。具体的業務としては、史料編纂所がこれまで蓄積してきた史料調査情報から、県史編纂に関わるものを抽出し、体系的に情報化を図ることを目指した。令和五年度は、学術専門職員一名を雇用し、旧県史収載史料や『土佐国編年史料控』収載史料などを対象に、情報化や複製史料との対照を進めたところである。

福岡市域に関わる史料の調査及び研究

- 一、研究種目 受託研究（福岡市史編集委員会）
 - 二、研究期間 二〇二三年度
 - 三、研究経費 七十七万円
 - 四、研究組織
- 研究代表者 山口英男
研究分担者 岡本真

五、研究概要

本研究は、二〇〇六年度から引き続いて福岡市史編集委員会から受託し、福岡市史編纂のため基礎研究となる「福岡市域に関わる資料の調査及び研究」を行うものである。福岡市史専門委員を委嘱されている山口・岡本を中心に、本研究費で雇用する支援スタッフ等を加えて研究組織を構成し、史料編纂所に架蔵されている写真帳・影写本・謄写本等から関連史料を調査・研究する計画である。本年度も引き続いて古代の未公刊史料類、中世の福岡市外所在史料の調査を実施した。主な内容は次の通りである。

〔古代〕引き続き福岡市域に関わる史料を蒐集し、内容整理及び年次判定等のための解析を行ない、既蒐集史料と合わせてその成果のデータ化作業を実施した（対象史料 宮内庁書陵部等所蔵の学芸・文学関係史料）。
〔中世〕福岡市域に関わる中世史料のうち、『福岡市史』資料編中世三に収録される予定の古記録・古文書について、底本との校合を実施した。

史料を科学する

一、研究種目 受託研究（令和五年度加速器科学国際育成事業IINA

S-NX）

二、研究期間 二〇二三年度

三、研究経費 一二六万円（本所負担分六〇万円を含む）

四、研究組織

研究代表者 高島晶彦

研究分担者 尾上陽介・渋谷綾子・山口悟史・平澤加奈子（以上史料編

纂所）・丹羽尉博（大学共同利用機関法人高エネルギー加速器研究機構）

五、研究の概要

本事業は、物理化学的手法による古文書料紙の成分分析、新たな非破壊による計測技術開発と実用化の推進、古文書料紙の総合的科学研究の進展、および保存・修復等に携わる人材育成や各種歴史資料を通じた地域社会との連携・協働の新展開をはかることを目的としている。二〇二三年度は、料紙サンプルを対象に非破壊での三次元X線顕微鏡（X線CT、担当：丹羽）やフーリエ変換赤外分光分析（FTIR、担当：高島・渋谷・山口・平澤）等による成分分析を行った。X線CTによる分析では、科研費等の研究協力者が実験製作した糊付け和紙四点、本事業参加メンバーが実験製作した正麩糊を塗布した和紙三点、ならびに水害等によって固着・劣化・分解の状態となった史料の剥片六点について、文字や内部構造の識別、繊維の形態についての測定を進めた。FTIR分析では、関義城『古今紙漉紙屋図絵』の見本紙より六〇点、現代の青雁皮紙一点の合計六一点を対象とした。さらに、米沢

市上杉博物館所蔵「国宝 上杉家文書」や松尾大社所蔵史料等を対象に、デジタルマイクロスコップ等を用いた非破壊の調査・分析を実施した。特に、各史料の現況にあわせた計測を行い、修理・長期保存の技術改良や提供につながる科学情報の収集・分析を進めた。なお、FTIRの結果から、環境安全管理室石田正紀氏・武智英明氏らにより主成分分析などの統計解析を実施した結果、紙質の特徴を明瞭に識別できることが判明した。

X線CTおよびFTIRで得た分析結果については、令和四年度加速器科学総合育成事業や他の共同研究での成果とあわせ、第三回日本資料専門家欧州協会年次大会（二〇二三年九月、於：ベルギー）、日本文化財科学会第四〇回記念大会（二〇二三年一〇月、於：奈良）、16th Asian Conference on Analytical Sciences 2023（二〇二三年一〇月、於：ブレンダン）、第三九回近赤外フォーラム（二〇二四年二月、於：東京）などの国内外の学会・会議等で報告を行った。

地域連携と人材育成については、科研費等の共同研究と連携し、京都文化博物館令和六年度特別展「松尾大社展 みやこの西の守護神」（二〇二四年四月二七日～六月二三日）での松尾大社所蔵史料の調査成果の公開準備を進めた。松尾大社所蔵史料については、博士課程後期の大学院生に目録データの整備・拡充を進めてもらいつつ、史料調査に参加し、科学的な調査・分析技術の習得に努めさせた。また、琉球大学、那覇市歴史博物館、東北大学、石巻市博物館、奥州市教育委員会、茨城大学などの研究者・スタッフと、各々二〇二四年度以降に古文書等の料紙に関する科学研究を行うこととなり、地域連携や次世代の人材育成を推進するための検討を行った。

本事業における物理化学を用いた料紙の構成物・成分の解析結果、ならびに他の関連プロジェクトで行われた料紙分析の結果を比較したことにより、料紙の製法や地域・時期的特性につながる情報抽出を進めることができた。現在これらの研究データの利用・公開に向けた議論を進めており、学術誌への論文投稿等の成果発信も予定している。

AI等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業ユースケース創出課題「Archivematicaを用いた人文学データのキュレーションプロセスの自動化に関する試み」

- 一、研究種目 受託研究（令和五年度AI等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業ユースケース創出事業）
- 二、研究期間 二〇二三年度
- 三、研究経費 三四〇万円
- 四、研究組織
- 研究代表者 中村覚
- 研究分担者 山田太造（史料編纂所）・金甫榮（渋沢栄一記念財団）・南山泰之（国立情報学研究所）

五、研究の概要

人文学における研究データの長期的な利活用支援を目的として、Archivematicaを用いたデータキュレーションプロセスの自動化に取り組んだ。まず、人文学系機関（東京大学史料編纂所）や民間企業などが保有する研究データを題材にArchivematicaの機能を検証し、データキュレーションプロセスの自動化に対する寄与の程度、適用における課題、及びシステムのカスタマイズや拡張可能性を明らかにした。具体的には、Archivematicaのファイル名変換マイクロサービスに関する技術調査の業務委託を行い、（漢字や平仮名などが日本語として認識されない）問題の所在および解決方法を明らかにした。調査結果は、今後日本語資料のキュレーションプロセスの改善に活用する。またArchivematicaの英語マニュアルの日本語訳の作成も実施した。成果物は、令和6年度の事業として公開を予定している。

さらに、国際会議への参加や開発元へのヒアリングを通じてArchivematica-Dspace連携などの導入例を調査し、NII-RDCのうち、特にWEKO3とArchivematicaを連携させるためのプロトタイプ開発を行った。具体的には、Archivematicaを用いたデータキュレーションプロセス自動化のためのプロトタイプシステム（<https://amgawslas.jp/>）を開発し、国内学会「1」および国際会議「2」での発表を行った。国際会議ではArchivematicaの開発元であるArtefactualの社員と今後の連携について議論

した。

- 「1」 中村覚・金甫榮・南山泰之「Archivematicaを活用したデジタルデータの長期保存を支援する簡易操作アプリケーションの開発」『デジタルアーカイブ学会誌』7(S2), sl07-sl10, 2023年10月
- 「2」 Satoru Nakamura, Kim Boyoung, Yasuyuki Minamiyama, “Development of a User-friendly Application to Support Long-term Digital Preservation Using Archivematica”, 18th International Digital Curation Conference, 2024年2月20日

人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業中核機関委託業務

- 一、経費種目 日本学術振興会（JSPS）の「人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業 中核機関・東京大学における委託業務」
- 二、業務期間 二〇二三年一〇月～二〇二八年三月
- 三、業務経費 直接経費九七五万円、間接経費二九二万五千元
- 四、業務実施組織 東京大学（史料編纂所・社会科学研究所）
- 業務主任者 本郷恵子（史料編纂所長）
- 五、実施担当者（二〇二三年度）

本郷恵子・末柄豊・山田太造・中村覚・渋谷綾子・平澤加奈子・犬飼はなみ・大南英樹・清田盟（以上、史料編纂所）、大向一輝（大学院人文社会科学系研究科）、玄田有史・三輪哲・藤原翔・石田賢示・王帥・池田めぐみ・横内陳正・胡中孟徳・和田敏雄・谷口沙恵（以上、社会科学研究所）

六、業務概要

「人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業」は、二〇一九年一〇月に本所が受託を開始し、二〇二二年度末で終了した日本学術振興会（JSPS）の「人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業」の成果等を踏まえ、人文学・社会科学のデータ共有、利活用を促進するデータプラットフォーム等の基盤のさらなる充実・強化を図り、研究者

がともにデータを共有しあい、国内外の共同研究等を促進することを目指すものである。構築推進事業において、本所は人文科学唯一の拠点機関として参加し、社会科学の四機関とともに事業の推進に尽力した。後継となる強化事業では制度設計が変更され、人文科学・社会科学両分野について事業全体を統括可能な中核機関を置くこととなった。そこで史料編纂所・社会科学研究所が連携して、中核機関・東京大学として応募して採択され、一〇月から事業を開始することとなった。システム担当機関は国立情報学研究所（NII）、拠点機関は神戸大学附属図書館、奈良文化財研究所である。

中核機関・東京大学は、人文科学・社会科学データを取り扱う拠点機関及び関係諸機関を主導して、日本全体のデータインフラストラクチャーを整備し、日本史料を中心とする人文科学データを扱う史料編纂所と社会調査等の社会科学データを扱う社会科学研究所が綿密に連携し、両分野を総合したデータインフラを構築することを目標とする。そのため、自機関で作成及び他機関から受託した新規データの人文科学・社会科学総合データカタログ（JDCat）への追加、DOI付与や適切な利用条件設定による管理環境の整備、データ分析手法とその環境の提供、他機関データとの連携のためのAPI及びメタデータの整備等を推進し、分野を超えた相乗効果を発揮する役割を担う。それによって、質的データと量的データの活用に関する知見共有、AI活用への共同対応、手引書作成のノウハウ伝授等、相乗効果を広範囲に拡大し、拠点機関等との好循環を生み出すよう努める（中核機関実施計画書）。また、史料編纂所が主導する人文科学分野としては、構築推進事業の成果を継承し、多彩な史料所蔵機関と連携して、史料のデジタル化や公開を進め、わが国の文化・学術資源の継承と普及、新たな領域の創成を含む学術の発展に寄与したいと考えている。

実施体制は以下の通りである。中核機関・東京大学は、対等な立場で参加する史料編纂所と社会科学研究所によって構成される（いずれも代表者は所長、業務主任者は史料編纂所所長）。両研究所の強固な連携を保つために、双方の所長・統括責任教員（史料編纂所は山田太造准教授）・事務局担当UR Aが参加する中核機関運営委員会を、毎月開催して、事業全体の運営・管理を行う。また、関係諸機関の実務担当者による実務者ミーティングを開催し

て、事業の進捗報告や問題点の洗い出し・情報交換等を行う。本事業の取り組みには、アークの六つの柱が設定されている。それぞれについて二〇二三年度の実績を記す。

【取組A：JDCatとの連携】

構築推進事業における実践方式を踏襲し、引き続き史料編纂所所蔵史料、史料編纂所の調査・研究や共同利用・共同研究拠点により収集した他機関史料等を対象にメタデータをJDCatに登録していく。本年度は、史料編纂所所蔵「島津家本」約六七〇〇冊のうち、東京大学デジタルアーカイブズ構築事業と連携して二〇二三年度までにデジタル化した四一四冊（史料画像三四五四二点）を対象に、JDCat登録のための準備として、DOI付与やJDCatメタデータの整備を行った。また、神奈川県立金沢文庫所蔵史料について、文化財指定外の史料（特に聖教）を対象に、JDCat登録のための準備を行った。

【取組イ：他機関のデータ受入や受託】

史料編纂所は、公共の史料保存機関をはじめ、旧大名家・武家、公家、寺社等の所蔵史料を対象として、調査・収集を続けている。構築推進事業においては、それらの所蔵者の理解を得ながらデータ受入・受託を実施してきた。強化事業においても同様の方式で、対象史料群を広げていく。今年度は、都城島津邸所蔵「都城島津家史料」、「菱刈文書」、および、海の見える杜美術館所蔵「岩倉具視関係史料」について、新たに史料画像四六〇二点（都城島津家史料「三九三一点」、「菱刈文書」一一四点、「岩倉具視関係史料」五五七点）を受入れ、HICAT Plusを介してWeb公開した。

【取組ウ：データ利活用の促進】

中核機関として、データ利活用に関する広報、および、本事業ならびにJDCatの取り組みについて情報を発信するため、ウェブサイトを開設した（URL: <https://www.hi-u-tokyo.ac.jp/di/>）。

国立情報学研究所が整備を進めているJDCatへのデータ提供の観点から、データ分析手法の検証を進め、構築推進事業で進めてきた検証基盤・連携基盤（画像共有における国際標準であるInternational Image Interoperability Framework（IIIF）に関わるApplication Programming Interface（API）を用いた連携方式）について、史料画像データ利活用のためのプロトタ

イピングを重ね、さらに有用性を高め、深化させていく。今年度は、取組ア
おおよびいにおつて、IIIrd Presentation APIを介した史料画像公開を行った。
史料編纂所は、二〇二三年三月よりデータ駆動型研究に耐えうるデータセッ
トならびにサービス等をHI Lab(<https://lab.hi-tokyo.ac.jp/>)より公開して
おり、HI Labにおけるデータセット充実のため、「オランダ国立文書館所蔵
幕末・明治期日蘭関係史料目録データセット」を追加・公開した(二〇二三
年十一月一日、DOI: 10.57459/hi-dsca-rel-nld-jpn)。情報発信として、じん
もんこんシンポジウム、および、国際会議PNCC2024におけるワークショップ
P E C A Iにて本事業の取組を報告した。人文学データシンポジウム「人文
学研究資源としてのデジタルデータ」を開催し(二〇二四年三月一二日)、
人文学データを提供している機関の状況を報告し、人文学研究を進展してい
くために解決すべき研究データにかかわる課題について議論した。

【取組エ: JDCatの運用・改修、メタデータスキーマや統制語彙の妥当性に
係る継続的な検討等】

中核機関では、下記の通り、システム担当機関、拠点機関等とともに実務
者レベルの定期会合を実施し、情報・意見交換を行った。

- ・中核機関運営委員会: 本事業における中核機関にかかる業務の計画立案・
進捗確認・拠点機関等とのやりとりなど運営の責任主体。六回開催。
- ・戦略会議: 中核機関とシステム担当機関によるJDCatにかかる課題解決の
ための会合。二回開催。

- ・実務者ミーティング: 中核機関・拠点機関等の実務担当者が出席し、
JDCat連携など各取組の進捗報告や情報交換を行う。一回開催。

また、拠点機関である神戸大学附属図書館・奈良文化財研究所を訪問し、
各拠点機関から提供されるデータやJDCatへのメタデータ登録における課題
について打ち合わせを行った。

JDCatでの検索方式・検索結果提示方式の人文学分野における有用性に
ついて確認するため、海外における人文学データインフラストラクチャーに関
わる国際シンポジウム「デジタル・ヒューマニティーズと研究基盤」欧州と
日本の最新トレンド」に参加し、DARIAH-EUなど、欧州における人文学デー
タの動向について調査し、情報交換を行った。

【取組オ: 「データ共有のための手引き」の妥当性に係る継続的な検討等】
中核機関では、現行の「データ共有のための手引き」について内容を精査
し改訂の検討を開始した。具体的には、中核機関が主催した人文学・社会科
学データインフラストラクチャー強化事業フォーラム「データ共有・利活用
促進のための研究基盤」(二〇二四年三月一二日開催)、および、実務者ミー
ティングにおいて議論した。

さらに人文学部門で必要とする要件を検討し、項目を洗い出すため、人文
学データシンポジウム「人文学研究資源としてのデジタルデータ」(二〇二
四年三月一二日開催)において議論した。

【取組カ: 拠点機関との連携及び関係機関との調整】

前述のとおり、拠点機関等と連携して本事業の活動を遂行するため実務者
ミーティングを実施した。また、本事業にかかる全体の取組に関する進捗の
共有と情報交換を行うため、連絡会議(中核機関が企画・進行役となり、本
事業および構築推進事業の拠点機関に加えて、日本学術振興会や国立情報学
研究所など、関係諸機関から数名の代表者が出席し、JDCat連携の状況と国
内外の最新動向の情報共有、今後の取り組みについて検討する会議)を開催
した(二〇二四年三月一二日)。また、同日に関係機関を招聘した公開シン
ポジウム、人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業フォー
ラム「データ共有・利活用促進のための研究基盤」を開催し、各機関の取り
組みについての報告と意見交換を行った。

共同研究

時空間を越えたコミュニケーションに関する研究

一、研究種目	共同研究(サントリーホールディングス・本学先端科学技 術センター)
二、研究期間	二〇二三年度～二〇二四年度(一〇月～二〇二四年九月)
三、研究経費	二五〇〇万円(直接経費)
四、研究組織	

研究分担者 金子拓（研究代表者先端科学技術センター稲見昌彦／分担

者情報理工系研究科鳴海拓志・同天野薫・次世代知能科学

研究センター松原仁）

五、研究概要

時空間を越えた飲み会をバーチャルに実現するための研究を行うことを目的に、次の四つの柱で研究を進めている。

① 相手と同じ空間にいるように対話するための研究

② 酔っている状態をバーチャルに再現する研究

③ 飲み会のように高揚した対話をバーチャルに実現するための研究

④ 特定の人物のバーチャルな人格を作り上げ、対話する研究

このうちの④を担当し、そのための史料情報蓄積を進めた。実際に共同研究に加わったのは二〇二四年一月からであり、その都度開催されるミーティングに対面・オンラインで参加したほか、三月に学術専門職員を雇用し、酒宴・食物に関する史料収集を行った。

（金子拓）

寄付金

「山川草木思想の展開に関する歴史資料学的研究」

一、鹿島学術振興財団研究助成

二、研究期間 二〇二三年度

三、研究経費 一六五万円

四、研究組織

研究代表者 菊地大樹

研究協力者 小山聡子（二松学舎大学）・藤井雅子（日本女子大学）

五、研究目的

近代社会における人間の環境へのかかわり方を解明するため、人文学から自然科学まで様々な分野のアプローチが試みられてきた。しかし、目下環境問題はますます深刻となっている。そのためとすれば、今日的な課題解決に即応した科学技術のみに目を奪われがちである。歴史学の立場からは、こ

のような時にこそ人間と環境をめぐる前近代以来の歴史的経緯を具体的に明らかにし、アカデミックな提言をすることで、持続可能な両者の関係の再構築に寄与することが求められている。さいわいこのような問題意識は歴史学においてもすでに広く共有され、日本を含む世界のさまざまな地域史研究において、環境史的方法が大きく前進している。巨視的にはこうした研究動向を受け、本研究においてさらに発展させることを目的とする。

六、研究報告

本研究は二〇二二年度採択課題を継続したものであり、菊地大樹『日本人と山の宗教』（講談社、二〇二〇年）を出発点に、関連執筆論文などをあわせて環境歴史学・長期持続的方法の観点から総合的に検討することを目的とする。そのために研究協力者と打ち合わせを行い、群馬県太田市長楽寺所蔵史料原本調査を進めた。長楽寺については、二〇二二年度から計三回の原本調査・写真撮影を実施した。その結果、「長楽寺聖教」には中世の印信群そのものが多くは残されていないこと、近世初期における長楽寺の歴史的变化が史料の残存状況に大きく影響していることが明らかとなった。同時に、中世印信の実態を推定させる関連史料をあらためて確認した。未紹介の史料も含まれることから全点をデジタル撮影し、所蔵者等の許可を得て東京大学史料編纂所歴史情報システムに登録、同研究所図書端末において成果公開し、研究者の閲覧に供している。

この間、研究代表者所属機関である東京大学史料編纂所は、所蔵者と協力し、京都市青蓮院門跡所蔵「吉水藏聖教史料」調査撮影を開始した。研究代表者はこの調査の中核的メンバーとして参加し、本研究課題と連携して調査研究を進めた。同聖教史料は国重要文化財の指定を受けており、平安時代中期以来の印信群を豊富に含む。さらに、その教理的背景に関する膨大な著作を収めているが、皇慶の谷流下で隆盛を誇った三昧流の根本史料であることが大きな特徴である。すでに一部は上記システムより成果公開しており、本研究課題の遂行にも大きく貢献している。

以上の原本調査の成果を踏まえて、理論的考察を積極的に推進するため、研究代表者は講演、国際学会パネル参加、および研究発表を行った。これらの機会には、現代における環境問題の解決における環境歴史学的背景の考察

が不可欠であるという問題意識を根底に据えながら、草木のような当時は「無生物」と考えられた存在でさえ成仏するという安然の主張から、人間の省察や人間の環境への責任という現代的課題が読み取れることを指摘した。また、印信史料の展開にも理論的支柱として大きな貢献を果たした「理智冥合」思想との関連から、「境智冥合」という思想がクローズアップされ、その「かなめ」として人体が重要な役割を果たすことを論じた。ここから、安然・皇慶以来の思想を受け継ぐ天台僧であるとともに、禅僧でもある東福寺円爾や痴兀大慧の思想を分析し、印信群の文献資料としての活用の可能性を大きく広げた。

以上の問題意識の展開から、あらためて原本調査の必要が生じ、かつて研究代表者が紹介した円爾による「東福寺栗棘庵印信群」のデジタル撮影を行った。とくに同印信群に付属する「心消滅・心真如両門図」は、研究代表者による史料紹介をきっかけに学界の注目を集めているが、今回の調査によりはじめて原本両面の全体をそれぞれワンカットで撮影・デジタル化した。この成果も、上記システムによりすでに公開している。

また、とくに二年目の発展的課題として、研究代表者が別に中核的役割を果たしている「金石文プロジェクト」が実施する、一三世紀の「高野山町石」を対象としたフィールドワークおよび、調査成果としての町石拓本のデジタル化研究と連携した。世界遺産高野山参詣道に計一七〇基点在中世の「町石」が、たんなる「マイル・ストーン」ではなく「五輪塔」をかたどっていることは、本研究課題として特に注目するところである。中世の五輪塔は宇宙全体の象徴であると同時に、人体をも表すことが密教教理の中心である。

これが弘法大師信仰という一〇〇〇年にわたる宗教的伝統を媒介として、高野山の自然環境と参詣者としての人間を結ぶ上でどのように位置づけられているのかを考察した。

なお、これらの過程でPCおよびHDD保存データが破損するという予想外の事態が生じたが、リカバリ作業などにより主要な部分は復旧し、研究遂行に大きな支障はなかった。

以上のように、本研究においては原本調査およびフィールドワークによるデジタル撮影・拓本採集（拓本のデジタル化）およびそれらの整理公開まで

を実施し、本研究課題の学界への貢献を果たすと同時に、これらを基礎として、自由な理論的考察を展開した。一部は再度基礎調査に戻り、さらなる研究課題の発展を期した。最後に、環境と人間を結ぶ心身の関係について、おもに宗教社会史的立場から総括し、近年のテクノアニミズム論などとも関連づけて総合的に論じるため、研究代表者も参加し、マルクス・ガブリエル教授（ボン大学教授・中島隆博教授（東京大学）を核として国際的なコンソーシアムの構築をめざす「新しい啓蒙」プロジェクトにおいて批判的な観点から研究発表を行った。

なお、以上の理論的研究成果の一部は、英語および日本語の複数の論文としてすでに出版または出版予定である。

寄付金「南蛮貿易」で結ぶモノのデジタル・マップ構築と地域史研究支援 社会への還元取り組みとして」

一、研究種目 鹿島学術振興財団研究助成

二、研究期間 二〇二二年度～二〇二三年度

三、研究経費 直接経費一三〇万円（二〇二三年度）

四、研究組織

研究代表者 岡美穂子

五、研究の概要

本研究では、いわゆる「南蛮貿易」と称されてきた、十六世紀の日本と世界の関わりが、日本の産業発展や人々の価値観にどのような変容をもたらしたのかを、その前後の時代との連続性を軽視することなく、多細目に渡る「モノ（遺構も含む）」についての最新研究成果を組み合わせることで明らかにする。大きな特徴は、アカデミアの研究者と関係地方自治体の研究者の協働で研究が進められることである。

当初の予定では、長崎県、大分県などの遺跡がデジタルマップ制作の対象として想定されていたが、いずれの自治体も文化庁のデジタル支援などで独自に文化財デジタルマップの制作、公開を進めていることが判明し、まずはモデルケースとして石見銀山を擁する島根県および大田市の自治体研究者の協力を得て、石見銀山遺跡並びに周辺の温泉津、浜田などの日本海側の港町

と中世日本最大の港湾都市博多を結ぶルート上の交易史跡、十六世紀の発掘成果物などを対象に必要なデータの収集を開始した。

石見銀山遺跡ならびに石見銀の積み出し港であった温泉津からは大量の貿易陶磁（東南アジア、中国、朝鮮産）が発掘されているが、その成果はほとんど公開されていないことを再確認し、データを整理の上でオンライン情報として公開することの有益性を再確認できた。またこの会議ではデータ収集にあたっていただく三人の元文化財担当者（自治体退職者）に作業の手順を説明し、デジタルマップを作成する上での具体的なテーマについて検討を重ねた。

本来の目的であった研究公開手段としてのデジタルマップ本体は、渡邊英徳研究室と濱津すみれ氏（渡邊研究室所属大学院生）の協力の下、ArcGISを使用して完成しており、二〇二四年四月現在、公開に向けて調整中である。

寄付金「前近代の那覇港における航路と聖地」

- 一、研究種目 JFE二一世紀財団アジア歴史研究助成
- 二、研究期間 二〇二三年（一月～二月）
- 三、研究経費 期間中の直接経費一五〇万円
- 四、研究組織
- 研究代表者 黒嶋敏
- 五、研究の概要

本研究は、複数の画像史料を読み込んだうえで、前近代における那覇港の航路と聖地の関係を復元的に考察し、アジア海域の交易拠点となった港湾の実態に迫ろうとするものである。その際、とくに分析素材として、関連する絵図類および一九世紀の海図・水路誌などに軸足を置き、現地調査を並行して実施した。また、本研究の課題遂行に当たっては、研究対象が部分的に重なっている科学研究費補助金（基盤研究(A)、課題番号二三H〇〇〇〇一二、研究代表者黒嶋）による調査研究とも連携しながら実施した。

このうち、絵図類の分析としては、一六四〇年代に製作された正保の琉球国絵図と関係が深く、那覇港に関する貴重な情報を数多く含んでいる「琉球并諸島図」（都城島津邸所蔵）のデータ構造化に着手し、二〇二三年九月よ

り「都城島津邸所蔵「琉球并諸島図」デジタルアーカイブ」を公開した。これらのデータ整理に当たっては、学術支援職員一名を雇用している。また、同図が持つ歴史的性格については、拙稿「都城島津邸所蔵「琉球并諸島図」について」（『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』一〇一、二〇二三年七月）において検討を行っている。

次に、地形や航路の確認作業として、現地調査を二回に分けて実施した。第一回調査は二〇二三年六月に那覇港周辺の地上・海上を対象に行い、海図に描かれた対景図の正確な描画地点の特定を進めた。これにより、一八五三年に来琉したペリー一行の作成した海図について、読解する際の大きな手がかりを得ることができた。この調査には本所技術部の谷昭佳氏・桑田恵理氏にご同行いただき、光学的な見地から多数のご助言をいただいた。第二回調査は二〇二三年九月に、那覇港近在の慶良間諸島周辺において実施した。慶良間諸島は風待ちに適した地理的条件から、那覇の外港としての機能を有しており、その地形を詳しく記した「渡閩航路図」（沖縄県立博物館所蔵）などの描画内容と地形の照合を行った。

このほか本研究では、都城島津邸、沖縄県立図書館、広島市立中央図書館（浅野文庫）などに赴き、所蔵される関連史料の調査を行っている。これらも含めた本研究課題の全体的な成果をまとめたものとして、拙稿「前近代の那覇港における航路と聖地」を執筆しており、近日中に公益財団法人JFE二一世紀財団HPにおいて公開される予定である。

末筆ながら、所蔵史料の調査や現地調査をはじめ、研究課題遂行に当たり種々のご高配を賜った関係各位に、心より御礼を申し上げます。

明治太政官政府主要人物文書群の保存・利活用に資する研究基盤の構築

- 一、研究種目 公益財団法人鹿島学術振興財団研究助成（一般研究助成）
- 二、研究期間 二〇二三年度
- 三、研究経費 一二〇万円
- 四、研究組織
- 研究代表者 箱石大

共同研究者

石田七奈子（東京大学史料編纂所・学術専門職員）、佐藤大悟（青山学院大学附置青山学院史研究所・助教）、白石烈（宮内庁書陵部編修課・主任研究官）、松中博（京都市歴史資料館・歴史調査員（主任））、宮間純一（中央大学文学部・教授）

五、研究の概要

（1）研究の目的

幕末維新期の人物を研究するための史料となる文書が、各所に分散して保存されていることは少なくなく、そうした場合、文書群の全体像を把握するのは、専門の研究者にとっても容易なことではない。一方、経費・人員不足などの問題で、史料の整理・公開が容易に進捗しない所蔵機関もある。このため、分散所在する文書群を統合的に把握し、誰でも自由に活用できる研究基盤を構築することが求められている。

本研究は、明治太政官政府の主要人物である岩倉具視の関係文書群を対象とするものであるが、これは岩倉個人の伝記的な研究にとどまらず、明治維新史全般を研究するための重要史料の研究でもある。現在、岩倉具視関係文書の主要部分は、①京都市歴史資料館、②海の見える杜美術館、③国立国会図書館憲政資料室、④国立公文書館、⑤京都府立京都学・歴史館に分散して保存されている。本研究では、文書のデジタル写真撮影や画像データのウェブ公開を単独で進めることが困難な所蔵機関と連携し、文書群の保存・活用に資する研究基盤の構築を目指している。

（2）研究の計画・方法

本研究は、①各所に分散所在する岩倉具視関係文書を統合的に分析し、デジタル画像と書誌データを作成する、②分散所在する各文書群のまとまり・構成、各文書群相互の関係、個別文書の形状を復元する、③岩倉の公的な伝記である『岩倉公実記』（宮内省皇后宮職蔵版）の編纂事業やその後の顕彰事業が、各文書群の伝来過程に与えた影響を解明する、④作成したデジタル画像と書誌データを所蔵機関と連携してウェブ公開する、という方法で実施することを計画した。

（3）研究実績

〔京都市歴史資料館所蔵「岩倉具視関係資料」のデジタル写真撮影〕

指定文化財を含む文書群であるため、文化財撮影の経験・実績を持つ専門業者に委託して高精細デジタルカメラによる写真撮影を実施した。本年度は国指定重要文化財「岩倉具視関係資料」のうち、文書・記録・詠草類一三点、岩倉公伝記資料の第一類く第九類及び第十一類の通常撮影と、国指定重要文化財「岩倉具視関係資料」文書・記録・詠草類（掛軸・額）七点、京都市指定文化財「岩倉具視関係資料」絵画類八点の大型デジタル全体撮影を完了させた。

〔関西学院大学図書館所蔵「摂津国大坂三郷質屋樫原家文書」の調査〕

現在、海の見える杜美術館に所蔵されている「岩倉具視関係史料」の旧蔵者は大阪の質屋である樫原家（天満屋）であった。今回、関西学院大学図書館所蔵「摂津国大坂三郷質屋樫原家文書」のうち、樫原家当主の日記などを閲覧・調査し、明治期に「岩倉具視関係史料」が多田好問により樫原家へ質入れされていたこと、大正期以降に臨時帝室編修局や維新史料編纂会が樫原家で史料調査を実施していたことなどを確認した。成果の一部は、共同研究参加者による研究会（二〇二四年三月三一日、オンライン開催）において共有した（佐藤大悟氏の「関西学院大学図書館所蔵「摂津国大坂三郷質屋樫原家文書」調査の中間報告」による）。

寄付金「十六く十七世紀ユーラシア遠隔地交易投資グループの比較」

- 一、研究種目 鹿島学術振興財団研究助成 外国人研究者招へい援助
- 二、研究期間 二〇二三年度
- 三、研究経費 直接経費一五〇万円
- 四、研究組織 招へい研究者 岡美穂子 外国人研究者 フランソワ・ジブル
- 五、研究の概要

本研究はフランスCNRRSのジブル名誉教授を招聘して、近世東シナ海の貿易投資構造について共同研究することを目的とした。以下、ジブル氏の研究概要を報告する。

十六世紀以降、東シナ海では密度の濃い商業ネットワークが形成されていた。果たして十九世紀以降に始まると言われる、この海域で用いられた国際的な商業習慣には前段階が存在しないのであろうか、という疑問に基づいて本研究は行われた。

東京大学史料編纂所では、マカオ文書館、東インド会社史料、宣教師文書など、豊富な史料を所蔵しており、調査期間中に多くの一次史料を集めることができた。九州大学（アントン・シユヴァイツァー教授）と京都大学（村上衛教授）を訪問し、今後の研究への有益な示唆をいただいた。東京では、羽田正教授（東京カレッジ）らと交流し、東アジアの国際貿易に関心のある若手研究者と交流できた。また受け入れ研究者である岡美穂子氏は、東アジアの国際貿易における商業契約書の豊富なコレクションを私に提供してくれた。また岡氏の紹介により、東京大学文学部では島田竜登先生のセミナーで講演の機会を与えられた。そこでアジア史を研究する多くの若手研究者と交流を図ることが出来た。

この滞在をきっかけに、次回の世界経済史学会（ルンド、二〇二五年七月）で日本、ヨーロッパの研究仲間と報告パネルを企画することにした。日本での研究滞在は大変多いものでありで、貴重な機会を与えてくださった鹿島学術振興財団に感謝したい。

南北朝遺文フルテキストデータベースの作成支援

- 一、研究種目 奨学金（株式会社東京堂出版）
- 二、研究経費 六〇万円
- 三、研究組織
- 研究代表者 堀川康史

四、研究の概要

『南北朝遺文』（東京堂出版刊）は南北朝時代（一三三三～一三九二）の古文書・金石文の編年史料集で、科学研究費等によりフルテキスト・データベース化を進めている。二〇二三年六月、東京堂出版より標記の寄付金をいただき、本文校正を行う学術専門職員を一名雇用した。

所内研究プロジェクト

荘園絵図プロジェクト

一、プロジェクトメンバー

稲田奈津子・井上聡・榎原雅治（共同研究員）・遠藤基郎・及川亘・川本慎自・菊地大樹・坂本亮太（共同研究員）・末柄豊・高橋慎一朗・高橋敏子（共同研究員）・高山さやか・谷昭佳・土山祐之（共同研究員）・鶴田啓・藤原重雄・堀本一繁（客員教授）・前川祐一郎・村井祐樹・村岡ゆかり・山口英男・山家浩樹

二、活動概要

（1）予算

画像史料解析センターのプロジェクト経費、共同利用・共同研究拠点の特定共同研究（複合領域）「荘園絵図調査方法論の高度化と調査関連情報の学術資源化に関する研究」（研究代表者・井上）、科学研究費補助金基盤研究(A)「荘園絵図調査・解析方法に関する総括的研究と汎用的な歴史地理情報への応用研究」（研究代表者・井上）によって活動を行った。

（2）『日本荘園絵図聚影釈文編四 中世三・古代補遺』の刊行

二〇二四年三月に釈文編の最終冊を刊行し、本シリーズを完結させた。所収絵図の一覧は『画像史料解析センター通信』一〇四号に掲げた。本年度は、残っていた若干の釈文図や紙面構成図等の修正、関連史料・参考文献の確認と解説の執筆、補遺分の写真関係や掲載許諾など、出版に直接関わる活動となった。榎原が中心となり、高橋敏子・井上・藤原・西田友広・山口および和歌山県立博物館主任学芸員の坂本亮太氏（共同研究員）・福岡市博物館主任学芸主事の堀本一繁氏（画像史料解析センター客員教授）が分担執筆などいし相互点検などに加わった。その他の協力者については、出版報告の項に記した。

（3）原本調査・現地調査

二〇二三年九月に志賀海神社所蔵（福岡市博物館寄託）「志賀海神社縁起」

の原本調査および現地調査を行った。これには堀本氏にご高配賜った。

(4) その他

所内プロジェクトとしての研究グループの活動は二〇二三年度にて終了した。出版過程での知見や生成物の整理、蓄積した学術資源の高度利用を目指し、上記経費によって翌年度は活動している。

前近代地震火山史料研究プロジェクト

史料編纂所では、現在、地震研究所と連携して前近代の地震火山史料を研究するプロジェクトを二件実施している。一つは、二〇一四年度より開始した地震・火山噴火予知研究協議会史料・考古部会の研究課題「文献史料による歴史地震に関する情報の収集とデータベースの構築・公開」に引き続き二〇一九年度より取り組んでいる「地震火山関連史料の収集・分析とデータベースの構築・公開」である。これは既刊の地震史料集の全文テキストデータベース化を進める取り組みであるが、二〇二二年度に『増訂大日本地震史料』『新収日本地震史料』全冊のテキスト化が完了し、「地震史料集テキストデータベース」として一般公開を開始した。

本年度は、既刊史料集掲載史料を史料原文と対照させて校訂を進めた。また全文テキスト中の地名を自動的に抽出するための検討を行った。まだ試験段階であるが、自動抽出の精度を高め、地震を感じた場所に位置情報を付与し、地図上に表示できるようにしていく計画である。

もう一つは史料編纂所と地震研究所が連携して前近代の地震火山史料研究を行うために、二〇一七年度より学内に設置した地震火山史料連携研究機構（設置期間七年間）における取り組みである。ここでは既刊・未刊を問わず、日本国内の諸地域における有感地震記録を定点観測的に収集する研究プロジェクトを進めている。特に一九世紀の日記史料から有感地震記事を収集し、データベース化する取り組みを行っている。本年度は、既刊史料集や史料編纂所架蔵史料からの採録のほか、山口県山口市、愛媛県宇和島市、大分県佐伯市、熊本県熊本市などでの史料調査を行った。また地震研究所の教員と連携して、教養学部で文系・理系の学生を対象に学術フロンティア講義「歴史資料と地震・火山噴火」を開講した（履修者約一九二人）。

維新史料研究国際ハブ拠点の形成プロジェクト

二〇一九年度より開始のプロジェクトで、本所の「維新史料網要データベース」の英訳研究を推進し、かつ海外研究者との国際的な研究ネットワーク（ハブ拠点）の構築をおこなってきた。本年度は、プロジェクト期間五年間の最終年度に当たる。

維新史料網要データベースに登録している網文データについての英訳は、本事業の中核である。この網文データの英文への翻訳については、本年度の途中より外国人特任研究員アレックス・シユワインズバーグ氏（イェール大学大学院）に担当いただいた。またデータの整備等に関しては、引き続き学術専門職員及川将基氏および加藤絵里子氏の参加を得た。同じく学術専門職員の犬飼ほなみ氏には、研究支援や他の所内研究プロジェクトとの連携にあたって、さまざまに協力をいただいている。

核心的な成果としての英訳網文データについては、従来の成果のうえに立って登録および更新をおこなった。データ内容については、共通理解の高度化にもとづき、関連のグロッサリー構築をすすめてきた。前年度に引き続き、所内の「日本史用語翻訳グロッサリー・データベース」グループとの連携を継続し、登録データの共有も続行している。

国際研究集会の開催については、前年度までの経緯を踏襲して、今年度もオンラインでの開催とした。また以前より連携にあたってきた、保谷徹名誉教授が代表をつとめる科学研究費による研究「在外日本関係史料の調査と貴重史料の研究資源化による維新史料研究国際ハブ拠点の形成」（基盤研究(A)）とは、本事業との緊密な連携を引き続きとりつつ、相乗的な研究の発展をめざしてきた。今年度も、本所所蔵の特殊蒐書コレクションである史談会本の撮影・データ化をすすめ、画像データの全体につき公開にふみ出した。

今年度開催の国際研究集会（二月一八日）では、ウェブ会議システム（Zoom）を用いて報告および討論をおこなった。合衆国からは日本史研究者のダニエル・ボツマン教授（イェール大学）を報告者として招聘、また討議にあたってルーク・ロバーツ教授（カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校）ならびにロバート・ヘリヤー教授（ウェイク・フォレスト大学）も招聘して

開催した。JSPS人文・社会科学データインフラストラクチャー強化事業、前掲科研費基盤研究(A)〔保谷徹代表〕および同基盤研究(B)〔日本近世史料学の再構築―基幹史料集の多角的利用環境形成と社会連携を通して〕(杉本史子代表)との共催である。今回の研究集会においては、本プロジェクトにおいて主要な役割を果たした保谷名誉教授による総体的な成果を概括した報告内容に加えて、ボツマン教授による、在米日本近世史料の原本解説にもとづく精細な研究実践の内容を披露いただき、示唆に富んだ研究成果内容をふまえ、活発な討議がおこなわれた。

研究集会の内容は次の通りである(使用言語は日本語)。

① 研究報告

- ・保谷徹「維新ハブPJの成果と課題——戊辰戦争と維新史料網要DB」
- ・ダニエル・ボツマン「イェール大学所蔵山田朝右衛門記録から見た幕末維新期の社会」

② コメント

- ・ルーク・ロバートより
- ・ロバート・ヘリヤーより

また本研究集会の開催後には、ボツマン・ロバート・ヘリヤー三教授の出席を得て、DB英訳データについての検討会を実施している。

従来から継続してきた横浜開港資料館との連携については、仏国外務省史料収集史料(データスキャン)につき、相互公開に向けての最終的な準備をすすめた。本所の図書閲覧室で公開している在外史料画像(HiCAT Plus)とあわせて、十九世紀外交史料の検証を可能とする研究基盤としての意義を有するものである。

本プロジェクトは二三年度末をもって終了とするが、今年度は短期ながらもシユワインズバーグ研究員に多大なるご尽力をいただいた。当欄に記して感謝の意を申し述べさせていただきます。

天皇家・公家の「知」の体系としての文庫・宝蔵研究拠点創設プロジェクト

本プロジェクトは、二〇二〇年度より二〇二四年度までの五か年計画で、

二〇二三年度は四年目で、古代史料部門第三室が中心となって担当する。二〇〇七年度以来、大型科研費により遂行してきた天皇家・公家の文庫・宝蔵に関する研究を継承する研究拠点を創設することを目標とする。具体的には、①関係史料のデジタル画像による蒐集とWeb・本所閲覧室での公開(国際発信)、②京都御所・同離宮等関係資料による文理融合型の学際的研究、③関係史料群の調査研究とその成果を論文や公開講座などで発信することを柱とする。

① 史料画像の蒐集・公開

前年度に引き続き、二〇二二年度までに公開した、宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵「家分け本」・山口県立山口図書館所蔵萩藩明倫館旧蔵今井似閑本・西尾市岩瀬文庫所蔵柳原家本のデジタル画像累計約六万四千件について、安定的なWeb公開を本所DB(SHIPS)のうちHiCAT Plusから行うと共に、二〇二二年九月より公開した宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵の(Ⅰ)内匠寮本「中井家文書」の内、①「寛政度」京都御所造宮関係文書(函号E二一〇一一)・②「安政度」京都御所造宮関係文書(函号E二一〇一一)と、(Ⅱ)同文庫所蔵「近世公家日記類」約一三万六千画像(有栖川宮家本・阿波国文庫本・桂宮家本・久我家本・御所本・青蓮院本・白川家本・鷹司家本・土御門家本・庭田家本・野宮家本・橋本家本・葉室家本・日野家本・日野西家本・平田家本・松岡家本・壬生家本・函号に家わけ記号のないもの(山科忠言卿記・泰重卿記他))のWeb公開の安定的な公開を継続した。これら、天皇家・公家文庫関係資料のデジタル画像累計約八二万画像の他、本所閲覧室の情報端末PCでも、京都御所東山御文庫所蔵禁裏本・同別置本、陽明文庫所蔵近衛家伝来本、小計約三三万画像、あわせて総計約一一五万画像を公開中である(陽明文庫本に関しては、史料編纂所が提供した画像が、西日本では京都府立京都学・歴史館の京都学デジタル資料閲覧コーナーで公開中)。

本年度は、新規撮影及びマイクロフィルムからのスキャンニングにより、(A)宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵の柳原家本(『続史愚抄』・『基量卿記』・『禁裏番衆所日記』・『柳原紀光日記』他)・野宮家本(『野宮定晴日記』・『野宮定之日記』・『野宮定功公武御用記』・『野宮定功公武御用記』・『野宮定功修理職奉行備忘』他)・壬生家本(『孝亮宿禰記』・『于恒宿禰記』・『忠利宿禰記』・『敬

義宿禰記」他）等を三〇、五一八画像、（B）京都御所東山御文庫本・同別置本を三四、〇五六画像、合計六四、五七四画像を蒐集し、公開準備を進めた。これにより蒐集した天皇家・公家文庫関係資料のデジタル画像の累計は、目標の一五〇万画像まであと約二七万画像に迫る、累計約一二三万画像となった。更に、①「〔寛政度〕京都御所造宮関係文書」の残りの帳簿類約二万画像のデジタル画像の蒐集を完了し、*Meiji*公開の準備をしているので、近世公家関係・内裏造宮研究のための研究環境は大きく進展することが予想される。

②京都御所・同離宮等関係資料及び天皇家公家文庫収蔵史料群の調査研究と発信 デジタル画像により蒐集した安政度御所造宮関係資料を用いて、建築史研究者・大学院生を中心とした「中井家文書」研究会により研究を進め、その成果として、二〇二三年一月九日には、京都府立京都学・歴史館に日本史や建築史の研究者・大学院生等約七〇名が集い、第四回国際研究集会「御所（宮殿）・邸宅造宮関係資料の地脈と新天地」を開催した。建築史学と文献史学とが融合し、上記デジタル画像等を活用した研究報告ができた。また、二〇二三年度から古代の宮殿研究のシンポジウムを開催することとなり、第一回を九月三〇日に「飛鳥宮の儀礼と空間構成」と題して奈良県立橿原考古学研究所の協力のもと、同所で開催した。四八名の研究者が参加し、シンポジウムにあわせて作成した報告集は増補改訂のうえ二〇二四年度に八木書店から出版予定である。また、歴史館では一月二六日に「陽明文庫資料からの新発見Ⅳ」をテーマに二四四名の参加者を得て、第一四回「陽明文庫講座」を開催し、同時に「陽明文庫講座図録」五も刊行し、一六件の史料の紹介・検討を掲載した。更に金鶏会館（県立長野高校同窓会館）で公開講座全七回を対面で開催し、延べ五三九名が受講した。その成果の一端は、過去の講座内容も含め、『新発見史料・新解釈による古代・中世前期の信濃―「信濃史料」古代編（二・三巻）に係る未収史料の収集に関する基礎的研究』の成果―」（研究成果報告二〇二三五）で示した。

関連して、プロジェクトで採用している特任研究員佐竹朋子が『近世公家社会と学問』（吉川弘文館）を、古代史料部の田島公が『蔵書目録からみた天皇家文庫史』（塙書房）を刊行した。なお、プロジェクト期間内の刊行を

目指し『新訂増補日本古代人名辞典』上・中・下（吉川弘文館より刊行予定）の編纂も行っている。

研究会・講演会、刊行物、発表論文

【本研究プロジェクト主催・共催の講座】

- ① 公開講座「古典から読み解く歴史学・文学」全七回（後掲一八一頁）
- ② シンポジウム「飛鳥宮の儀礼と空間構成―（後掲一七七頁）
- ③ 第四回 国際研究集会「御所（宮殿）・邸宅造宮関係資料の地脈と新天地」
- ④ 陽明文庫講座（後掲八件）

【研究会・講演会】

- 1 藤原重雄「扁額模写の蒐集および額字集」第一五八回「書物・出版と社会変容」研究会、佐倉大会、二〇二三年四月八日
 - 2 田島公「ヤマトタケルと甲斐・科野―倭王権の「東方十二道・東国」進出伝承の再検討―」公開講座①、二〇二三年九月二三日
 - 3 田島公「飛鳥の王宮と外交儀礼―小墾田宮とエビノコ郭の機能―」シンポジウム②、二〇二三年九月三〇日
 - 4 田島公「禁裏・公家文庫研究の一齣―洞院家旧蔵本と東山御文庫所蔵禁裏文庫本「外記政」を例に―」、京都大学読史会、二〇二三年一月三日
 - 5 佐竹朋子「近衛家熙と『大唐六典』校訂事業」陽明文庫講座、二〇二三年一月二六日
 - 6 藤原重雄「歴博甲本「洛中洛外図屏風」に描かれた犬馬場の位置」藝能史研究会（二〇二三年度東京特別集会）、二〇二三年二月九日
 - 7 田島公「言問橋」「言問通り」の地名の由来と「武蔵国浅草寺縁起」―「こととひ」地名と武射国造領域の「豊島屯倉」―」公開講座①、二〇二四年三月二日
 - 8 田島公「禁裏・公家文庫研究」プロジェクトの成果と未来」第二九二回研究発表会、二〇二四年三月二八日
- 【編著書】六件
- 1 田島公・海野聡・鶴見泰寿企画・監修『シンポジウム「飛鳥宮の儀礼と空間構成」報告集』東京大学史料編纂所、二〇二三年、全八〇頁

- 2 名和修・金田章裕・田島公企画・監修『陽明文庫講座図録五』東京大学史料編纂所、二〇一三年、全四七頁
- 3 田島公企画・監修『新発見史料・新解釈による古代・中世前期の信濃——『信濃史料』古代編（一・三巻）に係る未収史料の収集に関する基礎的研究』の成果——東京大学史料編纂所、二〇一四年、全一〇六頁
- 4 佐竹朋子『近世公家社会と学問』吉川弘文館、二〇一四年、全三九三頁
- 5 海野聡・田島公『国際研究集会「御所（宮殿）・邸宅造営関係資料の地脈と新天地」報告集（四）』冊子印刷社、二〇一三年、全六九頁
- 6 田島公『蔵書目録からみた天皇家文庫史——天皇家ゆかりの文庫・宝蔵の目録学的研究——』塙書房、二〇一四年、全六六〇頁
- 【研究論文・翻刻等】三四件
- 1 田島公「問題提起「飛鳥宮」時代の特殊性——「天下」を喪失していた時代——」編著書1、pp. 5-8
- 2 田島公「飛鳥の王宮と外交儀礼——小墾田宮とエビノコ郭の機能——」編著書1、pp. 41-54
- 3 佐竹朋子「近衛家熙と『大唐六典』校訂事業」編著書2、pp. 6-12
- 4 芝崎有里子「和歌集断簡」編著書2、pp. 18-19
- 5 小塩慶「『類聚雜例』第八表紙——『勘例』原表紙の復元——」編著書2、pp. 20-21
- 6 藤原重雄「『勘例』紙背文書——光厳・崇光両院の帰郷——」編著書2、pp. 22-23
- 7 黒須友里江「『踏歌節会後京極撰政次第』」編著書2、pp. 24-25
- 8 尾上陽介「『御写物』——鎌倉後期、近衛兼教の周辺にあった文書の面影——」編著書2、pp. 26-27
- 9 木村真美子「後光厳天皇宸筆書状写——伏見宮栄仁親王の名字のこゝろ——」編著書2、pp. 28-31
- 10 末柄豊「飛鳥井雅康仮名消息」編著書2、pp. 32-35
- 11 遠藤珠紀「『一条亭城介事、かちんの事』——本能寺の変の体験談——」編著書2、pp. 36-37
- 12 藤井讓治「『近衛前久書状』——石田三成・増田長盛の所司代就任——」編著書2、pp. 38-40
- 13 田島公「陽明文庫本『勘例』^{題号之事}」一題——大日本古記録『陽明文庫本勘例』上・下から——編著書2、pp. 41-43
- 14 田島公「西光寺所蔵『地藏菩薩像』納入「文治三年諸国勸進地藏菩薩印仏」に見える信濃国の結縁者——新たに紹介された「更科郡清水庄」・「富部御厨」の史料——」編著書3、pp. 32-40
- 15 田島公「陽明文庫所蔵平信範書写『行親記』紙背「僧定寛書状」——信濃国水内郡撰関家領太田荘の年貢進上と「大洪水」——」編著書3、pp. 43-52
- 16 田島公「大祝家旧蔵諏訪教育会所蔵『神氏系圖』^{稱統系圖}」所引「神氏系圖」から見た科野国造」編著書3、pp. 72-76
- 17 田島公「ヤマト王権の「東方十二道・東国」進出伝承の再検討——ヤマトタケルと甲斐・科野——」編著書3、pp. 77-94
- 18 田島公「十巻本『伊呂波字類抄』所引「善光寺（奈良）古縁起」の構造・伝来と信憑性」編著書3、pp. 57-71
- 19 太田克也「熊野懷紙」「熊野類懷紙」の模写・模刻」「画像史料解析ゼンター通信」一〇一、二〇一三年）、pp. 2-8
- 20 太田克也「宮内庁書陵部所蔵九条家本『三条西実隆詠百首和歌』について」『東京大学史料編纂所研究紀要』三四、二〇一四年）、pp. 64-71
- 21 太田克也「治承三年十月右大臣家歌合の第二類本文」『山田国文』六八、二〇一三年）、pp. 13-26
- 22 小塩慶「平安中後期の祥瑞」『日本史研究』七二八、二〇一三年）、pp. 1-26
- 23 小塩慶「『国風文化』はいかに論じられてきたか」（有富純也・佐藤雄基編『撰関・院政期研究を読みなおす』思文閣出版、二〇一三年）、pp. 189-220
- 24 小塩慶「日本の祥瑞の流れ」（水口幹記編『東アジアの世界分析の方法——術数文化の可能性——』（文学通信）、二〇一四年）、pp. 251-263
- 25 丹藤真子・佐竹朋子・藤原重雄「『東京帝国大学附属図書館所蔵』絵画本日録稿』翻刻」(UTokyo Repository、二〇一三年）、pp. 1-30
- 26 佐竹朋子「幕末の朝廷・公家社会研究の現状と課題」（『歴史評論』八七五号、二〇一三年）、pp. 63-74

27 佐竹朋子「コラムⅠ 大名をとつての文芸」(『日本近世史を見通す六宗教・思想・文化』吉川弘文館、二〇一三年)、pp. 33-37

28 芝崎有里子「『閑窓自語』中巻第四七話「釈奠上卿毎事問人語」と『続史愚抄』」『汲古』第八四号、二〇一三年)、pp. 7-12

29 田島公「陽明文庫所蔵『兵範記』紙背文書に見える「郡寺」―「摸作」氏・「摸作郷」の検討から丹波国桑田郡の地域史・古代寺院と「郡寺」論に及ぶ―」(本郷真紹監修／山本崇・毛利憲一編『日本古代の国家・王権と宗教』法蔵館、二〇一四年)、pp. 631-689

30 藤原重雄「洛中洛外図屏風の祖型を探る―行事図像の理解―歴博甲本の能舞台―」(『中世文学』六八、二〇一三年)、pp. 5-13

31 藤原重雄「伏見・大光明寺の舞楽図障子について」(『国華』一五三七、二〇一三年)、pp. 3-15

32 藤原重雄「野口遵氏寄贈原本類についての覚書」(『画像史料解析センター通信』一〇〇、二〇一三年)、pp. 6-16

33 土山祐之・藤原重雄「国立公文書館所蔵内閣文庫大乘院文書『御参宮雑々記(文永二年)』」(『東京大学史料編纂所研究紀要』三四、二〇一四年)、pp. 17-31

34 藤原重雄「『晴富宿禰記』紙背文書にみえる「洛中図」―洛中洛外図研究と史料の読み直し―」(『画像史料解析センター通信』一〇三、二〇一四年)、pp. 14-20

本研究プロジェクトは、特任研究員佐竹朋子氏・芝崎有里子氏、学術専門職員糸賀優理氏・太田克也氏・尻池由佳氏の協力を得ており、画像史料の蒐集には新井重行氏(古代史料部二室)、公開の為のメタデータの付与に関しては遠藤基郎氏(古文書・古記録部)の指導・協力による。また、『新訂増補日本古代人名辞典』上・中・下(吉川弘文館)の編集は、学術専門職員柳佳子氏・渡辺奈穂子氏の協力による。(藤原重雄・小塩慶・田島公)

「原本史料情報解析」の方法による南九州関係文書の保全と研究プロジェクト活動報告

一、プロジェクト名称 「原本史料情報解析」の方法による南九州関係文書

の保全と研究

二、プロジェクトメンバー

尾上陽介(図書部長) 桑田恵里 小瀬玄士 高島晶彦 高山さやか
谷昭佳 西田友広 畑山周平 本郷恵子(代表) 松澤克行 宮崎肇
村井祐樹(幹事) 村岡ゆかり 山口悟史 山田太造

三、活動概要

本プロジェクトは、二〇一五―一九年度の五年間にわたる「原本史料情報解析による複合的史料研究の創成事業」を継承し、同プロジェクトで実施した原本史料研究の方法を用いて、鹿児島県を中心とする南九州地域に関わる原本史料の保全・研究・社会還元事業を行うものである。

本プロジェクトは二〇二〇年一〇月に発足した。発足の経緯は以下の通りである。「原本史料情報解析による複合的史料研究の創成事業」は、国宝『島津家文書』の修理・研究をおもな内容としていたが、同プロジェクト遂行の過程で、鹿児島県の島津興業および鹿児島銀行の二つの企業とご縁がなくなり、奨学寄付金を受領する運びとなった。島津興業からは「島津家文書研究のため」、鹿児島銀行からは「鹿児島県の歴史遺産の保存状態の改善／鹿児島県の歴史・文化等の研究事業への貢献」という目的で、それぞれ奨学寄付金を受けている。そこで両社からの寄附金を活用する新たな研究事業として、本プロジェクトを立ち上げた。実施にあたっては、科研の基盤研究(B)「原本史料情報解析」の方法による中世西国武家文書の研究と展開」(代表 本郷恵子 二〇二〇―二三年度)のグループと連携する体制で進めている。

本年度は、科研グループと連携して、南九州関連史料の調査・撮影を実施したほか、東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二一―二一六「島津家文書」(『御文書』外中世文書集)(小瀬玄士・畑山周平・村井祐樹編)の作成に協力した。また、文化庁の「国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金」の交付を得て、二〇二二―二六年度の五年計画で進めている『島津家文書』のうち「歴代亀鑑」「宝鑑其一」「宝鑑其二」の手鑑計四帖の修理事業について、解体時の撮影や調査等に協力した。さらに『入来院家文書』第四・五・一〇巻(計四一通)の解体・養生・撮影を行い、まくりの状態で保管することとなった。これにより、一般の利用に供することが容易になった。

なお本プロジェクトは、活動期間を上記科研の研究期間に準ずると定めており、本年度をもって期間満了となる。

研究発表会

第二九一回その1 二〇二三年六月二十九日 担当…特殊史料部門・画像史料解析センター

「戦国期京都における問屋の所有と組織」

谷本隆之

日本中世の商人組織の一形態である「座」は、戦国期になると衰退に向かうとされる。一方で、座の所見自体はむしろ戦国期に増加するとの指摘もなされている。本報告では長坂口紺灰問屋座を主たる分析の対象に据え、戦国期京都における座の成立の背景を、権利所有の側面に注目して論じた。

第一章「紺灰座の成立」では、『壬生家文書』と『佐野家文書』に残る紺灰座関係史料を概観し、紺灰座が永正十四年（一五一七）の座中法度制定によって成立することを指摘した。

第二、三章では、紺灰座が第一章で見たような道のりをたどった理由を、権利所有の変質から説明した。まず第二章「紺灰問屋の権利所有」では、紺灰問屋の営業権所有のあり方を分析し、特定の営業の場と結びついていた営業権が応仁の乱による京都の空間構造・流通構造の変化によって特定の場から遊離し、営業権を所有する者が任意の在所で問屋営業を営むことができる権利（「問屋職」）へと変質したこと、このような権利所有の変質は文書主義の浸透によって可能になったことを明らかにした。

つづく第三章「所有と組織」では、前章で指摘した権利所有の変質が、紺灰座という組織の成立の要因となったことを論証した。まず紺灰座の成立へ向かう動きが生じた永正期には、乱からの復興にともない新たな問屋営業の場が形成され、そのことが営業権の所有をめぐる混乱をもたらししたこと、紺灰座がそうした混乱の收拾を意図して結成されたことを指摘した。そのうえで紺灰座の構成員の来歴を検討し、座に属した問屋たちも座の特権を脅かした座外の勢力と同様に乱の前後に京都へ進出した新興勢力であったことを明

らかにした。

紺灰問屋たちをして座の結成に向かわせた要因は、応仁の乱による破壊とそこからの復興にともなう、営業権所有の変質・混乱にあった。座の成立過程とは混乱した権利所有に正統と非正統の線を引き、権利所有の安定化を図る過程に等しい。しかし、その線は旧来の勢力と新興勢力との間に引かれるものではなく、同じ土俵の上に立つ新興勢力たちの間に恣意的に引かれるものであった。「職」や「座」といった中世的色彩を帯びたものが応仁の乱を経て変質しつつも、歴史的背景のもつ権威を自らの新規事業に継わせようとする新興勢力によって利用され、新たな意味を与えられる。戦国期における座の成立は、上記のような動きの一環に位置づけられる。

（オンライン開催…参加者約五〇名）

第二九一回その1 二〇二三年六月二十九日 担当…特殊史料部門・画像史料解析センター

「近世後期における「考証」「好古」の流行とその影響―幕府関係者と寺社の関わりを中心に―」

小林優里

本報告では、近世後期に流行したとされる「考証」「好古」といった学問・文化的傾向の影響について、学者・知識人とどまらず当該期の社会全体から検討することを目指した。特に幕府の編纂・調査事業で資料調査対象となった各地の寺社の動向を、寛政・文化期の二つの事例から取り上げた。

はじめに、近世後期の「考証」、および編纂・調査事業に関する研究動向を確認したうえで、調査に関わった地域の人びとはあくまでも調査を受ける存在として分析されてきたことを指摘した。

続いて一つ目の事例として、寛政四年（一七九二）に行われた山城・大和における寺社宝物調査を紹介した。知識人が行った「考証」の事例として知られている調査であるが、従来の研究では言及されてこなかった幕府の関与のあり方、および調査を受け入れた寺院の反応や認識について、触留および寺院の史料から分析した。幕府の支配機構を用いて調査が行われ、老中の「引渡上京」をはじめとする巡見の仕組みが援用されていたこと、および幕閣ら

の好古趣味が寺社宝物の把握や修復といった面で影響を与えたとみられることを指摘した。

二つ目の事例としては、文化十二・十三年（一八一五・一八一六）に進められた、鹿島神宮における鹿島文庫再興運動と和学講談所との関わりを取り上げた。文化年間には存在しなかったと考えられる鹿島文庫が当該期の『和学講談所御用留』に登場する矛盾を指摘したうえで、鹿島神宮大宮司家に伝来する史料を主に用いて文庫再興運動の経緯を検討した。検討の結果、社中での主導権を握るために幕府の後ろ盾のもとでの文庫再興を目指す大宮司と、鹿島神宮の古文書・書物を調査したい和学講談所の利害が一致したことで、幕府への働きかけが成功し、文庫の存在を既成事実化すべく願書・達書に実態とは異なる記述がなされたことを示した。そして本事例の背景にある、文庫が社中の主導権を握る手段となりうる点や、いわゆる学者ではない大宮司が幕府権威の調達を求めて和学講談所に接触した点が、近世後期の学問・文化の傾向が社会に与えた影響として考えられることを述べた。

以上の検討より、近世後期日本社会の特徴として、「考証」「好古」の流行が、学者ではない人びとにも影響を与え、利益を得るための有用な手段として学問をみる人々を生み出し、いわゆる学者たちの活動とは異なる形で、当該期の学問重視の風潮を下支えすることにつながったと展望できる。また、地域の人びとを受け身の立場のみで捉えるのではなく、より双方向的に学問・文化的傾向の影響を評価する必要があるといえる。（オンライン開催）

第二九一回その2 二〇二三年七月一三日 担当…特殊史料部門・画像史料解析センター

「幕末期関東における火薬流通の構造と海防強化」

菊地智博

幕末期の海防・軍制改革の民衆社会への影響を明らかにするため、弘化・安政年間の関東における火薬の市場流通構造の変容と、幕藩領主による調達との関係を検討した。

まず、上州の火薬商人茂木甚右衛門が残した史料から、弘化・嘉永期の火薬流通構造を検討した。当初の納入先の中心は海防を担当する忍藩であった。

しかし次第に取引先には中小幕臣、諸藩家臣が多出する。取引は小口だが、嘉永三・四年にかけてその合計は忍藩を凌駕する。嘉永二年末の海防強化令がきっかけとなり、武家屋敷で銃砲稽古が増加、武家人口の大半を占める中小武家による個別的な調達が江戸に火薬市場を生んだのである。

甚右衛門が依拠したのは、従来から上州に存在した硝石流通構造であった。山方に存在する「硝石製人」は「農具」である在村鉄砲向けの火薬需要を支えていた。その技術は徒弟関係等によって継承され、ゆえに硝石の製造技術と流通は山方に偏在した。この時期の武家への火薬供給は民間に育まれたこの構造に規定され、江戸と山方が直結する形となった。

ペリー来航後、江戸では火薬価格が高騰、台場担当藩などは近郊の水車を借り火薬を製造した。しかし財力のない中小武家はやはり商人らに供給を求め、江戸に多数の新興火薬商人が出現、近郊の水車持百姓には自ら火薬を調合・卸売するものも現れる。さらに近郊地域での硝石採取も盛んとなる。こうして江戸近郊が火薬生産地帯へ転化する一方、従来の産地である秩父や上州の商人も技術的優位によって依然として直接江戸火薬市場に参入した。

弘化・安政期、武家需要増加を奇貨に、在方の有力百姓や江戸の商人が、市場統制なき新興の火薬市場に参入した。これはまさに近世後期における経済発展で関東に蓄積された資本が市場空白に流れこんだものであった。また火薬需要の形成には中小武家の個別の調達行動が大きな役割を果たした。軍制改革・政治史研究において、数的に多数を占める彼らの動向を検討することの必要性を指摘できよう。

（ハイブリッド式開催…参加者約四〇名）

第二九二回その1 二〇二四年三月二五日 担当…古代史料部門

「近世日本の「複合的構成」と公のゆくえ」「付論 家についての若干の考察」

杉本史子

メイン報告では、近世日本の統治構造の特質と公のありかたを考察した。ここでの「複合的構成」とは、近年主に西洋史で用いられている「複合国家」とは区別される構成のありかたを示す用語である。

メイン報告では、複合性を、単に権力分散とそのコントロールとしてみるのではなく、公私のありかた、自他・対外認識、世界観の問題などに密接に関わっていたことを論じた。

第1節では、複数の「公儀」とそれを編成する『公儀』の特質について述べた。第2節では、判決権力（「公儀」・訴訟主体・訴訟主体を支配する権力（「公儀」）を垂直方向に編成しようとする方向性とその矛盾について指摘した。第3節では「公議」の登場と「公儀」の退場の問題を、海陸関係の変容のなかで叙述した。

「付論」では『大日本維新史料類纂之部 松平昭休往復書翰留 一』からみた大名家の特質について述べた。

（ハイブリット式開催…参加者七〇名）

第二九二回その2 二〇二四年三月二十五日 担当…古代史料部門

『市中取締類集』『放刑評議之部』その他

鶴田 啓

『市中取締類集』（以下、『市中』）は、江戸幕府の町奉行所が、天保十二年に始まる天保の改革とそれ以降の江戸の行政に関する書類を部類別に整理編纂したものである。本報告では、その内「放刑評議之部」に収める老中の諮問と評定所一座の答申を扱う。ただし一部「無宿片付之部」も参照する。

「放刑評議之部」は、『市中』の他の多くの冊が具体的な政策の実施過程の記録であるのに対して、「放刑」（追放刑）という刑罰自体の再検討が主題になった点に特徴がある。それにより、諮問を行った老中水野忠邦や答申をした評定所一座（寺社奉行・町奉行・勘定奉行）の刑罰制度についての認識をうかがうことができる。収載文書の年代は概ね天保十三年七月から十四年七月までであるが、内容的には十二年十一月まで遡る。

水野忠邦は評定所一座に対して天保十二年十一月、十三年七月頃、十四年二月と三度の諮問を行い、また十四年七月にはそれまでの論点を整理した「覚」を示している。このように諮問が繰り返されたのは、水野の満足行く答申がなかなか得られなかったからに他ならない。第一の諮問は、「追放刑は旧来の御仕置ではあるが、犯科の者たちの場所を構う迄で改心させる処

置になっていない」「追放になれば自身の生産を失うだけでなく、故郷では人別が減り荒地等が出るのではないか」といった認識のもと、「今後追放・遠嶋の刑を改め外に相当の御仕置はないか」「これは『御定書』にも関係するので特に御改革ということではなくて、將軍様のご意向がどうであるかを考慮し、御仕置を改めるように評議して上申せよ」と命じた。これに対する評定所一座の答申は、天保十三年七月に出された。時間を要したのは、構成員間の意見調整に難航した事情もあったようである。（第二の諮問中に「もし相互に異論等が有り一定し難いこともあれば銘々の考えを各通で申し聞けよ」とある。）答申は長文であるが、幕府の刑罰に関する経緯と運用の説明に多くを費やしており、結論としては、「御定書」を見るに遠嶋・追放に換える当する刑名は無い」とする。そして今後の取り計らいとしては、従来の仕方を一定程度厳罰化しながら継続することを基本とする。

これを受けた水野は第二の諮問を行った。内容から第一の答申提出から遠くない時期と考えられる。先の答申を「偏に『御定書』にのみ拘泥し更に御主意が貫徹しない評議」と非難した上で、「古今の律令等を熟覧勘弁評議すれば追放・遠嶋に換えるべき刑も有るのではないか」と求め、構成員間の調整が難しければ銘々各通でも構わないとした。対して評定所一座は、同年十一月から十二月にかけて奉行ごとに上申書を提出した。町奉行上申書（十一月三日）は、人足寄場を追放刑に代わる徒刑場とする意見で、追放刑の軽重と人足寄場労役年月の長短を対応させるなど、具体的な仕方を述べていた。遠嶋に代わる刑としては佐渡へ送っての労役を提起した。勘定奉行上申書（十一月）は、「諸国へ寄場を取り建て手業等をさせる上は、これから追放を申し付ける者も右寄場へ差し遣わし」と十一月十一日触の内容を前提に、罪に応じた年数を定めて寄場で働かせ、罪状に拘わらず年数後は平人として帰住等を申し付ける積り、遠嶋に代わる御仕置としては諸国銀山・銅山に送り使役し、武家・出家その他身分有る者は従来通りとした。寺社奉行上申書（十二月）は、『御定書』完成までの経緯と追放刑の由来について長々と述べた後、追放刑の者は刑名はそのまま荒地起返しの場所へ送り、遠嶋者も刑名はそのまま佐渡水替人足に送り、武家・出家の類は従来通りの扱いとした。

これらの上申を受けて天保十四年二月に第三の諮問（箇条書きの老中書取）

が出された。内容は、①百姓・町人は生国の寄場へ送り年を定めて労役させる。②御家人は江戸の寄場で使う。③出家・社人は生国の寄場で使う。④武家の家来は領内の寄場へ送る。⑤遠島の方は佐渡に寄場を作りそこで労役させる。⑥追放刑（寄場送り）となった者の家族が離村離散しない方策を検討せよ。そして⑦兎角土着の別人別が減らず無宿が発生しない良法はどのような方法が適当か、篤と評議して上申せよ、とした。これに対する評定所一座の答申は、袋上書の文言および町奉行上申書（後述）の存在から、五月後半から六月前半の時期に出されたようである。袋上書からは勘定奉行二名が案文を作成し寺社奉行と町奉行に回したことが推測され、また掛紙抹消・文章差替の箇所が目立ち、調整が難航したことがうかがえる。訂正後の文面に沿って簡条ごとの内容を見てゆくと、①百姓・町人は生国の人足寄場へ送る。万石以上の領分出身者はその領主（領主寄場）へ引き渡すが、万石以下等の場合は江戸の寄場へ入れる。年が立てば元の居町・居村へ引き渡す。②武家の分は、一旦従来通り追放申し付け、もし御構の場所へ立ち入った場合は百姓・町人同様に申し付ける。③出家・社人は武家同様一旦従来通り申し付け、御構の場所へ立ち入った場合は百姓・町人同様に申し付ける。④武家の家来も同様。⑤遠島の方は佐渡に寄場を作りそこで労役させる。ただし武家・出家・社人等は前簡条の趣旨で従来通りとする。⑥百姓・町人の追放刑に付随する闕所は従来通りとする。⑦武家・出家等は前条の通り一旦は追放とすべきである。なお、これらにつき南町奉行鳥居忠耀は納得できない点があるとし、北町奉行阿部正蔵と相談の上六月十三日連名で上申書を水野忠邦へ提出した。異論は百姓・町人生国へ引き渡しの一部簡略化（便宜的取り扱い）、武家等への一旦追放申し付けは不要とする点などであるが、詳細は割愛する。

ついで水野は天保十四年七月にこれまでの議論を整理して簡条書にまとめた「覚」を評定所一座へ渡した。各簡条の末尾には、この方針で行くと決めたもの（「可然候」等）と、今一度確認を求めているもの（「取調可被申聞候事」「今一応評議致し可被申聞候事」「差支も有之間敷哉之事」等）とがあり、一座からの再上申を待つて実行に移すつもりであったようである。しかし上知令以後水野の立場は悪くなり、再上申は出されず、追放刑を改める総合的な政策は打ち出されないままに終わったと考えられる。

こうした議論の顛末を知らない大名・旗本や遠国奉行・代官にとっては、天保十三年と十四年に出された触が幕府の方針であった。「無宿片付之部 無宿片付方旧里帰郷之部」には、弘化二年十二月から四年六月にかけての老中阿部正弘と評定所一座とのやりとりを収める。評定所一座は、江戸の無宿が減少したことを理由に今後は天保十三年十一月触以前の取り扱いに心得よとする触を出す案を上申したが、阿部の「最早その儀に及ばない旨を触れば自然取締の弛みにも成るのではないか」という判断により、遠国奉行へ取扱指針の達書を出すに留めることになった。（なお、大名等から個別の問い合わせがあった場合、領内に新規寄場取建には及ばずなどと回答している。）（大会議室対面とZoomハイブリッドで実施。Zoomでの参加者六〇名）

第二九二回その2（二〇二四年三月二八日 担当：古代史料部門

「禁裏・公家文庫研究」プロジェクトの成果と未来」

田島 公

先ず、「禁裏・公家文庫」研究の始まりと展開」として、一九九八年度から二〇二一年度まで行った五回二十二年間に及ぶ大型科学研究費（基盤研究（A）・学術創成研究費・基盤研究（S））と二〇二〇年度から五年間の予定で始まった概算要求事項のプロジェクト（「天皇家・公家の「知」の体系としての文庫宝蔵研究拠点創設」の概要と、科研費や研究プロジェクト関係の刊行物など研究成果を列挙した後、「1 禁裏・公家文庫収蔵史料の個別研究の成果」と題して、自身の①東山御文庫本・②陽明文庫本・③三条西家本・④岩瀬文庫所蔵柳原家本・⑤壬生家本に関する研究論文を示した。そして、「今後行うべきこと」として、近年、急速に公開されている古典籍資料などのデジタル画像を駆使し、禁裏・公家文庫収蔵古典籍の善本を活用したより優れたテキストの作成に基づいた、従来の史料解釈を覆す、高いレベルの研究の必要性を述べ、更なる禁裏・公家文庫の「家分け」のデジタル画像（例えば、宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵壬生家本、京都大学総合博物館所蔵勧修寺本・壬生家本、京都御所東山御文庫所蔵禁裏文庫本、公益財団法人陽明文庫所蔵近衛家伝来本など）の公開の促進の必要性を指摘した。更に、デジタル画像の大量の公開にも関わらず、未だ十分に使いこなせない研究者が多く、院生・

学生への拡がりはこれからである現状を踏まえ、禁裏・公家文庫の全容を理解してもらうためには、目録学・文庫史を総合した研究書や各家分けごとの目録の公開（現状の目録の他、近世の目録も含める）も必要であること指摘し、最終的には、禁裏文庫・親王家文庫・主要宮家文庫の近世や近代の、整理や解体以前の蔵書目録の分類や配列に復元したデジタル画像によって研究を行うことによって、個別の史料のみならず、文庫全体の研究、「知識体系」の研究を行うことが可能となりうることを指摘し、そしてそれは、近年、外国人からも注目される日本列島の様々な「文化」に大きな影響を与え、源流の一つともなった、天皇を頂点とした公家社会が育んだ様々な文化の諸相の更なる研究の進展にも繋がることから、中世後期や近世の研究は勿論、史料的な限界によって、希望を失いつつある古代や中世前期の研究に希望を与える基礎研究、生成系AIには出来ない研究を行う為にも、公開されている禁裏・公家文庫収蔵古典籍・古文書のデジタル画像やその目録学的研究・文庫史研究の成果を活用し、既存の平安・院政期、中世前期の史料の善本を利用、組み合わせる方法があることを指摘した。

次に「2 禁裏・公家文庫研究進展の可能性」と題し、禁裏・公家文庫研究の成果を踏まえ、今後の研究の進展の可能性がある研究分野として、近世前期の善本や未翻刻史料を平安時代史研究に利用する一例として、洞院家旧蔵本を近世前期に写した禁裏本『外記政』を取り上げた。まず、「一 洞院家旧蔵本とその伝来」と題して、近年解明された洞院家旧蔵本の伝来と、古写本を中心とした京都御所東山御文庫本・国立歴史民俗博物館所蔵高松宮家伝来禁裏本・陽明文庫所蔵近衛家伝来本と『洞院家記』（『洞院家廿巻部類』・『洞院家六巻部類』）との対応関係を解明する同定作業の概要を示した。そして、「二 京都御所東山御文庫所蔵の二部の『外記政』」では、対応する古写本は見出せていないが、近世前期の新写本が存在する、『洞院家廿巻部類』第十巻所収『外記政』と内容が同じある、①東山御文庫所蔵『外記政』一冊（勅封四五―一二）と②東山御文庫所蔵『外記政』一冊（勅封四五―一三）所収『外記政』を検討対象として紹介した。まず、①は、『外記政』・『同雨儀』・『法申事』・『三省申政事』・『二省請印位記事』・『諸國使申返事』・『治部請印度縁事』・『外記政畢有急事』・『中務省渡日事』・『上卿着侍從所益酒事』・『南

申文事』・『内印事』・『侍從所』・『補侍從所々監事』・『御記』（『清慎公記』・藤原實頼の日記）・『補諸社祢宜・祝等事』・『補定額寺別當・三綱事』・『補諸使才伎長上事』・『請内印雜事』・『請外印雜事』で構成され、『御記』より以前の本文の年紀を見る限り、十世紀前半迄にまとめられ、その後、勘物として『西宮記』・『北山抄』等が書き込まれ、その下限は寛弘四年（一〇〇七）五月二十九日であること、①の直接の親本は、虫損のある中世書写の洞院家伝来の写本であり、近世前期に後西天皇が洞院家旧蔵本を書写させたこともあって、書写は丁寧であるが、誤写や虫損箇所を空白にして書写されているため、そのままでは、文意が読み取りにくいものの、『西宮記』・『北山抄』・『江次第』によって補える部分があるが、全体として、特に『北山抄』によって正しく補える傾向があることを指摘した。次いで、②は、①とほぼ同内容だが、虫損や脱文の状態から、①の別本を書写したものと思われること、①に比べ脱文が極めて多いが、虫損が少なく、また最後の部分に、①にはない十六条分ほどが残っており、貴重であること、①・②の両者の写本を相補うことにより、洞院家旧蔵の『外記政』の原本の復元に近づくことが出来ることを指摘した。

結論として、①は洞院家旧蔵本を書写した禁裏本で、前半部分の『外記政』などの次第は、藤原北家小野宮流の藤原実頼（九〇〇―七〇）撰の儀式書を書写したものである可能性が高く、その説は、同じ小野宮流の藤原公任撰『北山抄』の『外記政』に引き継がれたのではないと考えられる。そうすると、①は『西宮記』以前の、十世紀の外記政の実態を示す重要な史料であると想定される。また、こうした儀式書に引用される「御記」が実頼の日記『清慎公記』であるのは、当然のことで、本書の下限の年代である十一世紀初めころに、実頼撰の『外記政』次第に、外記政に関連する記事を『清慎公記』より書き抜き、更に『北山抄』や『西宮記』の関連記事を付したものである可能性が高いことも指摘した。因みに、桃裕行『北山抄』と『清慎公記』（森克己博士古稀記念『対外関係と政治文化』一九七四年、桃裕行『古記録の研究』上（『桃裕行著作集』4 思文閣出版 一九八八年再録）によれば、公任撰『北山抄』に「私記」と注記された引用部分があり、これは『清慎公記』からの引用であると考えられ、二つの東山御文庫本『外記政』は、『西宮記』

以前の、十世紀の外記政の実態を示す貴重な史料かと思われる。(本報告の後半部分は、二〇二三年一月三日に京都大学芝蘭会館別館行われた京都大学・「読史会」で行った、「禁裏・公家文庫研究の一齣―洞院家旧蔵本と東山御文庫所蔵禁裏文庫本『外記政』を例に―」と題する報告の再考である)

(ハイブリッド式開催 参加者九六名)

第二九二回その2 二〇二四年三月二八日 担当…古代史料部門

「正倉院文書の機能・形態・保管情報をめぐって―『正倉院文書目録』の編纂から―」 山口英男

本報告では、筆者の編纂担当書目の一つ『正倉院文書目録』(『目録』)について、正倉院文書の史料学的検討から何が明らかになり、また明らかになりつつあるのか、現時点で整理を試みた。

正倉院文書は、東大寺の写経所に残された業務上の書類が奈良時代の終り頃に正倉院宝庫の中に置かれ(正倉院文書の原状)、そのまま現在に伝わった総数一万点を超えるといわれる大規模史料群である。天保年間から明治にかけて整理され、現在は正集・続修・続修後集・続修別集・塵芥・続々修に類別され、合計六六七巻五冊からなっている(正倉院文書の現状)。史料編纂所編『正倉院文書目録』は、一九八七年三月に第一冊(正集)を、以後、第二冊(続修)・第三冊(続修後集)・第四冊(塵芥)・第五―八冊(続々修一―四)と進み、二〇二三年三月に第九冊(続々修五)を刊行した。これまでの収録数は三八〇巻と三冊である。

正集から続修別集までの整理は、正倉院文書の原状から注目すべき個体を抜き取り成巻する方法で行われ、続々修は、それ以上の抜き取りは行わず、その時点のまとまりを崩さずに成巻したとされる。塵芥は、状態が悪くて開巻不能であったり、巻子のまま破損したりして、上記とは別扱いとなっていたものを補修・整理したものである。こうした整理の状況から、正倉院文書を研究利用する際には、断簡をもとの書面の形へ復元する作業が不可欠となる。そのための情報を中心に原本調査から得られた所見を公表することが『目録』編纂の大きな目的である。

『目録』刊行は、正倉院文書の現状にそって類別順に進んでいる。この結果、上記のような整理の対象や方法の相違に応じて、『目録』の記述内容はいわば徐々に成長して今に至っている。第一・二冊は、正集・続修に一次文書の律令公文が多数含まれることなどから、断簡の接続に関する検討が中心となった。第三・四冊では、写経所文書の割合が増加するのにもない、業務進行に応じて書面を貼り継いで利用する継文を構成する事例が増加し、業務書類として複数回の利用履歴を伝える史料学的痕跡の記述が拡充された。この傾向は第五冊以降も続いている。

『目録』刊行が開始された頃、正倉院文書研究者の合言葉は「正倉院文書は接続する」であった。現状で、もとの配置から離れた断簡であっても、原状はほとんどが貼り継がれた形であったに違いないと想定されていたのである。しかし、調査が進むにつれ、一通一通の形のまま保管されていた書面も決して少なくないことが段々とわかってきた。そのきっかけが、紙面に残る縦折目(筋目)の中に「巻き畳み」に由来するものがあるとの認識への到達であり、これは第五冊から記述に加えられた(「料紙ヲ巻キ畳ミタル縦折目及ビソレヲ上下ニ半折セル横折目アリ」。こうした書面の多数回利用や保管形態が判明する事例は、原状を伝える部分が多くなる第六冊以降で一層増加した。

古代の古文書全体の中で一定の部分を占める正倉院文書や木簡は、官司で用いられた現用書類・書面が不要となり、廃棄(放置)されたものである。それらがまとまった形で大量に残されていることは日本古代の史料の一つの特徴であり、その分析手法の確立は古代史料学が取り組むべき課題である。その分析は、それらを用いて行われた多次の・多元的な業務の実際をできるだけ具体的に明らかにすることに他ならない。こうした観点から、筆者は「正倉院文書の(書類学)」の立場を提唱した(山口英男「正倉院文書の(書類学)」同『日本古代の地域社会と行政機構』に収録、吉川弘文館、二〇一九)。その認識は『目録』編纂の中から生まれたものである。

書面が果たした役割に関して、『目録』から新たな認識につながった事例は多くある。例えば、経巻の借用に向向く使者は、経巻名などを書き上げた一紙ものリストを携行し、それを持ち帰ったあとは、経巻の出納帳として

ファイルして（貼り継いで）用いるといった業務進行の実際が明らかになった。ほかに、経櫃・帙などに貼りつけられた痕跡のある経巻出納リストや、帳簿に封をして開巻できないようにする作法、巻き畳み痕のある書状の余白ないし礼紙の料紙転用など、種々の様相が浮かび上がってきた。

先に触れた「巻き畳み」に関わる検討の視点を述べると、「巻き畳み」は、その書面が業務の中での時点でのどのような役割を果たしたのか、その利用履歴を分析するためのいわば「補助線」となる痕跡である。「巻き畳み」は、一紙ものなどの書面をコンパクトに扱えるようする形態であり、書面の持ち歩きや保存などの際に行われる。文面の内容、貼継の形態、畳んだ状態と合致する汚れ・傷み、櫃・器物への貼附を示す裏面の糊痕、切封痕など、他の様態との併存状況などとも合わせ考え、どの時点の「巻き畳み」かを検討することで、そこが業務進行を理解する定点となり、書面の履歴がより具体的に見えてくる。現時点では理解困難であっても、事例が増加することで新たな知見に達することが期待できる。

こうした「巻き畳み」の痕跡に、第一（四冊編纂の時点では認識が及んでいなかった。対象の多くが一）数紙を抜き取って成巻された状態であったため、「巻き畳み」の判断が困難であったことが大きな理由と思われる。当時の調査で折界ないし實目痕と判断した縦の筋目様痕跡のなかに、「巻き畳み痕」が含まれていることは十分ありうる。その見直しによつて、書面が示す業務実態の理解をより深めることが可能であろう。そして、これは「巻き畳み」事例に限ったことではない。書面に残された様々な痕跡に新たな視点を向けることで、史料の内容理解のための情報がこれからも拡大していくことは間違いない。

（史料編纂所大会議室・オンライン配信併用 参加者九五名）

国際研究集会

国際シンポジウム「モノとしての東ユーラシア世界の公文書」の開催

二〇二三年八月九日

主催…東国大学校文化学院、共催…東京大学史料編纂所
二〇二三年八月九日、韓国にある東国大学校のソウルキャンパス多郷館セミナー室にて、国際シンポジウム「モノとしての東ユーラシア世界の公文書」を開催した。本所は二〇二二年一二月に、東国大学校文化学院との間で、両機関による学術交流・研究協力の推進を目的とする研究協定を結んでおり、この国際シンポジウムはその一環として、東国大学校文化学院が採択されているHK+事業「東ユーラシア世界における物品の文明・文化史」による研究事業として開催されたものである。

また、本所の共同利用・共同拠点による研究事業の一つとして推進されている、一般共同研究「史料編纂所所蔵明清中国公文書関係史料の比較研究」（研究代表者：渡辺美季氏）では、韓国など東アジア所在の明朝・清朝の発給文書に関する調査・研究が続けている。今回の国際シンポジウムには、この一般共同研究からも連携して成果を報告することとなり、東ユーラシア世界において歴史上不可欠の「モノ」として存在した各国の公文書に着目し、その様式・形態や作成・発給過程について広く学術的に比較・検討する趣旨で開催された。

当日は、まずHK+事業団長の盧大煥氏（東国大学校・教授）より、開会の挨拶があった。引き続き、渡辺美季氏（東京大学大学院・教授）より「東ユーラシア世界における明清公文書」という題目で、いま進めている一般共同研究の成果報告と今後の展望が示された。次の須田牧子・黒嶋敏（ともに本所准教授）からの報告「東京大学史料編纂所所蔵の明代関係史料」では、本所の概要と所蔵している明代関係文書、およびその研究状況が説明された。以後、荒木和憲氏（九州大学・准教授）「朝鮮時代公文書の押印方法―東アジア古文書学の視点から―」、中井勇人氏（東京大学・大学院生）・鍾周哲氏

（東京大学・大学院生）「満文原稿」における満文勅書の文面とその淵源」、林慶俊氏（東国大学校・助教授）「市立函館博物館所蔵満州文詰命について」、南政玖氏（東国大学校・助教授）「二六・一七世紀、フィリピン総督と明の地方当局を往来したスペイン語文書について」という報告が続けられた。

各報告は日本語・韓国語それぞれの通訳が入るとともに、関連する研究者からのコメントを述べる時間も設けられており、須田・黒嶋報告には劉序楓氏（中華民国中央研究院・研究員）から、南政玖報告には岡本真（本所准教授）から、それぞれにコメントが出された。

報告とコメントの終了後、全体での討論となったが、参加者からは原本史料の精緻な熟覧・観察によって数多くの歴史情報を引き出している研究現状について、その成果を重視する指摘が相次いだ。また、こうしたモノが持つ歴史情報に対し、これまでの文献史学から導かれてきた制度的な理解との乖離について、さらなる検討の余地があることも指摘された。討論は白熱し、予定していた終了時間を大幅に過ぎた後、徐仁範氏（東国大学校・教授）より閉会の挨拶があり散会となった。

新型コロナウイルスによるパンデミックを経て、韓国の学会もオンライン開催から対面開催に切り替えられつつあり、今回の国際シンポジウムは完全対面での開催となった。当日は韓国内の東洋史研究者を中心に、四八名の参加を得た。このうち日本人は六名であった。

なお、この国際シンポジウムの開催にあたっては、事前準備や各種の手配も含め、東国大学校文化学術院HK+事業団「東ユーラシア世界における物品の文明・文化史」の関係者の皆様より、多大なるご高配を得た。あらためて御礼を申し上げたい。

（黒嶋 敏）

「維新史料研究と国際発信」

二〇二三年一月一日

二〇二三年一月一日（月）、本所と本所維新史料研究国際ハブ拠点形成プロジェクト（以下維新ハブプロジェクト）との主催、JSPS人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業とJSPS科学研究費補助

金基盤研究(A)「在外日本関係史料の調査と貴重史料の研究資源化による維新史料研究国際ハブ拠点の形成」、同じくJSPS科学研究費補助金金基盤研究(B)「日本近世史料学の再構築―基幹史料集の多角的利用環境形成と社会連携を通じて」との共催により、国際研究集会「維新史料研究と国際発信」を開催した。二〇一九年度から開始された維新ハブプロジェクトでは、本所維新史料網要データベースの英訳化と、そのための歴史用語・史料用語の英訳グロッサリー研究とを実施している。この研究集会は、維新ハブプロジェクトの最終年度を迎えるにあたり、同様のタイトルで過去四回開催した国際研究集会における翻訳をめぐる議論を踏まえて幕末維新期の史料について改めて検討するとともに、プロジェクトの成果を発信し、幕末維新期の史料について海外研究者の視点から意見を得るために開催したものである。なお、本研究集会は、予断を許さない感染症状況を考慮し、ウェブ会議システムZOOMを用いたオンライン開催とした。

この研究集会では、イェール大学教授のダニエル・ボツマン氏と東京大学名誉教授の保谷徹氏とに幕末維新期の史料についてご報告いただき、維新ハブプロジェクト開始当初よりご助言を賜ってきたカリフォルニア大学サンタバーバラ校教授のルーク・ロバーツ氏、及びウエイク・フォレスト大学教授のロバート・ヘリヤー氏お二人にコメントを頂戴した。司会は本所准教授の小野将氏が担当し、小野氏による開会の挨拶と本郷恵子所長の挨拶が行われた後に、各報告が行われた。その後、ロバーツ氏・ヘリヤー氏からコメントが寄せられ、最後に報告者からの応答が行われた。

ボツマン氏からは、イェール大学が所蔵する山田朝右衛門記録の来歴と史料の性質、そしてそこから見える幕末維新期の山田朝右衛門をめぐる状況・環境の変化について報告があり、江戸幕府の下での平均的な死刑執行数は、西欧で最も死刑執行数の多かった十八世紀ロンドンと比較しても多く、明治維新後はさらに増加している可能性がある事を指摘した他、山田朝右衛門家に特権的に認められていた死体から胆のうを取り出す権利が、西洋医学の隆盛と人体解剖要求の高まりから脅かされる様子や、山田朝右衛門と一体となつて死体の二次利用の恩恵にあずかっていた牢役人の様子を明らかにした。

保谷氏からは、維新ハブプロジェクト立ち上げ時の本所所長という立場を

踏まえて、経緯と取り組みの成果、今後の課題を概括した後、編纂史料である『復古記』や「大日本維新史料稿本」から零れ落ちた史料から両者の記述を見直す必要が明らかになる事例として、明治新政府による年貢半減令の発出と撤回の経緯が「復古記原史料」から明らかにされていることや、仙台藩の奥羽列藩同盟への参加経緯の見直しが進んでいる状況が紹介され、いまだ幕末維新史研究において大きな影響力を持つ戦前の編纂物が示す「王政復古史観」の意識的な相対化が必要であることが指摘された。

コメントのロバーツ氏からは、ボツマン氏報告に関して、江戸幕府で処刑を担った山田朝右衛門から近世日本における処刑を考えるうえでは、各大名家における処刑のあり方や大坂・長崎といった江戸以外の主だった幕府支配地における処刑と江戸での山田朝右衛門が関わった処刑とを比較・検討することで、軍事国家としての近世日本の姿を描けるのではないかと、山田朝右衛門門下には各大家からも入門していることから、山田朝右衛門の処刑から全国的な政策を見通せるのではないかと、イギリスとの比較においては、軍隊内部で行われていた処刑もあわせて考える必要があるといった指摘があった。

保谷報告に対しては、維新ハブプロジェクトの前提となった蓄積や、その上に積み上げられたプロジェクトの成果を高く評価したうえで、維新史料網要英訳やグロッサリーの蓄積といったプロジェクトが構築した幕末維新史研究国際化の基礎について、特に海外の大学院生が参加・活用できるような国際共同研究の組織・構築が必要で、それが実現すればプロジェクトの意義がより大きくなること、またいわゆる王政復古史観に基づいて編纂された『維新史料網要』の英訳から漏れている史料や、戦後新しく発見された史料、そしてそれらに基づいて描きなおされてきた幕末維新史研究や、現代の研究者の関心へ、どのように対応し、また国際的にも活用できるようにしていくかが求められるという今後の課題が示された。

ヘリヤー氏からは、維新ハブプロジェクトの成果は重要でコロナ禍で日本へのアクセスが制限されていた時期において貴重な成果であったものの、維新史料研究の国際化そのものについては、日本国外の歴史研究者の間では『維新史料網要』に対する関心が低いという問題点があり、そのような状況下で特に関心を持っているグローバルスタンダードの分野の研究者に訴

求していくことから国際的な活用を図っていくことが望ましいのではないかと、この指摘・助言があり、また自身が計画している研究成果発表において維新史料網要データベースの活用を行うつもりであり、広報には今後も協力していくとの発言があった。

これらのコメントに対して、まずボツマン氏からは、ロバーツ氏の指摘に対して、江戸以外での処刑に関する史料・記録が乏しく、比較が容易ではないこと、イギリスとの比較については軍隊を考慮していなかったこと、比較という意味ではフランス革命時の処刑者数は日本を凌駕しており、比較の難しさを実感していること、指摘全体については今後の課題として引き続き考えていきたいとの返答があった。保谷氏からは、プロジェクトへの評価・助言に対する感謝と、今後の活用については在職教員が主導していくことになるが、退職教員である自身やほかの研究者を巻き込む形で新たに組織・計画してほしいと考えていること、さらに成果の発信と活用への努力がますます求められていると考えているとの返答があった。

最後に、司会の小野氏から、二報告について、幕末維新期の社会や人間の実態を史料に基づき具体的に明らかにしたもので、一次史料に立脚して歴史を描いていくことの重要性が改めて示されたものであり、王政復古史観の枠組みから外れた史料が出てきたときにどうするか、という幕末維新史研究者の内なる障壁への向き合い方を示す報告であったと、本研究集会の総括があった。

維新ハブプロジェクトが英訳化を実施している維新史料網要データベースは、もともと日本国内においても幕末維新期の詳細な政治年表として日本史研究者に限られない幅広い人々に活用されてきたものである。今回の国際研究集会では、一次史料とそれに基づく研究の重要性が改めて示されたことで、本データベースの英訳事業によって期待される英語圏における活用について、また維新ハブプロジェクトの成果を展開していく方向性について、幕末維新史研究のみならず、日本史研究自体も深化させ、国際化という点でも議論を活発化させるためにも、英訳例を学会に広く提示するだけでなく、そこから一次史料に基づいた研究を展開し、また海外の研究者に訴求していくという今後の課題を改めて認識することができた。さらに今後の翻訳作業と

広報における注意点をも得ることができ、最終年度を迎えた維新ハブプロジェクトの今後について、多くの示唆を得た。

なお、新型コロナウイルス感染症の先行き不透明な状況から、今回の研究集会も発表者や主催者は一ヶ所に集まったものの、前年に引き続き、参加者にはウェブ会議システムZOOMによるオンライン参加をお願いすることとした。年末の平日午後という忙しい時間帯にも拘らず、三七名もの参加者を得ることができた。

最後に、五年間にわたる本プロジェクトや毎年の国際研究集会にご協力くださった方々にこの場を借りて御礼申し上げたい。これまでの本プロジェクトの成果については、二〇一九年度から二〇二三年度の所報に掲載されているほか、蓄積してきたグロッサリーについては、日本史用語翻訳グロッサリー・データベースから順次公開中である。同データベースは、二〇二四年三月末現在、史料編纂所ホームページ「所蔵史料紹介」デジタルギャラリーからアクセス可能である。そのほか、本プロジェクトが進めてきた史料編纂所所蔵幕末維新期貴重史料のデジタル化においては、「史談会本」の全冊と「外務省引継書類」の一部が、史料編纂所所蔵史料目録データベースから公開されている。是非ご活用いただきたい。

(立石 了)

東京大学ニューヨーク・オフィス (UTokyoNY) イベント

「日本の歴史を伝え、つなぐ——東京大学史料編纂所のこれまでとこれから——」

二〇二四年二月一五・一六日

本イベントは東京大学史料編纂所・AI等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業ユースケース創出課題「異分野共創による史料学DXの確立」の主催により開催された。

東京大学史料編纂所は、一五〇年に及ぶ史料の調査・収集と研究、基幹史料集の編纂・出版、蓄積した学術情報と研究成果の公開・発信を国内・海外で行ってきた。しかし、国際的な認知度や理解はまだ不十分な現状にある。今回は、日本の歴史を伝え、つなぐ——東京大学史料編纂所のこれまでとこ

れから——と題して、対面とZOOMによるハイブリッド形式で実施し、渋谷綾子特任助教の司会の下、以下の報告を行った。

尾上陽介「趣旨説明」

金子 拓「東京大学史料編纂所における長篠合戦研究」

高島晶彦「歴史史料修理技術と研究」

本イベントでは、史料編纂所の各活動を紹介するとともに、「落合左平次道次背旗」の修理や「長篠合戦図屏風下絵」の彩色復元模写など、文化財の修復・復元の過程や研究成果について、現地での複製展示も交えて説明した。両日の参加者は現地一一名・オンライン一三七名で、当日の質疑応答も活発に行われた。終了後に実施したアンケートでは、「これまで名前のみ知っていた史料編纂所の一端を具体的に垣間見ると大変貴重な経験だった。報告内容が意義深い。また開催してほしい」という意見も多くあり、海外における本所の成果発信の重要性を再認識するイベントとなった。

(尾上陽介・渋谷綾子)

研究集会

「近世初期における「御国」と「公儀」——永青文庫細川家文書から——」

二〇二三年九月一六日

二〇二三年九月一六日(土)、熊本大学永青文庫研究センター・東京大学史料編纂所主催、JSPS科学研究費基盤研究(B)「日本近世史料学の再構築——基幹史料集の多角的利用環境形成と社会連携を通じて」(JP二二H〇〇六九二)、同基盤研究(C)「永青文庫資料と「くずし字AIIOCR」の活用による一七世紀社会論公儀権力形成史の再構築」(JP二二K〇〇八四二)、同若手研究「日本近世における政教関係の形成と確立」(JP二二K一三〇九〇)、及び熊本史学会の共催により、シンポジウム「近世初期における「御国」と「公儀」——永青文庫細川家文書から——」を開催した。

公益財団法人永青文庫が所蔵する細川家文書は、「和泉上守護家」の古文書をはじめ、確実な自筆文書を含む織田信長発給文書五九通、そして全国的

に屈指の規模を誇る近世藩政史料といった、中世から近世にかけての長期にわたり、かつ内容的にも多岐にわたる、非常に貴重な史料群である。本シンポジウムの主催者である史料編纂所では、長きにわたり本史料群の調査を許され、『大日本近世史料』というシリーズで史料集を刊行し、近世初期の政治研究において様々に活用されてきた。また、同じく本シンポジウムの主催者である熊本大学永青文庫研究センターでは、熊本大学附属図書館寄分の悉皆調査と総目録を作成し、約五八、〇〇〇点に及ぶ全体像を明らかにしてきたうえに、「永青文庫叢書」というシリーズで一〇冊の史料集を刊行し、これまで知られてこなかった新史料を含め、興味深く重要な史料を広く学会に提供してきた。このような、着実な調査の実施と研究の基礎・基盤となる史料集の刊行によって、研究環境の充実が着実に進んできた状況にある。

今回のシンポジウムは、こうした取り組みのなかで蓄積してきた知見をもとに、近世初期の領国支配や幕府・諸大名との関係を検討し、「永青文庫細川家文書」の豊かな世界とそこから明らかになる研究成果とを広く発信して、今後の熊本藩研究や近世政治史研究をより前進させていくために企画・開催した。シンポジウムの構成は、「永青文庫細川家文書」の史料を検討した研究報告二本とコメント、そして報告者からのコメントへのリプライと参加者・報告者間の質疑応答とした。報告は史料編纂所の林晃弘准教授と永青文庫研究センターの稲葉継陽教授が行い、京都大学文学研究科の三宅正浩准教授がコメントに立った。司会は永青文庫研究センターの今村直樹准教授が担当した。また、開催方法としては熊本大学工学部百周年記念館での会場参加とZoomミーティングによるオンライン参加とを併用したハイブリッド開催であった。

研究集会の冒頭では、本郷恵子史料編纂所長からの挨拶が行われたのち、各報告が行われた。

まず林氏による「細川忠利の『公儀御書案文』と近世政治史研究」では、『大日本近世史料 細川家史料』一六巻以降の底本である『公儀御書案文』という史料を検討し、その史料の性格を明らかにするとともに、そこに収録された細川忠利書状案に見ることができる幕府中枢の人物や近隣大名とのやり取りから、幕藩関係や大名間関係、すなわち『公儀御書案文』のタイトル

の「公儀」と、領国支配との関係を明らかにして、近世政治史研究における書状留の有用性を改めて示した。具体的な内容としては、まず『公儀御書案文』の基礎的な情報を示したのち、収録された案文と現存する実際に発給された書状原本とを照合して、基本的に右筆が作成した文書のうち留書に収めるべきと判断されたもの、という『公儀御書案文』に収録される書状案文の性格を明らかにした。そのうえで、『公儀御書案文』に残る注記から、「奥」の空間からもたらされる「御案紙」をもとに記録されるほか、「御案紙」がもたらされずに実際に発給された文書を写したり、忠利御前で作成・発給されたために「御案紙」が存在せずに留められなかったといった、具体的な作成方法を復元した。そして、『公儀御書案文』に収録された書状案文の中から、まず春日局宛書状案を取り上げて、幕府中枢にいた人物との情報交換と細川忠利の意思決定との関係を示した。次に寛永一五年九月一三日付キリシタン高札をめぐる大名間の情報交換と幕府法令の大名領国への浸透のあり方を明らかにした。

次に稲葉氏の「元和・寛永期における「御国」統治と文書・記録 ―ポスト戦国世代の領国支配―」では、永青文庫史料において元和期より「御国」という言葉が頻出するようになり、寛永末期の細川家当主代替わりに際しては「御家」と結びついた「御国家」が家老・奉行衆の奉公の対象として挙げられるに至ることに注目し、「御国」（＝領国）支配の構造、特に「御家」の構成員である知行取家臣層が「御国」の再生産に奉公することを必然化させる統治の構造について、文書・記録の作成・機能という点から考察し、「御国」支配に「御家」の主要構成員が平均的に関与する状況が、奉公の対象としての「御国家」概念成立の基礎的条件であったことを指摘した。具体的には、まず元和七年（一六二二）の細川忠興から細川忠利への代替わりを契機として作成された文書・記録を検討し、忠利が百姓・庄屋層やその利害関係を反映した郡奉行からの上申文書を基軸にして「御国」統治の基礎を把握し、排除することに一定の成功をみたことを示した。次に忠利が参勤して国元不在の時の史料を検討して、国元での奉行衆・家老衆合議での審議とその報告・伺いに対する遠隔地にいる忠利の最終決裁という絶え間ない交渉によって領国支配の重要案件についての意思決定が行われていたこと、さらに奉行所の記

録から、「御国」支配に携わる数十の役職に任命された家臣が主体的に関与する体制が形成され、これが奉公の対象としての「御国」・「御国家」という意識を家臣団に早くから植え付けた要因であったことを指摘した。そして最後に、忠利在国中の史料について、まず上申・裁可文書の分析から、忠利が無下に却下したものはなく、また参勤準備中で一度裁可を停止した際にも、奉行衆や家老衆の要求によって「御国」の再生産に関わる決裁行為を継続させられていたこと、次に口頭命令記録である「奉書」の検討から、「御国」支配上の懸案について惣奉行や郡奉行を中心とした関係者の総意を前提として忠利の裁可が行われていること、また主従制に係る案件でも、「御国」での評価や家中世論が忠利の裁可に影響を与えていることを示した。

コメントに立った三宅氏からは、まず林報告について、『公儀御書案文』の史料性格を解明し、その近世政治史研究での用い方の事例を紹介した意義を高く評価したうえで、『公儀御書案文』の作成段階や収録基準、選別方法の解明という追求すべき新たな課題も示されたことを指摘した。そこで、阿波徳島藩蜂須賀家文書の『草案』という類似した史料を比較対象として取り上げ、控である『公儀御書案文』に対して『草案』は本来下書であったものが徐々に控としての性格を強めていったものということを確認したうえで、同時期のそれぞれの蜂須賀宛・細川宛の史料件数を比較すると『草案』のほうが五〜六倍ほど多く収録されていることを示した。そして、寛永期が武家社会の中で書状が飛び交っている時代であるものの、そのやり取りの相手には偏りがあり、そうしたネットワークを念頭に置きながら当時の武家社会を考えていく必要があることを指摘した。次に稲葉報告について、元和／寛永初期の細川家の家中・領国支配の有様を文書から具体的かつ詳細に提示し、当該期の大名家における政治的意思決定過程を復元したものと評価したうえで、この時期の「藩政」の実態をこれほど詳細に復元できる細川家文書は稀で貴重な事例であることを指摘した。そして、大名家において家老合議を軸とした機構が形成され、また繰り返される飢饉の状況に大名・家臣が危機感を共有し、寛永飢饉を契機として地方支配機構が整備されていくなど、寛永期に近世大名家の政治機構が確立されるという一般的理解に対し、元和期からの事例が提示される本報告をどのように位置づけるべきか、という課

題を提示した。また、細川家文書ほどには復元できなくとも、同様に「藩政」が展開されていたと思しき事例が土佐山内家にあることから、細川家と同様の展開が他の大名家でもあった可能性を示した。さらに、「御国」という言葉が当時どのように認識されていたのか、特に十七世紀半ばに池田光政や藤堂高次が示した認識との関係について、そして細川家の藩政機構における役職・人数などの定着時期と今回の事例との関係といった検討課題や、史料の豊富さから大名家における意思決定構造の推移の具体的復元が期待できる点に触れたうえで、今回示された元和／寛永期の細川家における「藩政」の実態を、中世・戦国段階や十七世紀半ば以降のあり方と比較した時に、歴史の流れのなかでどのような段階と位置づけ、理解すべきかが最も大きなこれらの課題であると述べた。

最後に設けられた質疑応答の時間では、まず報告者からコメントへのリプライがあり、その後参加者からの質問に答える形で進行した。まず林氏から三宅氏へは『公儀御書案文』と『草案』との比較について、稲葉氏からは「藩政」の位置づけや「御国」概念、「御国」意識についてを中心に、それぞれ返答があった。

続く一般の参加者からの質疑においては、まず林報告に対して『公儀御書案文』の性格についてや「公儀」の語が意味するところ、クリシタン高札の目的や本報告での位置づけについて議論が行われた。稲葉報告に対しては、家中世論と細川忠利の意思決定との関係や「藩政」が展開される対象領域、地方知行制との関わりについて議論された。

全体討論では、まずコメントの三宅氏に対して、稲葉報告を時代の流れにどう位置づけるかという問題に関連して、時代の転換期の捉え方についての質問があった。その後、細川家での文書控の蓄積の前提や戦国期・織豊期からの連続性、控文書群の具体的利用例、控文書群の作成・保管の様相、奉行所における文書群蓄積の意味といった文書作成・蓄積に関する議論が行われ、最後に本シンポジウムのテーマに関連して、『公儀御書案文』の「公儀」の語の意味や収められた文書群が「公儀」と分類された意味、「御国」と「公儀」という語の関係をどうとらえるか、について議論が深められた。

質疑の締めくくりとして、コメントの三宅氏からは、二本の報告を聞き、

またコメントを依頼されたことでの新たな発見や検討課題はもちろんとして、質疑の場で提起された「御国」や「公儀」といった史料用語の意味をどこまで考えるべきか、そして他方で当時の人々がどこまで意識して用いていたのかを改めて考えていきたい、林氏からは、約五八、〇〇〇点に及ぶ細川家文書の検討は大変な作業であるものの、今回のシンポジウムで一端が示されたような史料同士の関係性が明らかになり、史料がより活用されていくことを願っている、稲葉氏からは、「御国」支配の体系性の復元はまだまだ不十分である一方で、永青文庫史料は「御国」支配と「公儀」との関連が元和期からどのように展開して十七世紀半ばにつながっていくのかを体系的に追える史料群であることやそれを追求していくという長いスパンの課題を再認識できて感謝している、そして司会の今村氏からは、近世後期の研究者としての観点に立つと、近世中後期にも他大名家とのやり取りの案文集が作成されているように、永青文庫史料は通時代的に検討できる極めて良質な史料群であり、今回のシンポジウムの射程をさらに伸ばして考えていくという課題が示されたように思う、とそれぞれの登壇者から感想が述べられた。

最後に、熊本大学永青文庫研究センター長である稲葉氏から閉会の挨拶が行われ、熊本藩家老家文書である松井家文書に代表される周辺史料群も合わせた、永青文庫史料のさらなる活用や研究の進展、成果発信を誓って、本シンポジウムが終了した。

本シンポジウムは、会場での対面参加者・オンラインでの参加者合わせて一五〇名弱もの参加者を得ることができたうえに、当初予定の四時間を二〇分超過するほど、発表者同士の活発な議論や多くの質疑が重ねられ、大変に充実したシンポジウムとなった。

(立石 了)

シンポジウム「飛鳥宮の儀礼と空間構成」

二〇二三年九月三〇日

奈良県立橿原考古学研究所・東京大学史料編纂所(「天皇家・公家の「知」の体系としての文庫・宝蔵研究拠点創設」プロジェクト)・科学研究費・基盤研究費(A)「東アジアにおける工匠関連史料にもとづく建築生産史の再構築

と技術蓄積・伝播の解明」(研究代表者:東京大学大学院工学系研究科准教授海野聡)を主催として、奈良県立橿原考古学研究所一階講堂にて開催した。講演者・題目は次の通り。参加者は四八名。

第三六八回奈良県立橿原考古学研究所研究集会シンポジウム

「飛鳥宮の儀礼と空間構成」

田島 公(東京大学史料編纂所教授)

問題提起「飛鳥宮」時代の特殊性―「天下」を喪失していた時代―」

西本昌弘(関西大学文学部教授)

基調報告「飛鳥の開発と飛鳥浄御原宮の内部構造」

鶴見泰寿(奈良県立橿原考古学研究所企画学芸部資料課資料係長)

「飛鳥宮の空間構成とその系譜」

田島 公

「飛鳥の王宮と外交儀礼―小墾田宮とエビノコ郭の機能―」

小田裕樹(奈良文化財研究所都城発掘調査部主任研究官)

「飛鳥宮周辺の饗宴施設―ロの字形配置の建物群を中心に―」

海野 聡

「飛鳥宮の空間構成とエビノコ郭正殿の建築学的特質」

討議 パネラー…西本昌弘・鶴見泰寿・小田裕樹・海野聡

コーディネーター…田島公

なお、当日、田島公・海野聡・鶴見泰寿企画・監修、東京大学史料編纂所編「シンポジウム「飛鳥宮の儀礼と空間構成」報告集」東京大学史料編纂所・奈良県立橿原考古学研究所を刊行し、配布した。

(田島 公)

シンポジウム「坊所鍋島家文書を読みなおす―成立期の佐賀藩と江戸幕府―」

二〇二三年十一月一日

佐賀県立図書館と東京大学史料編纂所の主催、科学研究費補助金基盤研究(C)(一般)研究課題「近世初期大名発給無年号文書群の研究資源化―佐賀藩家臣坊所鍋島家史料を対象として―」(研究代表者 小宮木代良) および東京大学史料編纂所共同利用・共同研究拠点特定共同研究「近世大名家臣家史料

の『読み直し』と研究資源化」(研究代表者 小宮木代良)の共催、佐賀大学地域学歴史文化研究センターの後援にて、標記のシンポジウムを、ホテルニューオータニ佐賀(佐賀市)において開催した。

坊所鍋島家文書は、佐賀県立図書館所蔵のおよそ四〇〇〇件からなる大規模史料群であり、佐賀藩成立期に鍋島直茂・同勝茂を補佐した鍋島道虎関係の史料を大量に含む。同図書館は、これまで、当該地域関係の史料の保存・研究と、その成果の地域への還元を事業の柱の一つとして継続しており、坊所鍋島家文書については、一九七〇年～一九八〇年代に、その一部を『佐賀県史料集成』として翻刻刊行、近年は、同館ウェブサイト上のデータベースにおいて、史料画像の公開を開始している。一方、東京大学史料編纂所では、『大日本史料』第十二編(江戸時代初期)編纂の基本史料のひとつとして本史料群を位置づけている。二〇二二年に、佐賀県立図書館のメンバーと、史料編纂所の大日本史料第十二編担当のメンバーを中心として、佐賀大学、佐賀市文化財課、小城市教育委員会、佐賀県立佐賀城本丸歴史館等からの参加者も得て、坊所鍋島家文書研究会を結成した。研究会活動の主な目的は、これまで不十分であった坊所鍋島家文書の年次比定、関係人物の居所確定等のための読み合わせ作業を行い、同文書群のメタデータを充実させることである。本シンポジウムの開催は、現段階での成果の一部を地域に還元するとともに、今後の坊所鍋島家文書の保存・研究への理解を広く得るためのものである。シンポジウムにおける報告内容は以下の通りである。

基調報告 小宮木代良(東京大学史料編纂所教授)

「坊所鍋島家文書研究の意義」

報告① 及川 亘(東京大学史料編纂所准教授)

「鍋島勝茂の佐賀藩継承」

報告② 田久保佳寛(小城市教育委員会文化課副課長)

「初代小城藩主鍋島元茂の江戸詰め」

報告③ 伊藤昭弘(佐賀大学地域学歴史文化研究センター長)

「鍋島勝茂の鷹狩」

当日は、八七名の参加者を得た。概ね三〇分ずつの各報告ののち、会場からの質問ペーパーをもとに、約四〇分の質疑応答を行った。また、アンケート

トも行った。その中では、地域の歴史を通じ、一次史料から歴史分析が行われる過程についての関心が高まったことがうかがわれた。今回のシンポジウムによって、地域の貴重な歴史史料を保存・分析・公開する活動への理解が、幾分なりとも進んだのではないかと感じている。また、及川報告については一月二日に、シンポジウム全体については二月五日に、いずれも佐賀新聞において紹介された。

(小宮木代良)

陽明文庫講座

二〇二三年一月二六日

公益財団法人陽明文庫、京都府立京都学・歴史館、東京大学史料編纂所(担当…古代史料部、「天皇家・公家の「知」の大系としての文庫・宝蔵研究拠点創設」プロジェクト)を主催、科学研究費・基盤研究(B)「摂関家伝来大規模史料群の目録精緻化による構造の解明と研究資源化」(研究代表者…尾上陽介)を共催として、京都府立京都学・歴史館 大ホールにて開催した。

本講座は、東京大学史料編纂所に研究拠点を置いた二〇〇七～一一年度科学研究費・学術創成研究費、二〇一二～一六年度・二〇一七～二一年度科学研究費・基盤研究(S)で開催してきた市民向け公開講座を継承し、東京大学史料編纂所古代史料部を中心に行ってきた研究活動の成果の紹介、東京大学が掲げるSDGs(持続可能な開発目標)一七のうち目標4「質の高い教育をみんなに」(すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する)の達成を目指す。

講演者・題目は次の通り。参加者は二四四名。

名和 修氏(公益財団法人陽明文庫長)

「予楽院茶杓筆筒について」

小林一彦氏(京都産業大学日本文化研究所長)

「後桜町天皇と近衛内前―女帝の和歌とまつりごと」

佐竹朋子氏(東京大学史料編纂所特任研究員)

「近衛家熙と『大唐六典』校訂事業」

本講座について、一二月二日(土)京都新聞でも取り上げられた。講座参

加者の約半数から得たアンケートの意見には、「毎年楽しみにしている」「講座を続けてほしい」「陽明文庫所蔵資料について、知りたい」といった意見が多く、好評である。また、陽明文庫所蔵史料のデジタル画像の公開等について知らなかったと答えている参加者も多いことから、研究成果が公開されていることを広く伝えるための機会としても講座を活用していくことが必要といえるだろう。

(田島 公)

公開講演会「近世寺院の世界―涅槃山西教寺と慧海潮音―」

二〇二四年三月六日

涅槃山究竟院西教寺は、東京都文京区に所在し、東京大学農学部キャンパスに隣接する浄土真宗の寺院である。同寺の所蔵史料は、二〇一〇年より佐藤もな・興津香織の両氏を中心に調査が進められてきたもので、二〇二三年度に東京大学史料編纂所共同利用・共同研究拠点による一般共同研究「涅槃山西教寺所蔵史料の研究資源化」として仏教学・日本史学の共同で調査を行った。本公開講演会は、共同研究の主催にて、一般財団法人東京大学仏教青年会ホールを会場に開催したものである。発表者と論議については左記の通り。

佐藤もな（一般財団法人東京大学仏教青年会）

「西教寺における調査概要」

町田 聡（文京区教育委員会）

「区指定文化財・西教寺表門について」

興津香織（日本大学文理学部）

「慧海潮音について」

林 晃弘（東京大学史料編纂所）

「池田冠山書状をよむ―西教寺文書にみる江戸の文人世界―」

一色大悟（京都大学学術研究展開センター）

「仏教のコスモロジーと慧海潮音」

講演会を通して、西教寺所蔵史料の概要、「赤門」として知られる表門の移設の経緯、近世後期の住職慧海潮音の学問・交流・思想などが、これまで活用されてこなかった史料をもとに明らかになった。参加人数は二八名。開

催にあたっては西教寺の皆様よりご支援を賜った。

(林 晃弘)

シンポジウム「古文書がひらく中世の吉野」

二〇二四年三月一日

二〇二四年三月一日一三時〇〇分～一六時三〇分、大淀町文化会館において、一般共同研究「吉野修験関係史料の調査」主催、東京大学史料編纂所・元興寺文化財研究所・大淀町の共催として、共同研究の成果報告会を開催した。基本的に対面開催であるが、関係者数名はZoomより参加していた。本共同研究では櫻本坊所蔵『大般若経』や前坊家文書など吉野所在史料の調査・撮影を進めており、特に前者についてはプリンストン大学所蔵の櫻本坊伝来史料と合わせて、史料群としての由来や性格を解明してきた。本シンポジウムはその調査結果を報告するものであり、関連するテーマについても問題提起をした。

開会に際して、プリンストン大学教授のトーマス・コンラン氏よりZoom経由でコメントがあり、それから以下のような講演・報告と問題提起が行われた。榎原雅治氏（東京大学名誉教授）の基調講演「山伏と中世社会―アメリカに渡った吉野山の史料から―」では、中世社会のなかでの修験者の役割を論じたうえで、櫻本坊伝来の中世文書が襖の下張りとして利用され、その後プリンストン大学によって購入・所蔵されるに至った経緯などを紹介した。

続いて調査研究報告が二本あり、服部光真氏（元興寺文化財研究所主任研究員）の「吉野地域史料としての櫻本坊所蔵『大般若経』」では、櫻本坊所蔵『大般若経』の構成や、鎌倉時代の一日頓写事業、地域史料としての価値などを論じた。堀川康史氏（東京大学史料編纂所准教授）の「『前坊家文書』にみる戦国時代の大和」は、子守社（現吉野水分神社）の神職を務めた前坊家伝来の文書を扱い、その内容や来歴に迫った。

次に問題提起のコメントが三人からあった。海上貴彦（東京大学史料編纂所助教）の「金峯山と貴族社会」は平安時代の貴族の金峯山参詣（御嶽詣）を概観し、特に藤原道長とその子孫の御嶽詣について述べた。三宅徹誠氏（元興寺文化財研究所特別研究員）の「金峯山寺一切経と櫻本坊所蔵『大般若経』」

は櫻本坊所蔵の一日頓写『大般若経』の表紙下張りに残された古写経に着目し、嘉保三年（一〇九六）慈応の一日頓写一切経と関連する可能性を指摘。坂本亮太氏（和歌山県立博物館学芸課長）の「豊臣家と吉野・高野・熊野」は子守社の再興に際して豊臣秀頼が寄進した『大般若経』（櫻本坊所蔵）に触れ、豊臣家による吉野・高野山・熊野三山の復興を関連付けて論じた。

問題提起ののち、松田度氏（大淀町教育委員会学芸員）と服部氏を司会としてパネルディスカッションが行われ、史料の所蔵者からもコメントを得た。当日は九〇名ほどの参加者（数名はZoomからの参加）を得て、盛況のうちに終了した。また、同時期（三月六日～四月八日）に同所で開催された関連企画展「読んでみよう！吉野の古文書」にも本共同研究の成果が反映された。

（海上貴彦）

人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業フォーラム 「データ共有・利活用促進のための研究基盤」

二〇二四年三月一日

日本学術振興会（以下、JSPS）は、人文学・社会科学における研究データを対象に、分野や国を超えて共有・利活用するため、国内外の共同研究等を促進することを旨とし、二〇一八年年度から二〇二三年度までの五年間のパイロット事業として「人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業」（以下、構築推進事業）を実施した。構築推進事業において、拠点機関（社会科学は四機関、人文学は一機関）が、それぞれ運用するデータアーカイブについてメタデータ整備等を行い、当該メタデータを、国立情報学研究所が構築した人文学・社会科学総合データカタログDCaへ掲載し、公開してきた。これにより、各拠点機関が提供した人文学・社会科学のデータを横断的に検索することが可能になった。二〇二三年度に開始した「人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業」（以下、強化事業、課題番号：PJ500320231001）では、構築推進事業の成果等を踏まえ、人文学・社会科学のデータ共有・利活用を促進するデータプラットフォーム等の基盤の充実・強化を図り、データ分析に基づく人文学・社会科学研究の発展、国内外の共同研究の促進等を旨としている。この目的を達成するため、「中核機関」と「拠点機関」を置き、人文学・社会科学の研究に利用可能なデータ

を保存し、国内外において共有する活動を推進していく。二〇二三年一〇月、史料編纂所は社会科学研究所とともに中核機関として認定された。神戸大学附属図書館および奈良文化財研究所が拠点機関として認定された。また、DCaを中心とした本事業における情報システムの担当機関として国立情報学研究所が選定された。

強化事業としての体制、および、中核機関および拠点機関における取組などを報告し、データを中心とした研究基盤のあり方について議論することを目的とし、いわば強化事業のキックオフという位置づけにて本フォーラムを、二〇二四年三月一日、東京大学福武ホールラーニングシアター（オンライン併用）にて開催した。参加者は、現地参加五五名、オンライン二二名だった。本フォーラムは、玄田有史社会科学研究所所長を総会司会として進行的た。まず、開会の挨拶を本郷恵子史料編纂所所長が行い、廣松毅東京大学名誉教授から構築推進事業の取組と強化事業における期待を頂戴した。続けて、強化事業全体の説明、および各拠点機関より、これから行う取組について報告があった。それぞれの報告者等は次のとおりである。

・三輪 哲（東京大学社会科学研究所）「中核機関としての本事業全体の取組み」

・山田太造（東京大学史料編纂所）「東京大学史料編纂所における取組」

・横内陳正（東京大学社会科学研究所）「SSJデータアーカイブにおける取組み…これまでの成果と今後の展望」

・奥村 弘（神戸大学）「神戸大学附属図書館震災文庫サンテレビ映像資料公開を事例にして」

・馬場 基・高田祐一（奈良文化財研究所）「報告 奈良文化財研究所」

・朝岡 誠（国立情報学研究所）「国立情報学研究所の取組…人文学社会科学総合データカタログの整備と強化」

それぞれの報告は、強化事業のウェブサイトより公開されているので詳細はそちらを参考にしたい（https://www.hi-i-tokyo.ac.jp/div/news/2024-03-11_materials/）。

パネルディスカッションでは、総合司会である玄田氏により進行し、報告者および名字学文部科学省研究振興局振興企画課学術企画室長がディスカッ

サントとして参加した。特に名子氏から、データを中心とした人文学・社会科学に対する文部科学省としての政策について紹介があった。その後、パネルディスカッションにおいては強化事業に対する期待と課題を中心として議論を進めた。

強化事業は開始したばかりであることから、今後も定期的に事業としての成果を報告していく予定である。その中で、本事業における期待と課題をどのようにクリアしていったかを明示できるよう取り組んでいきたい。

(山田太造)

人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業人文学データシンポジウム「人文学研究資源としてのデジタルデータ」二〇二四年三月一二日

二〇二四年三月一二日、東京大学福武ホールラウンディングシアター(オンライン併用)にて、人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業人文学データシンポジウム「人文学研究資源としてのデジタルデータ」を開催した。現地参加は三〇名、オンライン参加は六三名だった。本シンポジウムは、日本学術振興会による「人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業」(以下、強化事業)に関連するイベントとして位置づけられる。前日に行われた人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業フォーラムとは異なり、人文学におけるデジタルデータに焦点を絞った。将来にわたって、持続的・安定的にデータを提供・共有していくためのその基盤形成と運用について、人文学データを提供している機関の状況を報告し、人文学研究を進展していくために解決すべき研究データにかかわる課題について議論することを目的とした。本シンポジウムでは、中村寛史料編纂所助教が総会司会として進行し、まず本郷恵子史料編纂所所長より挨拶いただき、次に山田太造史料編纂所准教授より開催趣旨の説明があり、その後各機関における報告がなされた。それぞれの報告者等は次のとおりである。

・山田太造(東京大学史料編纂所)「近代日本史料データの永続的提供とその課題」

・馬場基(奈良文化財研究所)「奈良文化財研究所における文化財情報提供の取り組み」

・後藤真(国立歴史民俗博物館)「国立歴史民俗博物館におけるデータおよびデータセット公開の現状と課題」

・佐々木和子(神戸大学附属図書館)「神戸大学震災文庫の取り組み」

・貫井裕恵(神奈川県立金沢文庫)「中世寺院史料とデータベース―断片的史料の復元をめざして」

それぞれの報告内容は強化事業のウェブサイトより公開されているので、詳細はそちらを参考にさせていただいた(https://www.hi-tokyo.ac.jp/di/news/2024-03-12_materials)。

各報告の後、大向一輝東京大学大学院人文社会系研究科准教授の司会によりパネルディスカッションを行った。話題としては、人文学データとしての固有と共有の課題、人文学データの作成者・管理者・利用者間でのコミュニケーション、データ利用等における相互運用性、データそのものの信頼性などが挙げられた。

このシンポジウムでは、データの提供者側での議論を中心として行った。次回では、データに利用者側での議論を含めて人文学データのあり方について議論を行いたいと考えている。

(山田太造)

二〇二三年度 金鶏会館連続公開講座「古典から読み解く歴史学・文学」

東京大学史料編纂所(担当：古代史料部、「天皇家・公家の「知」の大系としての文庫・宝蔵研究拠点創設」プロジェクト)を主催、県立長野高校を後援、一般社団法人長野教育文化振興会・一般社団法人長野高校金鶏会の協力を得て、金鶏会館(県立長野高校同窓会館)「登録有形文化財」にて連続公開講座を実施した。

本講座は、東京大学史料編纂所に研究拠点を置いた二〇〇七―一一年度科学研究費・学術創成研究費、二〇一二―一六年度・二〇一七―二一年度科学研究費・基盤研究(S)で開催してきた市民向け公開講座を継承し、登録有形文化財の建物を会場に、対面で地元地域の要望・関心に則しながら、東京大学史料編纂所古代史料部を中心に行ってきた研究活動の成果の紹介、東京大学

が掲げるSDG(持続可能な開発目標)一七のうち目標4「質の高い教育をみんなに」(「すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する」)の達成を目指す。

講演者・題目は以下の通り。参加者は計五三九名。

第一回 二〇二三年九月二三日(土)

田島 公(東京大学史料編纂所古代史料部門教授)

「ヤマトタケルと甲斐・科野

―倭王権の「東方十二道・東国」進出伝承の再検討―

第二回 一〇月一四日(土)

鈴木景二(富山大学学術研究部人文科学系教授)

「江戸人の善光寺・草津温泉旅行―観光コースと関所抜け―

第三回 一二月一八日(土)

川尻秋生(早稲田大学文学学術院教授)

「信濃源氏・平賀義信と初期鎌倉幕府」

第四回 一二月二日(土)

高岸 輝(東京大学大学院人文社会系研究科教授)

「中世絵巻に描かれた寺社巡礼と信濃・善光寺の聖域

―「一遍聖絵」「遊行上人縁起絵巻」を中心に―

第五回 一月二〇日

河野貴美子(早稲田大学文学学術院教授)

「空海がもたらしたもの、生み出したもの―九世紀初頭の「文」の風景―

第六回 二月二四日(土)

福島正樹(信州大学史資料センター特任教授)

「人々はどういうに税を納めたか―古代の調庸制を中心に―

第七回 三月二日(土)

田島 公

「言問橋」「言問通り」の地名の由来と『武蔵国浅草寺縁起』

―「こととひ」地名と武射国造領域の「豊島屯倉」―

なお、講演内容の一部は、『新発見史料・新解釈による古代・中世前期の信濃―「信濃史料」古代編(二・三巻)に係る未収史料収集に関する基礎

的研究』の成果」(東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二二―二五)に収めた。(田島 公)

外国人研究員 研究成果報告

「京都と吉野…南北朝時代の菊池氏、楠木氏、島津氏、山名氏の比較研究」

シモン・チュエルカフスキ

ボン大学・研究員

二〇一七年一月一六日―二〇二三年六月三〇日

東京大学史料編纂所外国人研究員として滞在した期間中における研究活動は、主に以下二つのカテゴリーに分けている。

一、「権力と統治―文化横断的アプローチから見た前近代史上の諸形態」プロジェクトに関する研究活動

ボン大学共同研究センタープロジェクト「権力と統治―文化横断的アプローチから見た前近代史上の諸形態」におけるサブ・プロジェクト「中世日本における王権の委譲と分割による支配エリート再生」での作業として、東京大学史料編纂所の教員から各種知見を仰ぎつつ、鎌倉時代地頭データベースの開発に従事した。その成果の一端を、東京大学史料編纂所主催の国際研究集会「日本中世史データベースの国際比較」(二〇二一年五月二八日開催)において、「ボン大学の地頭データベース…由来・現在状態・前途」として報告を行った。同データベースは現在、公開に向けて準備を進めている。これと並行して、プロジェクトの成果報告シンポジウムとしてボン大学で開催された「Core, Periphery, Frontier: Spatial Patterns of Power」にも、開催準備のほか、発表原稿の翻訳と資料集編集に従事した。

二、個人研究に関する研究活動

博士論文では、研究テーマを南北朝時代の菊池氏と島津氏の人物に関する比較研究に設定し、関連史料の収集と分析を進めた。『大日本史料』『南北朝遺文』などの既刊史料集に加え、「肥後阿蘇家文書」「山田家文書」などの東京大学史料編纂所に架蔵される影写本などを用いて、史料画像も通覧し確認

を行った。その結果、数百点以上の関連史料を収集できた。研究方法を定量分析に置いていたため、分析と検討に時間をかけながら、博士論文の執筆を進めている。その概要については、東京大学史料編纂所主催の国際研究集会「ドイツにおける日本中世史研究の現在」（二〇一八年三月九日開催）において、「史料から見られる南北朝時代の菊池氏の倫理・精神状態」と題して報告を行った。

「江戸初中期の長崎における混成宇宙観の形成と成立」

ダニエル・サイジィモンテイロ
パリ・シテ大学

二〇一九年八月一日～二〇二三年八月三十一日

本研究は、江戸初中期、特に寛永七年（一六三〇年）から享保五年（一七二〇年）の間に、長崎で発展された独特な宇宙論学説の形成に注目する。筆者は博士論文を執筆するため、近世長崎における唐通事の古文書や家譜、「天学」に関する漢籍、及びオランダ商館日記という史料の対比と分析を行なった。主に史料編纂所で編集された和訳オランダ商館日記をもとにして、多様な天文・地理学的な知識がどのように長崎から江戸の学者と幕府までに届いたかという問題を検討した。また松方冬子教授のオランダ史料研究セミナーに参加し、オランダ国立公文書館のデジタル化された江戸参府などを記述する原文オランダ商館日記を解読し、第八代將軍徳川吉宗が求めた改暦・日本総図などの作成に必要な情報収集政策を明らかにした。そのほか、近世長崎の「天学」を代表する西川如見の著作を中心に、ヨーロッパと中国由来の知識を交配する長崎の混成宇宙観を示す書籍の書誌学的調査を行なった。史料編纂所所蔵の書物を始め、東京大学附属図書館にもある一次・二次資料を参照しつつ、江戸中期における長崎・京都・江戸の学界と出版文化を繋げる知的ネットワークに焦点を当てた。

研究滞滞の四年間、論文二件を学術雑誌に掲載し、オンライン・対面両方の国内外の学会や研究会で数回も調査結果を報告することがあった。また毎月に行われている洋学史学会若手部会の例会に参加し、発表することもある。

た。最後、二〇二三年八月に博士論文を完成させ、日本を離れた後博士号を取得した。

滞在中、松方先生の貴重なご指導とご助言を賜り心より感謝申し上げます。

「近世東アジア海域における強制的な人的移動」

劉 洋

オックスフォード大学

二〇二二年四月一日～二〇二四年一月三十一日

私は外国人研究員として、二〇二二年四月から二〇二四年一月まで、合計二ヶ月間、史料編纂所に滞在することができた。今回の来日は、私の博士論文「近世東アジア海域における強制的な人的移動」をめぐる調査や研究の目的であった。在籍期間中の活動内容をまとめると、以下の通りである。

（一）史料の調査。編纂所の書庫蔵書をフル活用し、イエズス会士関連の欧文史料、一四世紀から一七世紀にかけての漢文や和文史料を広く集めることができた。また、書庫に所蔵された学界未見の一六世紀の中国被虜人が残した日本記録を発見することができ、現在は福建師範大学所蔵の同史料の別刻本とともに、史料整理及び出版作業が進んでおり、二〇二四年度内に台湾の出版社から出版予定である。

（二）学会等での口頭発表。二〇二二年一月には史学会で「一六・一七世紀ポルトガル人による中国奴隷貿易とイエズス会の反応」を発表したほか、アジア交流史研究会や東アジア古典籍研究会で博論の一部及び新発見した史料について私見を述べた。

（三）授業の参加及び学術交流。招待教員岡美穂子先生のゼミをはじめ、六反田豊先生や渡辺美季先生のゼミを聴講させていただき、多様な知見や研究助言をいただき、大変有意義な時間を過ごすことができた。また、渡辺ゼミと共に沖縄研究合宿に参加し、国立歴史民俗博物館の村木科研との交流もした。

（四）現地の史跡調査。在籍期間中に京都にある被虜人が滞在した寺、福岡や鹿児島に被虜人跡を現地調査することができた。

以上のように、多くの研究成果を得ることができ、これらの成果は今後の

博論執筆に大いに資すると考えている。最後に、今回の来日を問題なく実現し、日本での研究生生活を順調に過ごせたのは、招待教員の岡美穂子先生、事務局及び図書室の職員の皆様のおかげである。この場を借りて、心から深く感謝申し上げる。

近代以前の日本における経済思想

イーサン・セーガル

ミシガン州立大学

二〇二二年六月三〇日～二〇二三年五月一五日

本研究は、平安時代、鎌倉時代、室町時代の経済思想をより深く理解することを目的とする。これらの時代は、同時代の中国やヨーロッパ、さらには徳川時代の日本とは大きく異なり、経済問題をどう考えていたのかを明確に示す史料が少ない。古代・中世の経済思想の考え方を得るため、他の目的で書かれた資料（例えば、古記録、説話、御伽草子、随筆など）を読み、それらが前近代日本人の経済思想について何を解明できるかを検討する。本研究では、網野善彦、桜井英治、本郷恵子などの日本の研究者の研究成果を基に、幅広い比較枠組みを導入したいと考えている。調査対象となる日本の一次資料の例には、『日本霊異記』、『沙石集』、『古今著聞集』などの説話、『文正草子』などの御伽草子、『徒然草』などの随筆などがある。その研究の初期段階の結果を早稲田大学（二〇二二年一〇月）と京都のEcole française d'Extrême-Orient（二〇二二年一〇月）で発表した。

もう一つのトピックは、経済思想に関する前近代の考え方が近世および近代にどのように影響を与えたのかどうか、である。一例としては、『太平記』に初めて登場する青砥藤綱の話が挙げられる。藤綱は、滑川に失われた銭十枚を取り戻すために銭五十枚を費やし、銭の循環の重要性についての教訓を語る。私の研究が示すように、そのストーリーの例は、多胡辰敬などの戦国武将、井原西鶴、式亭三馬、曲亭馬琴などの江戸時代の作家、塚田大峰などの儒生の著作に登場する。そして明治、大正時代の英米で出版された日本に関する多くの本にも、青砥と銭のエピソードが含まれている。この研究の一

部をミシガン大学（二〇二三年一月）で発表した。もう一つの例は、徳政と徳政令である。古代に日本後紀、中世に永仁徳政令、嘉吉の乱、そして徳川時代の徳政令へと、その意味が大きく変化していったことが挙げられる。

経済思想に関するこのメインプロジェクトに取り組むことに加えて、いくつかのサイドプロジェクトも行った。一つは北条政子の生涯を調べるために明月記を読み、その調査結果の一部を韓国の大邱で開催されたAsia Asia会議（二〇二三年六月）で発表した。もう一つは現代のテレビ番組（大河ドラマなど）がどのように日本の歴史（特に中世史）を描いているか、その予備的な考えを二〇二三年一月のMidwest Japan Seminarに発表した。さらに「英語圏の日本中世経済史研究」という論文を、『海外の日本中世史研究』（黄霄龍・堀川康史編）に執筆した。

「天朝の遺文」：近世東アジアにおける書籍の環流と歴史叙述」

呉 政緯

国立台湾大学歴史学系博士課程

二〇二二年九月一日～二〇二三年八月三一日

本研究は、中国明清時代の出版物（漢籍）が東アジア世界での流通過程において、中国政府が果たした役割や書籍輸出に関する諸問題への対応を探究するものである。外国への書籍輸出について、中国政府は全面的かつ持続的に規制を施しており、その始まりは明の嘉靖元年（一五二二）にさかのぼる。先行研究では、一五二二年より実施された会同館の「門禁政策」は、北京における朝貢使節の移動の自由に対する規制として単純に捉えられがちだが、この政策変化のもつ歴史的意義や影響が捨象されている。それに対して本研究では、一五二二年以降、朝貢使節の交易活動がすべて会同館に限定され、史書の購入に関しても明の官憲によって禁じられたことに注目し、一五二二年を明代における対外政策の大きな転換点として位置づけた。

一五二二年以降、朝鮮や中国南西の土司は、確かに書籍輸出の制限を受けていた。しかし、この制限が日本使節団にも課されたかどうかは不明である。そこで本研究では、『笑雲人明記』や『策彦入明記』など日本の「入明記」

史料を中心的に検討し、明代における書籍輸出制限の実態に迫ることを試みた。これらの史料に関しては、須田牧子先生による長年の整理・研究がある。

『策彦入明記』には、「三千戸が会同館に入り、易買の事を証明した」という記述があり、ここでの「三千戸」とは、会同館の監視・管理を担う錦衣衛であると推測される。また、『笑雲入明記』には、遣明使の朝会参加や寺院訪問についての記載はあるが、会同館開市や北京の市場に出入りする記録が見当たらない。このようなことは、日本の遣明使が一二二二年前から会同館の門禁による制約を受け、交易が会同館内に限定されていた可能性を示唆していると考えられる。しかし、『策彦入明記』における北京での貿易活動に関する記述は、錦衣衛による「易買の証明」や「北絹の購入」に限られており、これらが会同館開市を指しているのかは定かではない。そして、日本使節が漢籍購入の制限を受けていたかについても、さらなる検討が必要である。それを今後の研究課題とする。

「正長の徳政一揆の原因に関する再検討」

トーマス・ローランド・ブース

ケンブリッジ大学

二〇二二年九月一日～二〇二三年九月一日

博士課程の研究の焦点は、正長元年（一四二八）に醍醐で発生した徳政一揆の原因と、それに参加した「地下人」の動機を明らかにすることであった。

徳政一揆の震源地を特定し、その後の畿内全域への拡大過程を明らかにすることは、この研究の重要な焦点である。醍醐寺座主の満済が、この事件に関する記録で、醍醐の「徳政事」が「江州より沙汰出だすなり」と記したことによって、学者たちは徳政一揆の震源地として近江国に注目するようになった。しかし、史料編纂所学在中、『醍醐寺文書別集』に越前国志比庄での「御徳政」が数週間前に「停止」されたという記録を発見した。この「御徳政」の起源は不明だが、本家東寺と地頭波多野との間で、年貢を巡る争いが関連している可能性がある。この志比庄での「御徳政」は近江国の徳政に先行することから、一四二八年に近江国が徳政の中心地であったという仮

定を再考する必要があると思う。この点については史料編纂所の外国人研究員室で開催された「第三回外国人研究員研究会」で研究結果を発表し、多くの貴重な意見を頂戴した。

また、一四二八年の徳政一揆以前の醍醐とその周辺地域の社会経済状況についてもっと知りたいと思った。史料編纂所で閲覧できた『醍醐寺文書』に収録された「権大僧都隆璋買得田地目録」からは、醍醐での田地の売買について深く理解できた。「田地目録」に登場する田地の多くは、以前は醍醐の寺院や庵の所有で、醍醐寺に質入れされたものであった。徳政にかこつけて、これらの寺や庵は、頻繁に質入れされた田地の返付を醍醐寺に要求した。また、禅宗の熱心な信者であった室町殿足利義持は、ある時に禅宗の庵の所有に関する命令を發布し、地元の緊張を高めた。この事実は、徳政一揆が発生した背景を理解する上で重要である。これらの研究結果を「第96回室町期研究会例会」で発表して、たくさん貴重なフィードバックやアドバイスを頂戴した。

西田先生と史料編纂所の温かいおもてなし、東京大学の先生方からの貴重なご指導、そして研究に対する国際交流基金からの資金援助に心から感謝している。

「院政期の「別所」の成立と中世仏教の展開」

ジョナサン・スマス

ハーバード大学

二〇二二年九月一日～二〇二三年九月一日

史料編纂所で使った主な史料 村山修一編『葛川明王院史料』吉川弘文館、一九六四年／『峰定寺文書』

史料編纂所において、私は別所における遁世僧の活動について、博士論文に関する研究のために多くの史料を調査したが、「葛川明王院史料」とともに中世の葛川絵図を通じた研究から始めた。私の研究の中心となったもう一つの主体は「峰定寺文書」と呼ばれる文書群にもとづいており、これは多くの平安時代の文書を含んでいるが、いままで研究されてこなかった。菊地大

樹教授とともに研究を進める中で、私はこれらの史料を翻訳し、これと密着した博士論文の重要な部分を執筆することができた。

私はまた、日本の学界において、これらの発見を発表した。冬学期には、京都大学京都アジア研究グループにおいて、葛川や中世別所が炭の生産に果たした役割について研究発表した。この研究は私が出席した東京大学大学院のセミナーでも報告した。のち春休みには、京都市花背地域の住民のために、「峰定寺文書」原本についての史料学的研究を報告した。また、東京大学の宗教史研究グループにおいて、経塚の考古学的研究について発表した。夏学期・秋学期に菊地教授の大学院セミナーに参加し、両学期とも同じ分野で研究する大学院生や教員と交流することができた。週の毎日を、史料編纂所共同研究室での研究に費やし、そこで他国の研究者とも交流することができた。

私はまた、現在進行中の共同研究に参加することにも時間を費やした。一年の間に、私は拓本調査チームとともに和歌山県高野山に出かけ、何世紀も山上へと続く参詣道を指し示してきた町石を調査した。このチームは史料編纂所の受け入れ教員（菊地教授）とともに、奈文研や滋賀県立大学の人文情報学者・考古学者らの共同プロジェクトによって主導されていた。私はまた、峰定寺に関係する花背地域の方々と共同研究を開始した。二〇二四年春には、このプロジェクトを継続するため日本に戻ってくる予定である。花背での調査を続けるとともに、私は長野や南九州の一次史料や遺跡にも注目し、日本中世宗教史研究を進展させていくつもりである。

Comparative Research on Regional Buddhist Temples of Japan and China, 15c-17c

黄霄龍

二〇二三年四月一日～二〇二三年九月三〇日

史料編纂所での二〇二三年度の研究は、二〇二一～二〇二二年度の研究課題「日本中世後期における宗教勢力と社会転換―京都と北陸地域の関係を中心に」（日本学術振興会科学研究費助成事業特別研究員奨励費、課題番号21F21004）の成果を踏まえて、新たに展開したテーマである。主として、(1)これまで行ってきた越前・若狭の寺院の研究で扱ってきた古文書や寺社縁

起の位置付けを史料論の視点から俯瞰的に再考し、(2)若狭の明通寺を事例に、明清中国の華南地域における仏教寺院との比較を踏まえて、日本中世の地方寺院の「民衆的な性格」について検討した。これらの検討の成果の一部はそれぞれ、上海師範大学とプリンストン大学で行った研究会で報告した。また、未刊行の『若狭神宮寺文書』については史料編纂所所蔵の写真帳を利用し、初歩的な確認を行った。

二〇二三年度在籍期間の活動と成果は以下の通りである。

【単著】『日本中世の地方社会と仏教寺院』（吉川弘文館、二〇二四年一月）
【編著】（共編・共著）『海外の日本中世史研究：「日本史」・自国史・外国史の交差』（勉誠社、二〇二三年一〇月）

【口頭発表】

・「日本中世地方寺院史料論（日本中世地方寺院史料論）」、上海師範大学亜細史青年学者工作坊「東亜宗教社会史的史料与方法」、二〇二三年七月一日。
・「Top-down or Bottom-up: Rethinking Local Temples in Medieval Japan through Comparison with Ming-Qing China」、Princeton University, Center for Culture, Society and Religion, Workshop “Thinking through Minshū Bukkyō: Popular Buddhism and the Study of Pre-modern Japan”, September 22, 2023.

【参加した所内の研究会】

史料編纂所一般共同研究「日本史用語グロッサリーの再構築にむけて」の『沙汰未練書』翻訳ワークショップ、二〇二三年七月一・二日

「叡尊の諸信仰と中世南都仏教」

クインター・デイビッド

アルバート大学

二〇二三年四月二〇日～八月三一日／十二月一四日～二〇二四年一月五日

史料編纂所で使った主な史料 長岡龍作「仏教と造形―信仰から考える美術史」二〇二一年／近本謙介「ことば・ほとけ・図像の交響：法会・儀礼とアーカイヴ」勉誠出版

二〇二三年度、私は史料編纂所での研究について、長期プロジェクト「諸信仰と中世奈良仏教―生きた宗教における発見―」（二〇二二―二六、カタダ社会科学・人文科学研究委員会（SSHRC）の二つの要素を中心に実施した。

第一の要素は、中世の釈迦牟尼信仰に関する研究であり、その予備的成果をワークショップ「民衆仏教を通して考える」で発表した（二〇二三年九月二二日、ワークショップ「Thinking through “Minshū Bukkyō”: Popular Buddhism and the Study of Pre-modern Japan」）。この研究は、私が現在執筆中の中世日本の観尊（一一〇一―一一九〇）と諸信仰に関する単行本の一章を構成する基礎的な部分にもなる予定である。第二の要素は、観尊の初期教義と実践的活動に関する研究である。私はこの研究成果を、二〇二三年一月二〇日にテキサス州サンアントニオで開催されたアメリカ宗教学会（AAR）年次大会で初めて発表した。この研究は、オックスフォード大学出版局から出版予定の『The Oxford Handbook of Lived Buddhism』(edited by Courtney Brunz and Brooke Schedneck) の一章として受理されたところである。

「前近代東アジア地域の経済交流と商慣習の変容」

ジブル・フランソワ

二〇二三年九月一日―二〇二三年十一月一日

東京大学史料編纂所は、マカオ文書館、東インド会社文書館、宣教・修道会文書など、豊富な史料の複写を所蔵しているため、多くの一次史料を集めることができた。

東京大学では、羽田正教授（東京カレッジ）とその研究チーム、また旧い友人である浜下武志教授（東京大学名誉教授、東洋文庫）と研究懇談をおこなった。史料編纂所の岡准教授は私の研究滞在のための資金を鹿島学術振興財団から取得してくださり、東アジアの海上金融やそのネットワークの歴史についての重要な知見を授けてくれた。また東京大学文学部では、東洋史研究室の島田竜登准教授がセミナーを開催してくださり、文学部の研究者や学

生たちと私の最新の研究について議論することが出来た。その他、九州大学（アントン・シユヴァイツァー教授）と京都大学（村上衛教授）とも研究懇談をおこない、今後の研究を進める上での史料や研究状況についての知見を交換することができた。

この滞在において得た人的交流を元に、次回の世界経済史学会（二〇二五年、ルンド）において日本人、ヨーロッパ人の研究者などを交えたパネルを企画する予定である。また今回の日本滞在において新しく得た人的ネットワークをもとに、新しい共著の出版計画も進行中である。

「江戸初期の資源管理（鉱山・鉱石を中心に）」

バツ・ジョシユア

バルセロナ自治大学

二〇二三年一〇月一日―一二月八日

史料編纂所のおかげで四年ぶりに来日し、文献・現場調査を行うことができた。研究テーマは二つあり、一つ目は鉱山・鉱石を対象にした十六・十七世紀の資源管理である。石見銀山・佐渡金銀山などの例は海外でも知られているが、今回は図書室取材で生野、院内、長登など、列島に渡る鉱山に関しての先行研究を検討し、山口啓二が研究した梅津政景日記や、甲州金山を描写する一次史料の予備的調査もした。また一〇月中旬には、京都大学の岩城卓二教授が指導するフランスからの研究者チームと連携して、笹ヶ谷銅山（津和野）と長登銅山の現場調査も行った。今後目指すのは金・銀の生産量を測ったり、分析したりするよりも、近世日本を「鉱山社会」として研究していくことである。

もう一つのテーマは肥前名護屋を立ち上げるために必要だった兵站・物流と、そこで日々を過ごしていた大名の経験である。ただ、これは予備的なもので、参考文献を把握するための調査であり、その結果を、私が所属しているバルセロナ自治大学での研究者チームに報告し、チームが担当している文禄・慶長の役（壬辰戦争）に関する多言語デジタル参照文献を更新した。

そして、研究を行うと同時に、史料編纂所の松方冬子教授のゼミに参加さ

せていただき、英語圏の論文を議論した。また、京都では立命館大学の谷徹也教授、東京では明治大学の清水有子教授、それぞれの研究室に伺い、相談させていただいた。また京都では、他の外国人研究員との再会もでき、研究テーマについて、お互いに意見を交換することができた。

滞在の成果として、今年三月清水教授がバルセロナで「イベリアン・インパクト」に関して発表された。また、去年の十一月月上旬に欧州研究評議会へ五年間の助成金の申請書を提出することができた。提案したプロジェクトはまさに「鉾山社会」の近世日本を取り上げるものであり、史料編纂所での調査が申請に不可欠であった。今現在（二〇二四年春）までに、第一次審査を通過して最終段階に至っており、結果は八月に通知されるはずである。また、織豊期・江戸初期の鉾山管理を分析した論文を完成し、来年論文集に掲載される予定である。今後は、肥前名護屋で集まっていた大名が関ヶ原合戦以降の政治に与えた影響について研究し、「肥前名護屋世代」（英：The Hizen Nagoya Generation）として評価する論文の作成に取り掛かるつもりである。

東京大学史料編纂所研究成果報告一覧

二〇二三年度

番号	書名	研究費名	責任者
1	音羽山清水寺中世文書	科学研究費補助金基盤研究(B)	村井祐樹
2	陽明文庫講座図録5	天皇家・公家文庫プロジェクト	田島公
3	（公財）静嘉堂調査報告書 静嘉堂所蔵古写経群の調査と研究	共同利用・共同研究拠点（一般共同研究）	稲田奈津子
4	東大寺文書の近世・近代	共同利用・共同研究拠点（一般共同研究）	遠藤基郎
5	新発見史料・新解釈による古代・中世前期の信濃―『信濃史料』古代編（2・3巻）に係る未収史料の収集に関する基礎的研究―の成果―	共同利用・共同研究拠点（一般共同研究）	田島公
6	島津家文書『御文書』外中世文書集	科学研究費補助金基盤研究(B)	村井祐樹
7	内裏造宮関係基礎史料集	共同利用・共同研究拠点（一般共同研究）	新井重行